
異世界で歩む第二の人生

鍵一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で歩む第二の人生

【Nコード】

N3045H

【作者名】

鍵一

【あらすじ】

不幸な事故で死んでしまった倉麻健年は何故か神様に『ゼロの使い魔』の世界に飛ばされてしまう。健年はこの世界で幸せな人生を送ることが出来るのか!?

第一話（前書き）

今回初めての投稿ということになります。なので少々拙い文章になってしまいかも知れませんが、よろしくお願いします。

第一話

ここは何処だろう？

現在、僕は森の中にいた。

「どうなってるんだ」

そう言いながら辺りを見渡す。そこにあるのは鬱蒼と生い茂った森ばかりで思考がまったく追いつかない。

少し落ち着いて考えよう。

僕の名前は倉麻 健年。

17歳	高校三年生	身長	175cm	体重	60kg
血液型	B型				

うん。ここまで言えるなら記憶喪失とかではないな。
次に今日は何をしていたか思い出して見よう。

僕はいつもどおり学校に行った。

教師の話を聞き流し、さつさと家に帰ったはず。……っ！？そうだ。
思い出した。

あの時、車が突っ込んで来たんだ。そして、僕は轢かれて死んだはず。

なら、何故僕はここにいる？

本当は死んでいなかった？

いや、もしそうなら、僕がこんな森の中にいる説明がつかない。轢

かれてから目を覚ましたのなら、救急車の中か病院にいるはずなのだから。

もしかしたら、死後の世界かもしれないな。

「まあ、どうでもいいか」

そう思った僕は考えるのをやめた。

考えても分からないことをいつまでも考え続けるのは面倒だ。

「とりあえず、人を探すか」

自分でもこんな考え方はどうかと思うが、元からこうゆう性格なのではない。

まあ、案ずるより産むがやすし、っていうことわざがあるぐらいだし、考えるのは行動してからにしよう。

「どっちに行こうかな」

適当に歩いていると分れ道があった。

看板があっただけど字が読めなかった。しかも、今まで見たことのない字だった。

ここは外国なのかな？

もしそうなら言葉が通じないかもしれない。

「まあ、何とかなるか」

我ながら、見事な思考放棄だと思いながら右の道に行く。

森の中をずっと歩き続けるのは初めての経験だから、足が面白いぐらいに疲労を訴えてくる。

途中で何度か休憩を挟みながら歩いていると、何か妙な音が聞こえてきた。

「水の流れる音だ」

その音が聞こえる方に行くと。

「川だ。この川に沿って歩けば人里に着けるかもしれない」

人は川の近くに住む。それは今も昔も変わらない。

例えばここが外国だろうとこの理屈は通じる……筈だ。

若干不安になりながら十分程歩くと、宮殿の様な建物が見えてきた。なんかこういうのテレビで見たことあるな。世界、不思議い発見！みたいな番組で。

「ギリシャ神話にでも出てきそうな建物だな」

とりあえず、近付いてみる。

何かヤナ雰囲気だな。だけど何時までも此処に立ってても意味ないし、入ってみるか。

宮殿の中は自分が考えていたものより案外広かった。辺りには特におかしいところはない。……ある一部分を除いて。

玉座があるのは別にいい。なんかとってつけたような赤い絨毯があるのも構わない。けど、その玉座に座っているお爺さんだけはいただけない。

「我が名はゼウス。この世界を統べる全知全能の神だ」

いきなり何を言っているんだろう？初対面の人に言う冗談じゃないぞ。

まさかボケてるとか？

それとも頭がオカシクなってるとか？黄色い救急車を呼んだ方がいいかもしれない。

あれって普通に119で呼べるんだっけ？

「おい、その様な可哀相なお年寄りを見る目で我を見るな！！」

おつといけない。早くこのお爺さんの相手をしてあげないと可哀相だな。

きっと老いた所為で誰にも相手にされなくなって寂しかったんだろう。

「お爺さん。僕の名前は倉麻健年です。お家の方はいらっしゃいますか？」

「何度も言わせるな！！別にボケてもおらんし、頭がおかしくなつとる訳でもないわ！！」

ああ、怒らせちゃった。からかいすぎたか？

というか、このお爺さん。こんなに怒らせて大丈夫だろうか？高血圧だったらどうしよう……。

「分かりましたから。落ち着いてください」

「あ、ああ。スマンな。もう落ち着いた。さて、お前は自分のおかれている状況が理解出来ているかの？」

「まあ、僕が見ず知らずの土地に飛ばされたことはわかります」

「この時点ではそれが限界かの。とりあえず結論から言わせて貰うと、此処は異世界じゃ」

いきなりとんでもない事を言い出す人だな。この自称神様は。まあ、それが一番しっくりくる答えだと思ってる僕も少々おかしいのかもしれないけど。

「此処が異世界だとすると僕がここに居る理由は何ですか？僕は死んだはずなのに……」

「お主が死んだ直後に我がお主の魂をこの世界に現界させたのだ。ここにお主を呼び寄せた理由は別の世界で第二の人生を歩んで貰おうと思ったからだ」

この自称神様は何かとんでもない事をおっしゃりやがった。

それに、僕にそんなことをする義理なんてないのに。

「ええっと。いろいろ言いたいことがあるけど、別の世界で第二の人生を歩むというのはどういことですか？」

「うむ。お主には『ゼロの使い魔』の世界に平賀 才人の代わりに召喚されて貰おうということだ」

何故『ゼロの使い魔』の世界何だろう？他にもいろいろあるだろうに。

まあ別にどうでもいいけど。

「と言う事は、僕はルイズにガンダールヴとして召喚されるのか」

「そうだ。お主にはその世界で第二の人生を歩んで貰う」

第二の人生と言われても『ゼロの使い魔』では命掛けの戦闘があるし、とてもじゃないが幸福な人生を歩むことは出来ないんじゃないか？

僕の懸念を感じ取ったのか。神様が、

「安心しろ。向こうの世界ではお主の身体能力が上がるし、魔法も使えるようにしてやる。もし、それでも不満があるならお主の好きな特殊能力を幾つかつけてやるぞ」

と、僕を安心させようとそんなことを提案してきた。

ここは無理難題吹っかけて、この神様がどこまで本気が確かめてみるか。

「じゃあ、他のアニメに出て来る魔法や魔術も使えるようにして下さい。それなら行っても良いですよ」

僕もなかなか無茶な要求をするなあ。と、どこか他人事の様に考える。

ま、無理なら無理で、他に幾らでも願いは有るけどね。

「ああ。構わんぞ」

っていいのかよ!!?

つい心の中で突っ込んでしまった。

「了承してくれるならいいです。さつさと『ゼロの使い魔』の世界に飛ばして下さい」

この自称神様は何がなんでも僕をゼロ魔の世界に送りたいらしい……。

何を言っても無駄なことを悟った僕は、諦めの境地に至っていた。どうせ死んだ身だ。こうなったら第二の人生とやらを目一杯楽しんでやろう。

「その前に鏡を見た方が良いぞ」

神様はそう言いながら手を翳す。すると、掌からいきなり鏡が現われた。

僕は多少驚きながら、その鏡に映った自分の姿を凝視した。でも、特に変わったところは………なんだと……!!?

「何で僕の顔が女顔になってるんだ!? しかも目も紅くなってるし!?!」

「恐らく魂が変質したからだろう。お主の要求した能力を使える様になる為の代償だ。………女顔は元からだろうに」

驚愕の新事実だ。代償がいるなんて聞いてない。

まあ、良いけどね、別に。これぐらいなら我慢できる。

……それにしても、神様は最後の方なんて言っただろう? 声が小さくて聞き取れなかった。どうせ大したことじゃないんだろうけど。

「あと数秒で鏡が現われる。それを通り抜ければ異世界だ。さらばだ。健年よ」

鏡が現われた。アニメで才人の前に現れたあの鏡だ。

僕は覚悟を決めてその鏡に触れる。

「行つて来ます」

触れた瞬間、僕の視界は眩い光に包まれた。

この鏡を通り抜けた先に待っているのは僕の召喚主のルイズだろう。僕がゼロ魔の世界で何が出来るかは分からない。けれど、もう後悔だけはしたくない。

今度こそは絶対に、幸せになつてやる！

それがこの世界で僕が最後に抱いた思いだった。

第一話（後書き）

筆が乗らず、更新できなくなってしまったので気分転換に軽く修正してみました。

今、改めて見てみると、よくこんなのを載せようと思ったな。なんて過去の自分を罵ってやりたくなりました。また暇を見つけて修正するかもしれません。

ではまた、更新できるその日まで、さようなら。

第二話（前書き）

修正しました。

第二話

「あんた誰？」

目を開けると、いきなりそんなことを言われた。そこに居たのはピンクの髪を生やした、魔女ルツクの女の子。皆さんの想像通り、ルイズである。

やっぱり背、低いなあ。どう見ても中学生ぐらいにしか見えない。というか、ハルケギニアの人たちはどうしてこうもカラフルな髪をしているのだろうか。目がチカチカしそう。

「僕は倉麻健年」

黙ってる訳にはいかないので素直に答える。

それに、名を名乗るのは円滑なコミュニケーションには必要なことだしね。

「どこの平民？」

うん、原作通りだ。

ということとは、もうそろそろ他の生徒から野次が飛んでくるな。

ルイズも大変だねえ、と他人事のように考える。まあ、実際に他人事なのだからしょうがない。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民呼び出してどうするの？」

「ちょ、ちよつと間違っただけよ！」

「間違いつて、ルイズはいつもそうじゃん」

「さすがはゼロのルイズだ！」

誰かがそう言うのと、生徒達が爆笑する。

それにしても、さっきの会話にそれほど面白い点は見当たらなかったんだけど……、一体どこら辺が面白かったんだろうか。とてつもなく不思議だ。

「ミスタ・コルベール！」

あ、やっと出て来た。

うん、このハゲ頭は間違いなくコルベールだ。

だけど、この先のが分かっているから暇だな。そう思い、ぼくと空を眺めていると、

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

と言われた。

別にルイズにキスされてもなあ。照れるというか、気恥ずかしくはなったりするかもしれないけど、それほどいい気分にはならないと思うけど。だって僕、ツンデレ萌えじゃないし。

それにしても、僕はルイズとキスすることになるのか。ということは、僕のファーストキスはルイズに奪われるということに……。

嬉しいような悲しいような、複雑な気持ちだ。

まあ、どうでもいいか。キスの一つや二つ、欧米では挨拶みたいなものなもの。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリ

エール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

ルイズの顔が近付いて来る。

ルイズの顔を近くで見ると、とても整っているように見える。

目鼻立ちもくつきりしてるし、肌も綺麗だ。唇も柔らかそうで、なんだか変な気分になってくる。

前言撤回、やっぱり美少女とのキスはいい気分になる。新発見だね。

「ん……」

そして今、僕の唇とルイズの唇が重なった。

予想通り、ルイズの唇は柔らかかった。ツンデレに興味はなかったというのに、不覚にもときめいてしまった。

今ならルイズに惚れた才人の気持ちもわかるな。ま、だからといって、僕がルイズのことを好きになるかどうかは別問題だけど。

はあ、それにしても、これで僕の初めては奪われてしまった訳か……。

さらば僕のファーストキス。そして、こんにちは僕の使い魔ライフ。

「終わりました」

感慨深かったキスの感触は今も置いておこう。体に刻まれるルーンの痛みに備えなければ。

あれって凄く痛そうだったからなあ。余りの痛さに転げ回ったりしない様に気を付けないと。

「がっ！あつっ！！」

「すぐ終わるわよ。『使い魔のルーン』が刻まれているだけだから」

んなもん知ってるよ！？知ってるから身構えてたんじゃないか！
くっ！それでもこんなに痛くて熱いとは思わなかった。
だけど、ちよつとしたら痛みも引いたし、もう平気だな。瞬間的な
痛みでよかった。あんなのが長時間続いたらと思うと、ぞつとしな
いな。

「ふむ……珍しいルーンだな」

そう言いながら、軽くスケッチをするコルベール。
てか、人の許可も取らずに勝手にスケッチすな。まあ、別にどっち
でもいいけど。

あと、そんな風にしゃがみ込むと寂しい頭が見えちゃいますよ。

「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ」

おお、飛んでる。ちよつと感動。

とある魔法使い物の映画と違って、これは現実なんだよな。
やつぱCGとリアルじゃ比べ物にならない。なんというか、不自然
な感じがしない。

「あんだ、なんなのよ！」

そんなことを考えていると、いきなり怒鳴られた。

流星はツンデレ。怒ってる姿が堂に入ってる。

「さっき僕の名前言っただろ？もしかして、もう忘れちゃったの？」

「忘れてないわよ……！」

また怒鳴られた。

まったく、短気な奴だな。カルシウムが足りてないんだろうか？
ツンデレ〓短気というイメージが定着してしまうよ。

「いちいち怒鳴るなよ。血圧上がるよ。あと、僕は異世界から来たんだ」

「何言ってるのよ！異世界なんてある訳ないじゃない！！」

血圧のくだりは流されてしまったか。

見事なスルースキルだ。でも出来ればツッコんでほしかったかな。

「詳しい説明は後ですから、どこか落ち着ける場所に行こうよ」

「分かったわよ！」

「異世界から来たってホント？」

僕は今、ルイズの部屋に居る。

僕が異世界から来たこと説明すると、ルイズは疑わしげな視線を投げかけてくる。

正直言って鬱陶しい。さつさと納得すればいいものを。

ま、いきなり目の前にいる人間が『異世界から来ました』何て言ったら、まずは頭の状態を心配するのが常識なんだけだね。

「本当だよ。こんな嘘ついたって意味ないだろ？ いいかげん、認めたら？」

「そんなこと言われたって信じられる訳ないじゃない！！」

ちなみに、今の時刻は夜である。

ルイズからこの世界のことを説明してもらってから、僕が異世界から来たことを説明すると、そんなことある訳ないの一点張りで、このやり取りも三回目だ。

僕は一体、何回同じことを説明すればいいんだろうね。

「君が信じる必要はないよ。ただ、僕が異世界から来たことが分かっただけいいんだから。それとも、こんなことも分からない程、君は頭が悪いのかい？」

「ああ！もう分かったわよ！信じればいいんでしょ！信じれば！」

ふう、やっとこの無限ループから抜け出せた。

まったく、頑固者はこれだから困る。

ルイズがもつと素直で純真な性格だったらこんなに苦労することもないかなあ。

「それでさ、僕は今日からルイズの使い魔になるわけなんだけど、使い魔って基本的に何をすればいいの？」

「いいわ。教えてあげる。まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力が与えられるわ」

「今、見えてる？」

「あんたじゃ無理見たいね。わたし、何にも見えないもん！」

「残念だったな」

心にもないことを言ってみる。

だつてもし見えてたら、僕のプライバシーだだ漏れだし。

原作でも見えてなかったから特に心配はしてなかったけどね。

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」

「秘薬って？」

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……」

「何処にあるか教えてくれれば、取ってこれると思うけど？」

「なんで疑問形なのよ」

「今まで、採りに行ったことがないから確約は出来ないってことだよ」

「まあいいわ。じゃあ次、これが一番なんだけど……、使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！でも、あんたじゃ無理ね……」

「平和主義だからね」

「……強い幻獣だったら、並大抵の敵には負けないけど、あんたは

カラスにも負けそうじゃない」

「少なくともカラスには負けないよ」

「だからあんたにも出来そうなことをやらせてあげる。洗濯。掃除。その他雑用」

いや、人の話聞けよ。

「掃除なら道具があれば出来るけど、洗濯は無理だと思う」

洗濯機という文明の利器に頼っている現代人のスペックをなめてもらっては困る。

そういうことは一昔前の年代の人に頼んでほしい。

「いいからやりなさい。さてと、喋ったら眠くなっちゃったわ」

「僕はどこで寝ればいいんだ？」

ルイズは床を指差した。僕は恨みがましい目でルイズを見る。畳ならともかく、こんな固い石畳で寝られるものか。

「しかたないでしょ。ベッドは一つしかないんだから」

そう言うと、ルイズは毛布を投げてよこす。

て、毛布だけかよ。いや、原作でも毛布だけだったけど、それでも人に対する対応じゃないよね。

才人もよく怒らなかつたな。あ、使い魔のルーンの効果があつたからか。僕にはそんなに効き目はないみたいだけど。

そして、ルイズは徐に服を脱いでいく。

だが残念ながら、僕は好きでもない女の子の裸を見ても何も感じない様だ。

「なんで脱いでるの？もしかしてルイズは露出狂だったの？」

ルイズは顔を赤くしながら怒鳴る。

「んなわけないでしょ！！寝るから、着替えてるだけよ！！」

「へえ、知らなかった。ルイズは男に裸を見られても平気なんだ」

どんな反応をするか分かってるけど言ってみる。

「使い魔に見られたって、何とも思わないわ」

「ふうん。そうなんだ」

そう言いながら、下着姿のルイズをじっと見つめてみる。

すると、ルイズも僕の目線に気付いて僕を睨みつける。

だけどあんまり怖くないかな。目力があるのは認めるけど。

「何見てんのよ」

「僕に見られても平気なんだろ？今、自分で言ったじゃないか」

と挑発してみる。

僕からのささやかな反撃だ。さてはて、ルイズはどんな反応をするんだろうか。ちょっと楽しみ。

「あっち向いてて」

「分かった」

まったく、最初からそう言えいいのに。
しかもそれほど面白い反応をしてくれなかったので、少々落胆して
しまった。

「じゃあ、これ、明日洗濯しといて」

「どこで洗えばいい？」

「明日、メイドにでも聞いときなさい」

ルイズはそう言うと、パチンと指を弾いてランプの灯りを消した。
さて、これからの僕の生活はどうなることやら。

気付けば、ルイズは既に寝息をたてていた。どうでもいいけど、寝
るの早いな。僕は寝付きが悪いから、早く眠れるのは羨ましい。
といっても、それが適応されるのは夜だけで、授業中とかは簡単に
眠れるんだけどね。

「さて、僕も寝るか」

だが、床で寝るつもりはない。

軟弱な現代っ子がこんな固い床で眠れる筈がないからね。
だからこれは仕方が無いことなんだ。

「投影開始」

神様のおかげでいろんな魔法を使えるので、試しに布団を投影して
みる。

「おお。できた。できた。すげー」

僕の前に想像通りの布団が出てきた。しかも畳つき。

流石に敷布団だけじゃアレだからね。ちよつと欲を出してみました。しかし、こうして実際に魔術を使えることを確認すると、ちよつと興奮してきた。いろいろ試したい気もするが、今日はもう遅い。さつさと寝よう。

こうして、僕の異世界での生活が始まった。

今度こそは、僕は幸せになってやる。見ててよね、由衣。

第三話

「知らない天井だ」

お約束のネタを言いながら起床する僕。

やはり異世界……というよりかは、見知らぬ土地に来たならば一度は言ってみたい台詞なのである。

取りあえず、投影した畳と布団は消しておく。自分の部屋に見知らぬものがあつたらルイズも驚くだろうからね。

「今、何時だろう？」

そう言いながら、窓を開け、外を見る。

新鮮な外の空気が気持ちいい。冷たい空気が肺に侵入して身を引き締める。

うん。良い目覚めだ。

「日が出たばかりか」

早く起きすぎたかな？

まあ、現状確認には丁度いいか。

何せ、今の僕は外国で迷子になったようなもの。ここでの生活は原作やアニメを参考にするしかない。

言ってみれば、右も左もわからない状況だ。現状すら把握できない様では、この世界で何もできない。

そんなことを考えながら、何気なく部屋を見渡す。すると、部屋の隅にこの世界で存在するはずのない物を発見した。

「これは僕のポストンバッグ!? 何故こんなところに……」

よく見てみると、ポストンバッグの上に手紙が貼り付けてあった。得体のしれないものであるが、ここでビビッていても状況は変わらない。ここは当たって砕けるだ。

恐る恐る、という程でもないけれど、慎重に手紙を手についた。その手紙は僕宛のものだった。しかも何故か日本語で書かれてあった。ご都合主義万歳である。

読んでみると、そこにはこう書かれてあった。

『健年へ

このバッグにはお主の日常生活に必要な物が入ってある。有効に使いなさい。

ゼウスより』

「これは助かる。有り難う。神様」

僕が神様に感謝していると、紙がもう一枚あることに気付いた。

『追伸

お主の別の世界の魔法を使うことができる能力だが、お主が投影を使ったから、あともう一つの世界の魔法、またはそれに準ずるものしか使えなくなっているので注意するように』

そういうことはもっと早く言って欲しかった。

そしたらもっと慎重に魔法の設定を行ったというのに……。

はあ……、とにかく、この手紙に書かれてあることが本当なら、あとの一つの作品の魔法しか使えないのか。もっといろんな作品の魔法を使いたかったのに。

「まあ、これだけでも充分すぎる程の能力だから、別にいいか」

取りあえず、そう自分に言い聞かせて無理矢理納得しておく。
なんの能力もなく、装備もない状態で異世界に放り出されるよりは
百倍マシだ。

それと、これは隅の方に隠しておこう。ルイズは細かいことは気に
しないだろうから、目につかなければ何か言われる心配はないだろ
う。

「解析開始」

自分に解析魔術を使って現状を確認する。
ステータス確認は必須事項だからな。怠るわけにはいかない。

魔術回路……… 50本
魔力量……… 100

魔術回路が50本か。

結構多いな。

魔力量が100ってことは、昨日使った布団の投影が3くらいかな？
武具の投影はまだしてないから多いか少ないか分らないな。
試しに干将・莫耶を投影してみる。

「ふう、できた」

僕の手には、黒と白の夫婦剣が握られていた。
ずっしりとした重みが、僕の手に現実味を与えてくれる。

ああ……、夢じゃないんだな。今更ながらにそのことを痛感する。
おっと、今はこんなことしてる場合じゃなかったな。この夫婦剣に
消費した魔力を調べなければ……。

干将・莫耶に費やした魔力は10ぐらいか。
まあまあといったところかな。

「現状確認はこれくらいにして、洗濯にでも行くか」

洗濯物を持って外に出る。まだ六時ぐらいなので人気がない。人がいないなら、早起きも悪くないな。

そう思いながら、水場を探していると、僕に近付いて来る黒髪のメイドさんを発見した。

どうでもいいけど、メイドを“さん”づけしてしまうのは何故だろう？

「あの、どうかされましたか？」

洗濯物を持ってうろろしてたから、怪しまれたのかな？

見覚えのあるメイドさんに警戒されない様に人好きのいい笑顔を作る。

「ああ、実はこの洗濯物をどこに持っていけばいいのかわらなくて困ってたんだ」

「そうだったんですか。ですが、貴方はここの使用人ではないですよね？」

ここは、素直に答えた方が無難だな。下手な嘘は自分の首を絞めるだけだから。

それなら都合の悪いこと以外のことだけを放した方が怪しまれずに済む。

「僕は、昨日ルイズに召喚されたんだ」

「ああ。貴方がミス・ヴァリエールの使い魔さんなんですね。私はシエスタといえます」

やっぱりシエスタだったか。

これも世間で噂のご都合主義ってやつなのかな？

「僕は健年。よろしくね。シエスタさん」

「シエスタでいいですよ。健年さん」

「僕も、健年でいいよ」

「では、ケント君」

「まあいいか。それで、この洗濯物はどうすればいいかな？」

「もしよろしければ、私が洗濯しますけど」

これはラッキーなことがあるものだ。

今時、手洗いなんでやってらんないからな。洗濯機に頼りきりの現代っ子を舐めるなよ。

「いいの？」

「はい。構いませんよ」

「じゃあ、お願いするよ」

「それでは、明日からあちらの水場に置いて下さい。洗い終え

たら、ミス・ヴァリエールの部屋まで持っていけますので」

「ありがとう。助かるよ」

「いえ、気にしないで下さい。では、私は仕事があるので失礼しますね」

「またね。シエスタ」

去って行く背中に見別れを告げ、僕も踵を返し、元来た道を歩いて行く。

ふむ、やはりメイドさんとはいいいいものだ。家事を率先してやってくれるなんて、手間が省けるというものだ。

それにしても、さっきまで誰もいなかったのに、学院の生徒の姿がちらほらと。

どうやら、そろそろルイズを起こした方がいいみたいだ。

そう思った僕は、特に急ぐこともなく、ゆったりとした足取りでルイズ部屋に向かった。

ルイズの部屋に着くと、我がマスターはまだ眠っている様だ。

緩んだ寝顔が可愛い。そしてそれを見ても何も感じない自分は男として何か間違っているのではなからうか。

そんな些細な疑問を抱きながらも、僕は未だ眠り続けている我が主を起こす為に声をかける。

「ルイズ。朝だよ」

「う、うん」

呼び掛けても唸るだけで一向に起きる気配がない。

なので仕方なく、本当に仕方なく、僕は温かそうな毛布を剥ぐ。

……念のためにもう一度言っとくけど、本当に仕方なくやっただけだからね？勘違いしないでよ。

「な、なによ！なにごと！」

「朝だよ。ルイズ」

「はえ？そ、そう……。って誰よあんた！」

「もう忘れたの？もしかして痴呆症？」

「誰がよ！！ってそうだったわ。昨日、召喚したんだっけ」

朝から元気だな。

僕にはとても無理そうだ。朝っぱらからそんな大声出すなんて。

「服」

椅子に掛かった制服を渡す。ルイズはダルそうにネグリジエを……脱ぎはしなかった。どうやら昨日のことを思い出したらしい。学習能力はあるようなので安心した。一度言ったことをもう一度言うのは面倒だからね。

「下着」

「どこ？」

「そのー、クローゼットのー、一番下の引き出しに入ってる」
引き出しを開けて、下着を取る。

同じようなデザインのものしかないので、どれでも一緒かと思い、目についた物を手に取る。

これが才人なら興奮するのもかもしれないが、幼い頃から妹の洗濯物を見てきた僕が、今更その程度のことでは劣情を抱くことは無く、極めて平静にそれを手渡した。

「それじゃ、僕は部屋の外で待つてるから」

そう言っただけで部屋を出る。流石に着替えをじっと見つめる趣味はない。三分程経ち、ルイズが出てくる。すると、隣の部屋から赤い髪の女の子が現われた。

この歳でそこまで色香を出すとは侮れないよね。例えそれが二次元の存在だったとしても。ま、今の僕にとってはリアルだけれども。

「おはよう。ルイズ」

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔って、それ？」

「そうよ」

「あつはっは！ほんとに人間なのね！すごいじゃない！」

原作通りだとは分かっているけど、キュルケのこの物言いには流石にイラっとくる。

「ただ、ここは我慢しよう。僕は我慢強いことで有名なのです。」

「…多分。」

そうやって若干イライラしていると、いつの間にか話が進んでいたみたいだ。

「どうせ使い魔にするなら、こういうのがいいわよねえ。フレイム」

キルケの部屋から使い魔が出てくる。

それだけで、廊下の気温が上昇したように感じた。

「サラマンダーだ」

「あら、よく知ってるわね。そうよー。火トカゲよー。見て？この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違なく火竜山脈のサラマンダーよ？ブランドものよー。好事家に見せたら値段なんかつかないわよ？」

「そりゃよかったわね」

二人の話を聞き流し、僕はサラマンダーを観察する。
触ってみたいなー。熱いけど。

恐る恐る、触ってみると

「きゅるきゅる」

と喉を鳴らした。

やばい、可愛い！

動物好きな僕は思いの外可愛らしい反応してくれたサラマンダーを撫で続ける。

「あら？あたしのフレイムが懐くなんて」

「こいつ、フレイムって言うのか」

知ってたけど。

「よろしくね。フレイム」

「きゆるきゆるきゆる」

「あなた、お名前は？」

「倉麻健年。倉麻が家名で、健年が名前だよ」

「変わった名前ね」

「こっちではね」

「じゃあ、お先に失礼」

そう言うと、キュルケは颯爽と去っていった。その後ろをフレイムがついていく。

うむ。主人の後をとことこと追う姿はなかなか可愛嬌がある。爬虫類が好きな人の気持ちが分かる気がするよ。

「くやしー！なんなのあの女！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！ああもう！」

「はいはい、興奮しないで。食堂に行くんだろっ？」

「分かってるわよ！」

ルイズはいかにも怒ってますという風に、のしのしと、歩いていく。

その姿にはサラムンダーの欠片ほどの愛嬌もなかったのは言うまでもないだろう。

食堂に着くと、ルイズが得意げにこの食堂の説明を始めた。

僕はそれを当然の様に聞き流す。だって興味ないし。

僕の率直な意見を言うと、こんな豪華な食堂なんて意味がない。

食堂を清潔にするのはいいいことだけど、こんなに広くする必要なんて皆無だし、なにより実用性がない。

そんなことをする暇があるのなら、少しでも貯金して、国庫を潤せばいいのに。

僕はそんな益体も無いことを考えながら、ルイズの椅子をひく。

「貴族は朝からこんなに食べるの？見てるだけで胸焼けしそう」

朝から肉汁の滴る肉など食ってられない。僕なら吐く自身があるぞ。貴族っていうのは毎朝そんな吐き気と戦っているのだろうか？

「あんたのはそれよ」

「食事に関しては文句はないよ。けどね、さすがに床はないんじゃないかな？衛生的にも」

「あのね？ほんとには使い魔は外。あんたはわたしの特別な計らいで、床」

ルイズの言い分には流石にカチンときた。

え？我慢強いんじゃないのか？それじゃなかったのか？それは自称だから気にするな。

「へえ、知らなかった。ルイズは男に床で食事をさせて悦ぶ趣味が

あつたんだ。いや、個人の趣味に干渉するつもりはないよ。けど、僕にそんな趣味はないんだよ。残念ながらね。という訳で、僕は外で食べてくるから」

わざとらしく、大きな声を出して皮肉ってみた。

後ろで顔を真っ赤にしたルイズが怒鳴ってるけど、気にせず、外に出る。

適当に歩いた後、近くに生えてた木の下に投影した布を敷いて、ご飯を食べる。

量は少なかったが、朝はこのくらいで丁度いい。僕は朝食を五分程で食べ終わり、厨房に食器を返した。

暇になった僕は、使い魔達を探す。

「あつ！いた」

そこには既にご飯を食べ終えていた使い魔達がいた。僕はその中でも、一番目立っている風竜の元に向かう。

「おはよう。僕は健年って言うんだ。よろしくね」

風竜に声をかける。

やはりファンタジーな世界に来たからには竜に興味があるのは当然だろう。男として。

「きゅいきゅい」

挨拶のつもりらしい。

それにしても、サラマンダーも可愛いかったが、シルフィードはもっと可愛い。つい、撫でてしまう。

「きゅいきゅい」

嬉しそうに喉を鳴してるのが分かる。

なんて愛らしい生き物なんだ。風韻竜というやつは……！
もつと撫でてやろうとすると、後ろから声をかけられた。

「誰？」

その言葉に振り返る。

そこには、青い髪の子が立っていた。

「僕は健年。君は？」

「タバサ」

「よろしく、タバサ。僕のことは健年って呼んでよ」

「分かった」

「こいつ、君の使い魔？」

「そう。名前はシルフィード」

「よろしく、シルフィード」

「きゅい」

挨拶代わりに軽く撫でてやると、シルフィードはお返しとばかりに
僕の顔を舐める。

「ハハッ。くすぐつたいよ」

顔中が唾液まみれで気持ち悪いけど、不思議と悪い気はしない。それに、唾液はあとで洗い流せばいいだけだしね。

「早く戻った方がいい」

「どうして？」

「ルイズが探してる」

ああ、そういえば怒らせたままだった。

まあ、どうでもいいけど。

シルフィードや他の使い魔達との触れ合いに比べれば、大したことではない。

でも、そろそろ時間的にヤバイだろうし、ここは素直に戻ってやろう。

「分かった。もう戻るよ。教えてくれてありがとう」

シルフィードに別れを告げ、僕はその場を去った。

タバサとシルフィードはケントの姿が見えなくなるまでその場を動かなかったが、漸くタバサが口を開いた。

「シルフィード」

「なんなのね？お姉さま？」

シルフィードは竜である。けれども、ただの竜ではない。

今は絶滅した思われている風韻竜と呼ばれる知能の高い竜だ。人語を解し、人と会話をすることも可能なのである。

それに加えて、先住魔法も使えるとなれば、使い魔としては破格の存在である。

「彼は何者？」

タバサの目には、真っ直ぐに自分を見返してくる紅い瞳をした少年が映りこんでいる。

彼は一体何者なのだろうか？読書を好み、幅広い知識を有する彼女にも、使い魔になった人間は未知の存在だった。

それ故に知的好奇心が刺激される。それと同時に要注意人物であることも忘れない。

「とっても優しい人なのね。けど、何だかすごく不思議な人だったのね」

「そう」

タバサはそう言うと、ケントが去っていった方向を見つめる。

ケントと名乗った彼については興味が尽きない。けれど、もし敵に回るようなことがあれば容赦はしない。

タバサの瞳には悲壮な決意が滲み出ていた。そして、それに気づく者はどこにもいなかった……。

第四話

タバサとシルフィードと別れ、ルイズを探す。
あ、いたいた。

食堂近くの廊下にルイズは一人で突っ立っていた。
遠目から見ても眉間にしわがよってるのがよく分かる。機嫌が悪いのは一目瞭然だ。

まあ、その原因が僕にあるのは自覚してるけどね。謝るつもりも改めるつもりも毛頭ないけどね。

「何してるの？ルイズ。こんなところで」

「何してるはこっちの科白よ！今まで何処行ってたの！！」

出会い頭に怒気から来る興奮で顔を赤くして、思いつきり怒鳴ってくるルイズ。

正直言つて、かなり五月蠅い。貴族なら貴族らしく、淑女のように振る舞ってくれないかな？無理だろうけど。

「他の使い魔達と親睦を深めてたんだ。それと落ち着いてくれない？」

「誰のせいよ！誰の！！ハア……、あんたの相手をするの疲れるわ」

と残業帰りのサラリーマンの様なため息をつく。

随分とストレスが溜まっているようで。一体誰の所為なんだろうね？
……ああ、僕か。

「そんなに寝めるなよ。照れるじゃないか」

「誰も褒めてないわよ!!」

「そんなに怒鳴ると血圧上がるよ?」

「ハア……、もういいわ。早く教室にいきましょ……………」

そう言うと、幽鬼の様な足取りで教室に向かうルイズ。僕はその後を追う。

少しからかって遊ぼうとしただけでこれだ。僕と付き合っていくからには、これぐらいは軽く流せないともたないよ?

まあ、気の短いルイズには一生かかっても無理だろうけど。

僕達が教室に入ると、中にいる他の生徒達が一斉に振り向いた。

そしてくすくすと笑う。嫌な視線だ。くすくす笑うな、鬱陶しい。耳障りな笑い声が癪に障る。

僕は若干イラつきながら、主要キャラを探す。アニメや漫画などで顔は分かっているけど、それがこの世界においても全く同じ容姿だとは限らないからだ。

キュルケは目立つので簡単に見つけることが出来た。周りを男子に囲まれ、猛アタックされているから。うん分かりやす過ぎ。まるで誘蛾灯のようだ。

それに対して、ギーシュの方もまた別の意味で目立っていた。あれほど分かりやすい奴はいないのではなからうか?

造花を持ち歩いているのは原作でもギーシュぐらいのものだ。よくもまあ、あんな典型的な勘違い貴族が主要キャラとなり得たものだと、逆に感心してしまう。

他にも特徴的なモンモランシーとマリコ……なんだっけ?忘れちゃった。体型で判断できるから別にいいけど。なんかは把握できた。そつえば、タバサは何処にいるんだろう?あの子はルイズに負け

ず劣らずの身長だから見つけ難い。

……お、みーつけた。

タバサは隅っこの方の席についていた。非力そうなタバサが持つには不釣り合いな分厚い本を黙々と読んでいる。

タバサの隣りの席には人がいない。タバサは無表情キャラだから、取っつき難いのが原因だろう。

まあいいや。丁度二人分空いてるし、そこに座ろう。

「となりいい？」

「別にいい」

「ありがとう」

声をかけると普通に返事してくれるし、嫌われてはないようだ。少なくとも、僕という存在に興味を抱いている……筈だ。多分。

さて、タバサが了承してくれたことだし、隣りに座ることしよう。

「あんた！なに勝手に座ってるのよ！ここはメイジの席なの！使い魔は座っちゃダメ」

「勝手じゃないよ？タバサが隣りに座ってもいいって言ったんだ。

それに、椅子は余ってるんだから別にいいだろう？」

「そっという問題じゃないでしょ！だいたい、いつの間にその子と知り合いになったのよ！」

「さっきまで使い魔達のところにとったって言ったよね？そのときだよ」

僕がそういったのと同時に中年の女の人が入ってきた。

あの人がシュヴルーズか。太いな。分かってはいたけど。一体何を食べたたらあんなに肥えることが出来るんだろう？不思議だ。

ルイズは教師がきたのを見て、大人しく席に着いた。我が儘で短気な性格だから忘れがちだけど、ルイズは筆記については優秀だ。

根は真面目なのだし、教師の指示には大人しく従う。うん、最近の学生にも見習ってほしいよね。この優等生ぶりを。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

シュヴルーズがそんなことを言っているが、僕は何一つ聞いちゃいなかった。何故なら、既に寝る体勢になっているからだ。

傍から見ると、ちゃんと起きているようにも見える。この体勢を編み出す為に、様々な実験を重ねてきた結果だ。

夜型の僕は、よく授業中に寝ていた。だから僕にはこれが必要だった。教師にバレない様にする為に。

そんな訳で、誰にも気づかれることなく惰眠を貪っていた僕は、自分の肩が揺らされている感覚によって目覚めた。

誰だ？僕の睡眠時間を削った奴は。男だったら問答無用で蹴り飛ばす。

僕が目を開けると、教卓の辺りにルイズとシュヴルーズが立っていた。この後のイベントを鑑みるに、ルイズの爆発イベントが発生するのだろう。

周囲を見渡すと、皆椅子の下に隠れている。こういう時は判断が早いな、お前ら。

「早く隠れた方がいい」

声のした方向に顔を向けるが、誰も居ない。おかしいな？確か、僕の隣りにはタバサが座っていた筈だけど。ああ、そうか。椅子の下に隠れてるのか。

そこから視線を下に向ければ、僕を見上げるタバサの姿が。僕の思った通り、椅子の下に隠れている。

僕はタバサの言うことを素直にきき、椅子の下に隠れる。これから何が起こるのか分かっているのだから、素直に忠告をきくのは正しい判断だろう。

自分の身体が椅子に完全に隠れたその瞬間に、凄まじい爆発音が響いた。

爆風を浴び、驚いた使い魔たちが暴れだす。驚いているのは使い魔だけではなく、メイジも同じ。

もっとドンと構えることの出来る気概のある奴はいないのだろうか？混乱する使い魔とメイジの様子は、まさに阿鼻叫喚と形容するのに相応しい。

この騒ぎの中、平然として話が出来るのは僕とタバサぐらいのものだろう。貴族なんだから、もっとずっしり構えてるよ。

「タバサが起こしてくれたの？」

僕の問いかけは意味がないもの。ただ単に、タバサと話す口実が欲しかっただけだ。

原作キャラとは、なるべく仲良くしておきたい。いざという時に頼りになる仲間がいるのは心強いし。とりあえず、礼は言っておこう。

「ありがとう。助かったよ」

「気にしないで」

そう言うと、タバサは本を持って教室を出る。

出来ることなら、僕も一緒に出て行きたかったが、そういうワケにもいかない。僕はこれから、この教室の掃除をしなければならないから。

僕はこの後にしなければならぬことを思い返して、ため息をついた。

その頃、コルベールは図書館にて、ルイズに召喚された使い魔、ケントのルーンについて調べていた。

生徒が閲覧できる書物には手掛かりすら発見できなかった為、彼は教師のみが閲覧を許される『フェニアのライブラリー』の中で使い魔に関する書物を探している。

手の届かない位置にあるものは『レビテーション』を使い、宙に浮かび上がってまで、彼は本を探していた。人一倍好奇心の強いコルベールだからこそ出来ることだろう。

そして、彼はある一冊の本の記述に目を留めた。それは始祖ブリミルが使役した使い魔たちが記された古書だった。

そこに記されている伝説の使い魔のルーンと、少年の左手に現われたルーンのスケッチを見比べる。

一度はそんな馬鹿なと否定し、二度目はまさかと思い直し、三度目で漸く見間違いないのを確信した。

彼はその瞬間、感動と驚きで『レビテーション』の為の集中が途切れてしまう。地に落ち、尻を強打した。

「痛たたた……、ハッ、こんなことしている場合ではない」

しかし、今の彼には痛む尻を労わる余裕などありはしない。
彼は本を抱えると、慌てて学院長室に向かって走り出した。

トリステイン魔法学院の学院長を務めるオールド・オスマンは暇をもてあましていた。

秘書が優秀だと、執務をする時間も少なくなってしまう。
優秀すぎるのも困り者だと、暇つぶしに鼻毛を抜いていたが、やがてそれにも飽きたのか、引き出しから愛用している水ギセルを取り出した。

それを見た秘書のロングビルが羽根ペンを振るう。すると、水ギセルがロングビルの手元まで飛んでいった。

「年寄りの楽しみを取り上げて、楽しいかね？ミス……」

「オールド・オスマン。あなたの健康管理もわたくしの仕事なのですわ」

「こう平和な日々が続くとな、時間の過ごし方というものが、何より重要な問題になってくるのじゃよ」

「オールド・オスマン」

「なんじゃ？ミス……」

「暇だからといって、わたくしのお尻を撫でるのはやめて下さい」

オスマンは口を半開きにし、辺りをよちよちと歩き始めた。

ロングビルはその姿に怒りを抱いたが、このようなことで怒りを爆発させるほど短気ではない。

「都合が悪くなると、ボケた振りをするのもやめて下さい」

「真実はどこにあるんじやろうか？考えたことはあるかね？ミス…」

…」

「少なくとも、わたくしのスカートの中にはありませんので、机の下にネズミを忍ばせるのはやめて下さい」

冷静に見えるロングビルだったが、内心ではネズミを踏み潰してやるかと思っていたりする。女性とは恐ろしい生き物である。オスマンはいかにも悲しそうな顔で呟いた。

「モートソグニル」

呼びかけに応えたネズミがロングビルの机の下から現われ、オスマンの肩まで上る。

オスマンは常に常備しているナッツをポケットから取り出し、ネズミに与える。

ナッツを齧っているネズミの姿は、中々に愛嬌がある。ここにケントがいたならば、きっと和んでいたことだろう。

「気を許せる友達はお前だけじゃ。モートソグニル」

ネズミはナッツを齧り終わると、ねだるようにちゅうちゅと鳴い

た。

「そうかそうか。もっと欲しいか。よろしい。くれてやろう。だが、その前に報告じゃ。モートソグニル」

ちゅうちゅう、ちゅうちゅう。

「そうか、白か。純白か。うむ。しかし、ミス・ロングビルは黒に限る。そう思わんかね。可愛いモートソグニルや」

「オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

「今度やったら、王室に報告します」

「カーツ！王室が怖くて魔法学院学院長が務まるカーツ！」

言ってることは立派だが、やってることは単なるセクハラである。ロングビルは、もはや呆れ果てていた。こんなスケベジジイが学院長で、本当に良かったのだろうか？

「下着を覗かれたぐらいでカッコしなさんな！そんな風だから、婚期を逃すのじゃ。ハア~~~~、若返るの~~~~、ミス……」

ロングビルは立ち上がり、お尻を撫で回すオスマンを、無言で蹴りまわした。

無表情ではあるが、よく見ると、口もとがヒクついているのが分かる。

彼女もそのことについては気にしていたのだろう。

「ごめん。やめて。痛い。もうしない。ほんとに」

オスマンが謝る。しかし、ロングビルは蹴り続ける。

学院長のセクハラ行為には本気で腹を立てているのだろつ。この程度では腹の虫が治まらないとでも言わんばかりに蹴り続ける。

「あだつ！年寄りを。きみ。そんな風に。こら！あいだつ！」

そんな平和？な時間は、突然の闖入者によつて破られた。

「オールド・オスマン！」

ドアを勢いよく開けて、中にコルベールが飛び込んできた。

寂しい頭部には汗が流れており、それが陽の光に照らされている。

「なんじゃね？」

ロングビルは何事もなかったかのように机に座り、オスマンは腕を後ろに組んで、重々しくコルベールを迎え入れる。とんでもない早業である。

「たた、大変です！」

「大変なことなど、あるものか。すべては小事じゃ」

「ここ、これを見て下さい！」

「これは『始祖ブリミルの使い魔たち』ではないか。まーたこのよ
うな古臭い文献など漁りおつて。そんな暇があるのなら、たるんだ

貴族たちから学費を徴収するうまい手をもつと考えるんじゃないよ。ミスタ……、なんだっけ？」

「コルベールです！お忘れですか！」

「そうそう。そんな名前だったな。君はどうも早口でいかんよ。で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「これも見て下さい！」

それを見た瞬間、オスマンの表情が変わった。オスマンがこのような表情を見せるのは珍しい。余程のことなのだろう。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

ロングビルは部屋を出ていく。

「詳しく説明するんじゃない。ミスタ・コルベール」

僕は今、ルイズがめちゃくちやにした教室の掃除をしている。本当は面倒だからバツけたかったが、ルイズ独り残せば夜になっても掃除が終わらないだろうから、仕方なく手伝っている。だというのに、ルイズは真面目に掃除をしようとしていない。先ほどから机の一部分しか拭いていない。

「ルイズ。ちゃんと掃除しなよ。早く終わらせたいんだから」

「うるさいわね！どうしてわたしがこんなことしなくちゃいけないのよ」

「ルイズがめちゃくちゃにしたからだろ？」

「うるさい！！あんたは黙って掃除してればいいのよ！」

ルイズがふざけたことを言い出したので、反撃にでる。

「ルイズ。君はあれだね。自分の失態を部下のせいにする、性根の腐った政治家みたいだね。それともなにかい？貴族は皆そうなのかな？」

「なにいつてんのよ！そんなわけないじゃない！！」

「なら、真面目に掃除をすることだ。これ以上、僕をイラつかせないでくれ」

「分かったわよ！やればいいんでしょ！やればっ！！」

半ば逆ギレ状態だったが、ようやく真面目にやり始めた。

まったく、最初から真面目にやれば早く終わるのに。

二人共、黙々と掃除をする。その甲斐あって、昼前に掃除が終わった。

ルイズには困ったものだ。プライドが高いのは悪いことじゃないが、だからといって、自分の失態を認めようとしないのはいただけない。もう少し、自分に素直になって生きることが出来ないのだろうか？

食堂につき、僕は椅子をひく。

「あんたはご飯又きだから」

我が主はいったいなにを言っているんだろう？
ついにボケてしまったのだろうか？

「どうして？」

「あんたはご主人様に向かってふざけたことばかり言うから、あんたがわたしを敬うまでご飯又キ！これ絶対！例外なし！」

敬うも何も、今のルイズに尊敬するべき部分など見出すことが出来ないのだからしょうがないと、僕は思うのだけれど。
まあ、飯又キぐらいどうってことないけどね。

「じゃあ使い魔たちのところにいくから」

そう言い残し、その場を去る。

やはり、後ろでルイズが何か怒鳴っているが、特に気にする必要もない。

「なあシルフィード。酷いと思わないか？」

僕は今朝と同じように、シルフィードに話しかける。

「きゅいきゅい」

「そうか。わかってくれるか。お前はいいやつだな。お前のご主人様と同じで」

シルフィードに愚痴をこぼしていると、後ろから声をかけられた。

「健年君。なにやってるんですか？」

「シエスタ。実はルイズに飯を抜かれちゃって」

「お腹、空いてるんですか？」

「少しね……」

「こちらにいらして下さい」

「じゃあね。シルフィード」

僕はシエスタについていく。
シエスタは厨房に着くと、

「ちょっと待ってて下さいね」

と言い、厨房の奥へと消える。そして、シチューの入ったお皿を持ってきた。

「貴族の方々にお出しする料理の余りモノで作ったシチューです。
よかったら食べて下さい」

「有り難う。いただきます」

まずは一口食べてみる。

「美味しいよ」

「よかった。お代わりもありますから。ごゆっくり」

量がそれほど多くなかったのと、小腹が空いていたのもあって、十分程で食べ終わる。

「美味しかったよ。有り難う」

「よかった。お腹が空いたら、いつでも来て下さいな。私たちが食べているものでよかったら、おだしますから」

「有り難う。助かるよ」

「気にしないで下さい。では、私はデザートを運ぶので失礼しますね」

健気でいい子だなあ、シエスタは。それに比べてうちのルイズときたら……。

溜息を吐きなくなるのを堪えつつシエスタを見送り、僕もルイズのところに戻る。

ルイズの向いの席に座るが、ルイズが何も言っただけなのでそのままぼくとしてしていると、怒鳴り声が聞こえてきた。

「君が軽率に、香水の壺なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

そう言っているのは金髪の男だ。しかも気障な物言いをしている。間違なくギーシュである。

ウザいなあ。存在が。

「も、申し訳ございません」

青い顔して震えながら謝っているのは、黒髪メイドのシエスタだ。こついうイベントも確かにあったな。僕が給仕の仕事をしていなかったから、シエスタが巻き込まれてしまったんだろうな。そう思いながら、シエスタの前にでる。

「二股かけて、女の子を泣かせたくせに追いかけようもしない、君の方が悪いに決まってるだろ？」

「け、健年君!？」

「そうだギーシュ!お前が悪い!」

事態の行く末を遠巻きに見ていた生徒達が野次を飛ばす。羞恥か怒気か、ギーシュの顔が赤くなる。

「いいかい?君。僕は彼女が香水の壺をテーブルに置いたとき、知らないフリをしたじゃないか。話を合わせるぐらいの機転があってもよいだろう?」

「ハッ!なにを言ってるんだお前は、冗談は存在だけにしておけ」

「なッ!なんだとッ!君は貴族にそんなことを言っていていいと思っているのか!？」

「そんなこと、僕には関係ないね」

「ふん……。ああ、君は……」

何かを思い出すかのような仕草。それすらもわざとらしくて鬱陶しい。

「確か、あのゼロのルイズが呼び出した平民だったな。よからう。君に礼儀を教えてやろう。ちょうどいい腹ごなしだ」

「いいよ。受けて立つ」

「ヴェストリの広場で待っている。準備ができたなら、来たまえ」

ギーシュが友人たちを伴って、出ていった。

その内の一人は残っている。僕を逃がさない為だろう。

逃げるつもりなんて毛ほどもないけど。

シエスタは震えながら、こっちを見ている。

「シエスタ。大丈夫だった？」

「あ、あなた、殺されちゃう……。貴族を本気で怒らせたら……」

それだけ言うと、シエスタは走って逃げてしまう。

平民にとっては貴族は恐ろしい存在だ。僕が大怪我するのを想像してしまったんだろう。

後ろから近づいてくる気配。これは多分ルイズだろう。

「あんた！何してんのよ！見てたわよ！なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

「別にどうでもいいだろ？いちいち五月蠅い」

「なッ！？」

「武器を取って来るから、ここで待ってて」

僕はルイズを無視して、ギーシュの友人に声をかける。

「早くしろよ」

「ああもう！ほんとに！使い魔のくせに勝手なことばかりするんだから！」

ルイズは、先にヴェストリの広場に向かった。
こうして、異世界での初めての戦闘が始まる。

ガンダールブの力を試すには丁度いい。楽に蹴散らしてやろう。

第五話

僕は今、ヴェストリの広場に向かっている。

ギーシュと決闘するために。

僕の手には、ブロードソードが握られている。当然、投影した物だ。さて、どうやって勝とうかな？

僕にはルーンがあるから、武器の使い方は分かるけど、決定的に経験が足りないしな。

ギーシュが相手なら、簡単に勝てるだろうし、僕の練習台にでもなってもらうか。

そんなことを考えていると、いつの間にか、ヴェストリの広場に到着したようだ。

「諸君！決闘だ！」

ギーシュは相変わらず、キザったらしい動作をしている。正直言って、かなりウザい。というか、イタイ。

「とりあえず、逃げずに来たことは、褒めてやろうじゃないか」

「そんな口上はどうでもいいから」

「では始めるか」

ギーシュは薔薇を振った。花びらが一枚宙を舞い。

甲冑を着た女戦士の形になった。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。教えてやろう。僕の二つ名は

『青銅』のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

「ギーシュ！」

ルイズが怒鳴り込んできた。

「いい加減にして！大体ねえ、決闘は禁止じゃない！」

「禁止されているのは、貴族同士の決闘のみだよ。平民と貴族の間での決闘なんか、誰も禁止していない」

「そ、それは、そんなこと今までなかったから……」

「ルイズ、君はその平民が好きなのかい？」

ルイズの顔が朱に染まる。

「誰がよ！やめてよね！自分の使い魔が、みすみす怪我するのを、黙って見ていられるわけじゃない！」

「ルイズ、僕が怪我するって決め付けないでよ」

「ケント！」

「おっ！今、初めて僕を名前で呼んだね」

「平民は、絶対にメイジに勝てないのよ！」

「だから、勝手に決め付けないでよ。大丈夫。僕は怪我をしないし、

負けないから、後ろに下がってなよ」

僕はルイズを押しやった。

「さあ、始めようか」

ギーシュのワルキューレと対峙する。

不敵に笑いながら。

「やるだけ無駄だと思うがね」

「あんなゴミに負けるわけないだろう？」

ギーシュの顔から笑みが消えた。

「ワルキューレ！」

ゴーレムが拳を繰り出す。

僕はそれを軽くないです。そして、一閃。

ゴーレムは、真つ二つになる。

「言つたろ？こんなゴミに負けるわけないって」

ギーシュや周りの生徒達の顔には驚愕が張り付いている。

「そんなバカなことがあつてたまるか！いけ！ワルキューレ！」

ギーシュが薔薇を振り、ゴーレムが新たに造り出される。

全部で七体のゴーレムが突っ込んで来る。

冷静さを失ったか。

僕はそれを冷めた目で見る。

もう終わらせるか。

そう思った僕は、剣を左手に持ち替える。

すると、僕の左手に刻まれたルーンが光だす。

その頃、学院長室では、コルベールがオスマンに説明していた。

春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の少年を呼び出してしまったこと。

そして、その少年と契約したとき、現われたルーンが気になったこと。

それを調べていたら……。

「始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』に行き着いた、というわけじゃね？」

「そうです！あの少年の左手に刻まれたルーンは、伝説の使い魔『ガンダールヴ』に刻まれていたモノとまったく同じであります！」

「で、君の結論は？」

「あの少年は、『ガンダールヴ』です！これが大事じゃなくて、何なんですか！オールド・オスマン！」

「ふむ……。確かに、ルーンが同じじゃ。ルーンが同じということは、ただの平民だったその少年は、『ガンダールヴ』になった、ということになるんじゃないかな」

「どうでしょう」

「しかし、それだけで、そう決め付けるのは早計かもしれん」

「それもそうですな」

コンコンと、ドアがノックされた。

「誰じゃ？」

扉の向こうから、ロングビルの声が聞こえてきた。

「私です。オールド・オスマン」

「なんじゃ？」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるそうです。大騒ぎになっています。止めに入った教師がいましたが、生徒達に邪魔されて、止められないようです」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい。で、誰が暴れておるんだね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「あの、グラモンとこのバカ息子か。オヤジも色の道では剛の者じやったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。おおかた女の子の取り合いじゃろう。相手は誰じゃ？」

「……それが、メイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の少年のようです」

オスマンとコルベールは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」

「アホか。たかが子供のケンカを止めるのに、秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」

「わかりました」

ロングビルは去っていった。

「オールド・オスマン」

「うむ」

オスマンは、杖を振った。壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリの広場の様子が映し出された。

剣を左手に持ち替えた瞬間、僕に突っ込んで来る七体のゴーレムの動きが、テレビのコマ送りのようにゆっくりと近付いて来る。

ハハッ！これがガンダールヴの力か！面白い！

僕は、ゴーレムに一瞬で近付き、一体のゴーレムを切り裂いた。続け様に、もう一体のゴーレムを一突き、そして薙払う。

近付いて来たゴーレムが右の拳を突出す。

僕は剣で受け流し、返す剣で、薙払う。

残り四体！

一体のゴーレムに蹴りをお見舞いし、後ろにいた三体のゴーレムに激突する。

僕は、体勢を崩した四体のゴーレムを、一気に切り裂いた。弱い、弱すぎる。こんなんじゃ、練習台にもなりやしない。

「ねえ、もう終わり？」

「そ、そんなバカな……。僕のワルキューレが……」

呆然としているギーシュに近寄る。

剣を顔の前に突出し、もう一度問う。

「降参する？」

ギーシュは震える声で、こう言った。

「ま、参った」

見物していた連中が、何やら騒いでいるが、僕は気にせず歩いていく。

「ケント！」

ルイズが駆け寄って来る。

「ほら、約束通り、怪我をせずに勝ったよ」

「あんた！そんなに強いなんて聞いてないわよ！」

「聞かれなかったからね」

「そうゆう問題じゃないでしょ！」

自分で勝手に、僕が弱いつて決め付けたくせに。

「僕はシエスタのところにいつてくるから」

僕はそう言い、その場を去る。

後ろでルイズが何やらいつているが、気にしない気にしない。

「ルイズ。彼は何者なんだ？この僕の『ワルキューレ』を倒すなんて……」

「ただの平民でしょ」

「ただの平民に、僕のゴーレムが負けるなんて思えない」

「ふんだ。あんたが弱かっただけじゃないの？」

「使い魔のくせに、勝手なことばかりして！」

オスマンとコルベールは、『遠見の鏡』で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいましたか……」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』メイジですが、それでもただの平民に後れをとると思えません。そしてあの動き！あんな平民見たことない！やはり彼は『ガンダールヴ』！」

「うむむ……」

「オールド・オスマン。さっそく王室に報告して、指示を仰がないことには……」

「それには及ばん」

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガンダールヴ』！」

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」

「そのとおりです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』。その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……、その強力な呪文ゆえに。知ってのとおり、詠唱時間中のメイジは無力じゃ。そんな無力な間、己の体を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ。その強さは……」

その後を、コルベールが興奮した様子で引き継いだ。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかったとか！」

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その少年は、ほんとうにただの人間だったのかね？」

「はい。どこからどう見ても、ただの平民の少年でした。ミス・ヴァリエールが呼び出した際に、念の為『ディテクト・マジック』で確かめたのですが、真正正銘、ただの平民の少年でした」

「そんなただの少年を、現代の『ガンダールヴ』にしたのは、誰なんじゃね？」

「ミス・ヴァリエールですが……」

「彼女は、優秀なメイジなのかね？」

「いえ、というか、むしろ無能というか……」

「さて、その二つが謎じゃ」

「ですね」

「無能なメイジと契約したただの少年が、何故『ガンダールヴ』になったのか。まったく謎じゃ。理由が見えん」

「そうですね……」

「とにかく、王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい。そんなオモチャを与えてしまつては、またぞろ戦でも引き起こすじやろうて。宮廷で暇をもてあましている連中はまったく、戦が好きじゃからな」

「ははあ。学院長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

「伝説の使い魔『ガンダールヴ』か……。いったい、どのような姿をしておったのだろうかなあ」

コルベールは夢見るように呟いた。

「『ガンダールヴ』は、あらゆる『武器』を使いこなし、敵と対峙したとありますから……」

「ふむ」

「とりあえず腕と手はあつたんでしようなあ」

さて、シエスタを見つけたのはいいんだが、シエスタは僕に逃げ出したことを謝ったり、

「平民でも貴族に勝てるんですね！」と目をキラキラさせてこっちを見てきたりするものだから、早々に話を切り上げて、逃げ出してしまったのだ。

ちなみに、逃げた場所は使い魔たちのところだ。

「ああ、動物を撫でると、癒されるなあ」

シルフィードや近寄ってきた使い魔たちの相手をしていると、背後に人の気配を感じる。

「誰だ」

そう短く問い掛けながら、振り向く。

そこに居たのは青い髪をした、小柄な少女。タバサだった。

「あなたは、何者？」

「元一般人にして、ルイズの使い魔の異世界人だよ？」

「……………」

タバサは沈黙している。

「まあ、少なくとも、タバサの敵ではないよ」

「……………」

「僕はそろそろルイズのところに戻るよ。じゃあね。みんな」

使い魔たちに別れを告げ、ルイズを探しに行く。

タバサは、その場に立尽くしたままだった。

第六話

僕がゼロの使い魔の世界に来てから、一週間が経った。僕の使い魔としての一日を紹介すると、こんな感じだ。

まず、朝起きる。だが、起きる時間が早い。

朝早く起きると、人がいないからだ。自分の部屋がない以上、独りきりでいられる時間は貴重だ。だから、僕はいつも六時に起きる。

僕は朝起きると、洗濯物をシエスタに渡しに行く。

渡した後は、屋上で剣の鍛練をする。

七時頃になると、ルイズを起こしに行く。

ルイズは朝に弱いから、僕に起こされないと、起きれない。

「ルイズ。朝だよ」

言いながら、毛布を剥ぎ取る。

ルイズが起きると、着替えを用意し、予め準備しておいた水桶とタオルを机の上に置く。

その後、僕はルイズが着替え終わるまで、扉の前で待つ。

ルイズが出てきたら、食事を済ませ、授業に向かう。

教室に着いたら、僕はいつも、タバサの隣りに座る。何故なら、タバサの隣りの席はいつも空いてるからだ。

授業が始まると、僕はいつも寝ている。周りには起きているように見せかけて。

昼食の時間になると、厨房で食事を摂る。朝は、スープだけで充分だけど、昼はさすがに足りないからだ。

今日も厨房で食事をしに来ると、

「『我らの剣』が来たぞ！」

と、コック長のマルトーに歓迎される。

マルトーは貴族であるギーシュを剣で倒した僕を『我らの剣』と呼び、もてなしてくれる。

僕が席に着くと、シチューの入った皿と、柔らかいパンを出してくれた。

「有り難う」

「今日のシチューは特別ですわ」

僕は一口シチューを頬張る。

「美味しい」

「そりゃそうだ。そのシチューは、貴族連中に出してるものと、同じもんさ」

「ふん。そうなんだ」

「ふん！あいつらは、なに、確かに魔法はできる。土から鍋や城を作ったり、とんでもない炎の玉を吐き出したり、果てはドラゴンを操ったり、たいしたもんだ！でも、こっやって絶妙の味に料理を仕立て上げるのだって、言うなら一つの魔法さ。そう思うだろ、ケント」

「まあ、魔法も言ってみれば単なる技術だからねえ」

「いいやつだな！お前はまったくいいやつだ！」

マルトーは僕の首に腕を巻き付けた。

「なあ、『我らの剣』！俺はお前の額に接吻するぞ！こら！いいな！」

「その呼び方も接吻も辞退させてもらっよ」

「どうしてだ？」

「その呼び方は恥ずかしいし、男に接吻されても嬉しくない」

マルトーは、僕から体を離すと、両腕を広げて言った。

「お前はメイジのゴーレムを切り裂いたんだぞ！分かってるのか！」

「うん」

「なあ、お前はどこで剣習った？どこで剣を習ったら、あんな風に振れるのか、俺にも教えてくれよ」

「知り合いの剣技を真似しただけだよ」

「お前たち！聞いたか！」

「聞いてますよ！親方！」

「本当の達人というのは、こういうものだ！決して己を誇ったりしないものだ！見習えよ！達人は誇らない！」

「達人は誇らない！」

「やい、『我らの剣』。俺はそんなお前がますます好きになったぞ。どうしてくれる」

「そんなこと言われてもねえ……」

僕はいつもこの人のテンションについていけない。

「シエスタ！」

「はい！」

「我らの勇者に、アルビオンの古いのを注いでやれ」

「僕の国ではお酒は二十歳になってからって法律で決まってるんだ」

僕はそう言つと、席を立つ。

「それじゃ、僕はもう戻るよ」

後ろで、さっきと同じ様なことを叫んでいるマルトーを無視してその場を去る。

その頃、宝物庫の前ではロングビルがいた。

「まあ、こここの錠前にアンロックが通用するとは思えないけどね」

何やら不穏なことを口走るロングビル。
扉に鍊金の呪文を唱え、杖を振る。だが、扉に変わったところは見られない。

「スクウェアクラスのメイジが、固定化の呪文をかけているみたいね」

そのとき、階段を上ってくる足音に気付く。
杖を折り畳み、ポケットにしまう。
現われたのはコルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが……」

「はあ。それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで、一日がかりですよ。何せここにはお宝ガラクタひつくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしょうね」

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

「それが……、ご就寝中なのです。まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

「なるほど。ご就寝中ですか。あのジジイ、じゃなかったオールド・オスマンは、寝ると起きませんからな。では、僕も後で伺うことにしよう」

コルベールは歩き出したが、すぐに立ち止まり、

「その……、ミス・ロングビル」

「何でしょう？」

照れくさそうに、話し始めた。

「もし、よろしかったら、なんですが……、昼食をご一緒にいかがですか？」

「ええ、喜んで」

二人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

「は、はい？何でしょう」

「宝物庫の中に、入ったことはありませんか？」

「ありますとも」

「では、『破壊の杖』をご存知？」

ロングビルは、コルベールに色目を使って、『破壊の杖』と宝物庫の弱点を聞き出した。

「大変興味深いお話しでしたわ。ミスタ・コルベール」

さて、今、僕はルイズの部屋の前にいる。
ルイズが着替えているからだ。あれから、ルイズが着替えるときは、
外で待つことにしているのだ。
ルイズの着替えを待っていると、キュルケの部屋からフレイムが現
われた。

「フレイム？どうしたんだ？」

フレイムが僕のズボンの裾を咥えて、引っ張る。まるで、ついて来
いと言わんばかりに。

この展開はもしかして……。

そう思いながらも、フレイムを振り切れずにキュルケの部屋に連れ
込まれる。

部屋は真っ暗だった。

そして、この暗がりから、キュルケの声がした。

「扉を閉めて？」

ああ、やっぱり思いながらも、素直に言うことをきく僕。

「ようこそ。こちらにいらっしやい」

「真っ暗だよ」

キュルケが指を弾く。

すると、部屋の中に立てられたロウソクが、一つずつ灯っていく。
すごい演出だな。

「そんなところに突っ立ってないで、いらっしやいな」

言われた通りにする。

「座って？」

「何か用？」

「あなたは、あたしをはしたない女だと思うでしょうね」

「とっくに思ってるよ」

「思われても、しかたがないの。分かる？あたしの二つ名は『微熱』

」

「知ってるよ」

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの。いきなりこんな風にお呼びだてしたりしてしまうの。分かってる。いけないことよ」

どんだん話が進んでいくなあ。

「でもね、あなたはきっとお許し下さると思うわ」

「何を？」

キュルケは、僕の手を握ってくる。

「恋してるのよ。あたし。あなたに。恋はまったく、突然ね」

「君がね」

「あなたが、ギーシュを倒したときの姿……。かつこよかったわ。まるで伝説のイーヴアルデイの勇者みたいだったわ！あたしね、それを見て痺れたのよ。信じられる！痺れたのよ！情熱！あああ、情熱だわ！」

「そ、そうなんだ」

やや、ヒキ気味になってしまった。

「二つ名の微熱はつまり情熱なのよ！その日から、あたしはぼんやりとしてマドリガルを綴ったわ。マドリガル。恋歌よ。あなたの所為なのよ。ケント。あなたが毎晩あたしの夢に出てくるものだから、フレイムを使って様子を探らせたり……。ほんとに、あたしってば、みつともない女だわ。そう思うでしょう？でも、全部あなたの所為なのよ」

キュルケはそう言って、僕に顔を近付けてくる。キスをするためだろう。

「悪いけど、いきなり好きだと言われても、僕は君の想いに応えられない」

「どうして？」

「好きでもない相手に告白されて、すぐに付き合おうなんてできない。そうゆうことに答をだすには時間が必要なんだ」

僕はそう言い、部屋から出る。

後ろから、

「ペリッソン！ええと、二時間後に」とか、
「スティックス！ええと、四時間後に」とか聞こえてきたが、聞か
なかったことにする。

「ルイズ。入るよ」

そう言って、部屋に入る。

「遅かったわね。いつたいなにをしていたの」

どうやらルイズはご立腹の様だ。

「キュルケに呼ばれた」

僕が簡潔に答えると、

「キュルケですって！どうしてあんたがキュルケに呼ばれるのよ！」

僕が、さっきあったことを説明すると、

「ふうん。あんた、キュルケの誘いを断ったんだ。やるじゃない。
キュルケったら、さぞかし悔しがってるんじゃない？」

ルイズは少し嬉しそうだ。

「ところで、ルイズ。明日は休みだったよね？」

「ええ。明日は虚無の曜日だから休みよ。それがどうかしたの？」

「剣が欲しいんだ」

「持っていないの？」

「ギーシュと戦ったときに持ってたのは、折れちゃったよ」

デルフリンガーを手に入れる為の嘘だ。

それを知らないルイズは少し呆れた感じで聞いてきた。

「他の剣とか持っていないの？剣士なんでしょ？あんだ」

「そんな幾つも持っていないよ」

「そう………」

ルイズは、暫く考え込んだ。

「ルイズ？どうしたんだ？」

不審に思い、声をかけると、

「そうね……。分かったわ」

と、一人で納得するように頷いた。

「なにが？」

「あんたに、剣、買ってあげる」

「いいの？」

望み通りの展開になったな。

「キュルケに好かれたんじゃ、命がいくつあっても足りないし。降り懸かる火の粉は自分で払いなさい」

「有り難う。ルイズ」

ルイズは少し、照れたようで、

「分かったら、さっさと寝る！明日、街に連れってあげるから」

なんとかなったな。

これで、デルフリンガーが手に入る。

明日のことを考えながら、僕は眠りについた。

第七話

キウルケは、昼前に起床した。今日は虚無の曜日である。窓を眺めて、窓が壊れていることに気付く。それを、ぼくと見つめて、昨晚の出来事を思い出した。

「そうだわ、ふあ、色んな連中が顔を出すから、吹っ飛ばしたんだっけ」

そして、窓のことなど微塵も気にせずに、化粧を始めた。

あたしの誘いを断る人なんて、初めてだわ。でも、そんなところもいい。絶対に口説いてみせるわ！と妙にやる気を出している。恋の狩人とは、よくいったものだ。

化粧を終え、ルイズの部屋に行く。

だが、ノックをしても返事がない。扉には鍵がかかっていた。

キウルケはアンロックを唱え、部屋に入る

「相変わらず、色気のない部屋ね……」

ルイズの鞆がない。ということは、何処かに出かけたのだろう。窓から外を見まわした。

門から馬に乗って出ていく、健年とルイズの姿が見えた。

「なによー、出かけるの？」

キウルケは少し考え、ルイズの部屋を飛び出した。

タバサは自分の部屋で本を読んでいた。
タバサにとって、虚無の曜日は自分の世界に好きなだけ浸っている貴重な日である。

その邪魔をする者は数少ない例外に属する人間でも、よほどの場合でない限り、鬱陶しく感じるのであった。

その日も、どんどんドアが叩かれたのでタバサはとりあえず無視した。

そのうちに、激しく叩かれ始めたので、サイレントの呪文を唱えた。サイレントによって、タバサの集中を妨げるノックの音は消え去った。

すると、ドアが勢いよく開かれた。

入ってきたのはキュルケだった。キュルケは何かを大袈裟に喚いたが、サイレントによって、タバサには声が届かない。

キュルケはタバサの本を取り上げ、肩を掴み、自分に振り向かせるしかたなく、タバサはサイレントの魔法を解いた。

「タバサ。今から出かけるわよ！早く支度をしてちょうだい！」

「虚無の曜日」

そう短く呟き、本を取り返そうとした。

キュルケは高く本を掲げる。それだけで、タバサの手は、本に届かない。

「分かってる。あなたにとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしは痛いほどよく知ってるわよ。でも、今わね、そんなこと言ってもらえないの。恋なのよ！恋！」

タバサは首を横に振る。

「そうね。あなたは説明しないと動かないのよね。ああもう！あたしね、恋したの！でね？その人が今日、あのにくいヴァリエールと馬に乗って出かけたの！あたしはそれを追って、二人がどこに行くのか突き止めなくちゃいけないの！あなたの使い魔じゃないと追いつかないのよ！助けて！」

キュルケはタバサに泣き付いた。

タバサはやつと頷いた。

「ありがとう！じゃ、追いかけてくれるのね！」

タバサは再び頷き、窓を開け、口笛を吹いた。

そして、窓から飛び降りた。キュルケもその後を追う。

落下する二人をシルフィードが受け止める。

「いつ見ても、あなたのシルフィードは惚れ惚れするわね」

「どっち？」

キュルケが、あ、と声をあげる。

「分かんない……。慌ててたから」

「馬二頭。食べちゃだめ」

シルフィードは短く鳴いて了解の意を主人に伝える。

それを聞いたタバサは、キュルケから本を奪い取り、シルフィードの背びれを背もたれにして、本を読み始めた。

今、僕たちはトリステインの城下町を歩いている。

「狭いな」

簡潔な感想を述べる。

「狭いって、これでも大通りなんだけど」

「僕の世界の大通りはもつと広がったんだよ」

そうばやく僕を尻目に、ルイズは説明を始めた。

「ブルドンネ街。トリステインで一番大きな通りよ。この先にトリステインの宮殿があるわ」

「ふ〜ん」

気のない返事をし、辺りを見渡す。

「ほら、よそ見しない。スリが多いんだから！あんだ、上着の中の財布は大丈夫でしょうね？」

財布は僕が持っている。ルイズが財布はあんだが持ちなさい、と言っ
て持たせたからだ。

「大丈夫だよ。今も財布を盗ろうとしたヤツから逆に盗んでるし」

「は？」

間抜けな顔をしているルイズに新たに増えた、財布を見せる。後ろでは、「俺の財布がねえ！」とか「腕が！俺の腕があ！」といった叫び声が聞こえるが、気にしないことにする。

「け、けど、魔法を使われたら一発でしょ」

「これでも？」

僕は杖を三本取り出す。

「ハア、なんかもうどうでもいいわ。さっさといきましょ」

ルイズは何やら疲れた顔をしてそう言った。

「了解」

と短く応じ、武器屋に向けて、歩き出す。

「ダーリンったら、結構過激なのね……」

「同意する」

健年とルイズを尾行していた二人は、健年が何をしていたか、よく見えていた。

まず、スリの腕を取り、財布を盗み、腕を折る。魔法を使おうとし

た者にも同様に、杖を奪い、財布を盗み、腕を折る。
流れる様な動作でそれをやっていたのだ。

「過激なところもいい」

「……………」

タバサはそんなことを言うキュルケを無視した。

「ここが武器屋？」

「そうよ」

剣の形をした看板が下がっている。

RPGの武器屋みたいだな。

そう思い、後ろを見る。そこには路地の陰に隠れているキュルケとタバサがいた。

とりあえず、声をかけてみる。

「その二人、出ておいで」

すると、二人はあっさりと出てきた。

「あー！なんであんなたちがここにいるのよ！」

「あら、ヴァリエール。奇遇ね」

「偶然」

白々しい嘘を平然と吐くキュルケとタバサ。

「やあ、二人共。奇遇だね」

とその嘘に便乗する僕。

「ダーリン！ここには買い物に来たの？」

「剣を買おうと思ってね」

「じゃあ、いつしょに見ましようよ。あたしが買ってあげるわ」

「ちょっとキュルケ！なに勝手なこと言ってるのよ」

ルイズが怒鳴る。

「まあいいじゃないか。くれるって言っなら貰っところよ」

僕はルイズを宥めながら店に入る。

二人もそれに続く。

「旦那。貴族の旦那。うちは真つ当な商売してまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

と店に入ってきたルイズたちを見て言う店主。

僕は、原作通りの展開は無視して、武器を物色する。

解析魔術を使っているので、ここに置いてあるのがガラクタばかりなのがよく分かる。

「良い武器、見つかった？」

そう聞いてきたのはタバサだ。

ルイズとキュルケは店主の持ってくる武器を見ている。

「いや、ここにあるのは使えそうにないな」

僕がそう言つと、剣が乱雑に置かれた場所から、

「見る目があるじゃねえか、坊主」

という声が聞こえてきた。

そこにあるのは、錆のあるボロい長剣だった。

「やい！デル公！お客様に失礼なこと言っくんじゃねえ！」

「インテリジェンスソード……」

タバサが呟いた。

「ルイズ。これがいい」

僕がそう言つと、ルイズが、

「え〜〜〜〜。そんなのにするの？もっと綺麗で喋らないのになさいよ」

キュルケも、

「そうよ。あたしがもっといいの買つてあげるわよ」

と言ってきた。

「いや、これがいい」

ルイズが文句を言いながら、店主に尋ねた。

「あれ、おいくら？」

「あれなら、百で結構でさ」

「安いじゃない」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」

ルイズが勘定を済ませている間に、良さそうな武器を幾つか見つける。

「キュルケ。これ買ってくれる？」

僕が手に取ったのは、この店では数少ない業物の弓だ。

「いいわよ」

キュルケは弓をとり、店主のところに行く。

「何か、買ってあげる」

タバサがなにを思ったのか、そんなことを言い出した。

「いいの？」

「構わない」

せつかなので、甘えちゃおう。

僕はハルバートを手に取る。

「これ、買ってくれる？」

「分かった」

タバサが頷いたので、僕が店主のところに持っていく。

タバサでは持てそうにないからだ。勘定を済ませて、店を出る。

「三人共、武器を買ってくれて有り難う。大切にするよ」

と笑いかけると、何故か顔を赤らめながら、

「べ、別に気にしなくてもいいわよ」

「ダーリンのためならお安いご用よ」

「気にしないで」

と言ってきた。

ちなみに、上からルイズ、キュルケ、タバサである。

「どうしたの？三人共、顔が赤いよ？」

「な、なんでもないわよ！」

「ダーリンは気にしなくていいのよ」

「気のせい」

三人共様子がおかしい。何故だろう？

まあ、どうでもいいか。さっさと帰ろう。

僕たちは学院へ帰っていった。

その道中、フーケのゴーレムをどうやって倒すか、考えながら……。

第八話

買い物を終えた僕たちは、学院に戻ってきたんだけど、何故か僕は縄で縛られ、シルフィードに吊るされていた。

下では、ルイズとキュルケが言い争っている。

ルイズとキュルケは学院に戻ってくる道中に喧嘩をしたのだ。

喧嘩の原因が何なのかは知らない。

というか、隣りを歩いていたのに、何一つ聞いちゃいなかった。

二人はいつの間にか、「決闘よ！」なんて言い出して、今に至る。

まったく、傍迷惑な話だ。まあ、これで、フーケ出現のフラグがたつたな。

他人事の様にそんなことを考えていると、僕の後ろの壁が爆発した。壁にはヒビが入っている。

相変わらず、凄い威力だな……。もし、当たったらと思うと、ゾッとしないな。

次の瞬間、僕は浮遊感を覚えた。

キュルケのファイヤーボールがロープに命中し、燃やし尽したのだ。

「何この浮遊感、気持ち悪っ！」

地面が近付いてくる。

すると、シルフィードに乗っていたタバサがレビテーションをかけてくれた。

「有り難う。助かったよ。タバサ」

「……………」

僕の足が地に着く。

「ついでに縄を解いてくれないかな？」

「分かった」

タバサが縄を解いてくれた。

そのとき、勝ち誇っていたキュルケの後ろに、巨大な土ゴーレムが現われた。

「な、なにこれ！」

「きゃああああああああ」

色気のない悲鳴だな。

ぼんやりとそんなことを考えながら、ルイズを抱えてシルフィードの下に急ぐ。

フーケは巨大ゴーレムの肩の上で、

なんだかよくわからないけど、固定化の魔法が解けたのはチャンスだね。さっさと壁を壊して破壊の杖を頂いちまおうかね。

などと、考えていた。

フーケはヒビの入った壁を壊し、破壊の杖を盗み出し、

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』と壁に文字を刻んだ。

あ、出てきた。

ゴーレムの肩の上にフーケが飛び乗り、草原の真ん中を歩いて行く。だが、次の瞬間、ゴーレムは突然崩れ落ちた。そこには、もうフーケの姿はなかった。

翌朝、トリステイン魔法学院では、宝物庫に学院中の教師が集まっていた。

僕の目の前では、教師たちによる責任の押しつけあい、始まっていた。

僕はそんな教師たちは無視して、立ったまま寝ていた。

ん、なんだか視線を感じる。

目を覚ますと、オスマンがこっちを見ていた。

どうやら、話がもうすぐ終わるようだ。

ルイズ、キュルケ、タバサの三人が「杖にかけて！」と同時に唱和して、恭しく礼をする。僕も礼をしておいた。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじゃ。魔法は目的地につくまで温存したまえ。ミス・ロングビル！」

「はい。オールド・オスマン」

「彼女たちを手伝ってやってくれ」

「もとよりそのつもりですわ」

僕たちはロングビルを案内役に、早速出発した。キュルケがロングビルに話しかけているが、僕はぼーっと周りの景色を眺めていた。しばらくすると、馬車は深い森に入った。

「ここから先は、徒歩で行きましょう」

馬車から降り、先に進む。

「なんか、暗くて怖いわ……、いやだ……」

キュルケが僕の腕にしがみついてきた。

「くつつかないですよ。歩き難いだろ」

「だってー、すごくー、こわいんだものー」

「はいはい、嘘はいいからねー」

僕はキュルケの手をやりわりと引き剥がす。

「ダーリンのイケず」

なんだかなーと思いつつ、先を急ぐ。

十分程歩いていると、開けた場所に出た。

真ん中に、廃屋がある。僕たちは森の茂みに身を隠した。タバサが自分の立てた作戦を説明している。

「で、偵察兼囃は誰がやるの？」

キュルケが尋ねる。

「すばしっこいの」

皆が僕を見てくる。

なんでさ。まあ、分かってたけど。

「分かったよ」

僕はデルフを手に取り、小屋のそばまで近付く。誰も居ないことは分かっているが、不審に思われないよう、小屋の中を窓から覗く。誰も居ないことを確認し、皆を呼ぶ。タバサを先頭にして、こっちに来る。

「誰も居ないよ」

タバサはドアに杖を振り、

「畏は無いみたい」そう呟いて、中に入っていく。

「僕が見張りをするから、皆は中に入りなよ」

僕がそう言うと、ルイズとキュルケが中に入る。

「ロングビルさんは、入らないんですか？」

「私は辺りを偵察しておきます」

ロングビルは森の中に消えた。

僕はさっきまで隠れていた茂みに戻り、ハルバートと弓を手に取る。もうそろそろだな。

小屋の前にいく。

すると、空き地の真ん中から地面が盛り上がり、ゴーレムになる。

「ゴーレムが来たぞッ！早く小屋から出る！」

僕がそう言うのと同時に、ゴーレムが小屋の屋根を吹き飛ばす。

「ゴーレム！」

ルイズとキュルケの叫び声が聞こえる。

タバサは呪文を唱え、巨大な竜巻をゴーレムに放つ。

だが、ゴーレムには効果がない。

次にキュルケが呪文を唱え、ゴーレムに火炎を放つ。が、ゴーレムは意にも介さない。

「無理よこんなの！」

「退却」

キュルケとタバサが逃げ出す。

ルイズは爆発魔法でゴーレムに攻撃する。

しかし、ゴーレムの表面を削るだけで効果はない。

「ルイズ！早く逃げろ！」

「いやよ！あいつを捕まえれば、誰ももう、わたしをゼロのルイズとは呼ばないでしょ！」

「僕たちの目的は破壊の杖の奪還だ。タバサが持っていたのがそうなんだろう？なら、僕たちは目的を果たす為にここから離脱すべきだ。それに、ルイズじゃ勝てない」

「やってみなくちゃ、分かんないじゃない！」

「分かるから言ってるんだ」

だから逃げる。そう言うと、ルイズは、

「わたしは貴族よ。魔法が使える者を、貴族と呼ぶんじゃないわ！敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ！」

ゴーレムがルイズを踏みつぶそうと、足を上げた。ルイズは爆発魔法をゴーレムに放つ。たが、さっきと同じで、ゴーレムの表面を削るだけだった。

ルイズの視界には、ゴーレムの足しか映らない。ルイズは目をつぶった。

「まったく、わがままな主人を持つと、使い魔は苦勞するよ」

ルイズが目を開けると、目の前には、二、三メートルはある、岩の大剣でゴーレムの足を受け止めている、健年の姿があった。

あゝあ、ルイズたちの目の前で投影使っちゃったよ。なんて説明すればいいんだ？

「ケ、ケント。そ、それ、どっから出したのよ」

やっぱり聞いてきたか。

「後で説明するよ」

バーサーカーの斧剣を地面に突き刺し、ゴーレムの拳を受け止める。

「タバサ、ルイズを頼む」

僕がタバサを呼ぶと、シルフィードがこっちに飛んできた。

「乗って！」

タバサが叫ぶ。

僕はルイズをシルフィードの上に押し上げた。

「あなたも早く」

「僕はあいつを倒さないといけないから、早く行きなよ」

「ケント！」

ルイズが怒鳴る。

僕はそれを無視して、ゴーレムに攻撃を開始する。デルフでゴーレムの右腕を切り落とす。次にハルバートで、ゴーレムの左足を切り崩す。

ゴーレムがバランスをとれずに転倒する。
そのスキに後退し、弓を構える。

「I am the bone of
my sword」

言霊を紡ぎ、幻想を造り上げる。

「カラドボルグ」

僕の手には螺旋剣が現われる。

それを弓に番え、放つ。

ゴーレムを貫いた。

「ブローケン・ファンタズム」

幻想を膨れさせ、爆発させる。

瞬間、周囲の音が消失した。

「な、なに、あれ……」

ルイズ、キュルケ、タバサの三人は呆然としていた。

健年の手に、突如、出現した剣に込められた、魔力量に。

そして、あのゴーレムを貫いた瞬間に起こった爆発に。

三人は魅入られていた。

ルイズは、ケントが異世界人だと言っていたのを思い出し、キュルケは、単純に、凄いと感心し、タバサは、健年の強さに戦慄した。

ハア……、疲れた。宝具の投影なんてするもんじゃないな。

そんなことをぼんやりと考えていると、シルフィードが降りてきた。
「ケント！」

「皆、勝ったよ」

シルフィードから降りると、三人がこっちに駆け寄ってくる。

そして、三人に抱き締められた。

あれ、フーケを捕まえてから、抱き付かれるんじゃなかったっけ？
そんなことを考えながら、三人の抱擁を受ける。

ロングビルが茂みから現われた。

「ミス・ロングビル！フーケはどこからあのゴーレムを操っていたのかしら」

キュルケがそう尋ねると、ロングビルは首を横に振る。

抱擁を解いた三人とロングビルはゴーレムの残骸を調べ始めた。僕は破壊の杖を確保している。

破壊の杖は使わなかったから、フーケがどうするか、予測できない。油断せずにいこう。

「皆、フーケはとつくに逃げてると思うから、学院に戻ろう」

僕がそう提案すると、ルイズとキュルケが、難色を示す。タバサとロングビルは僕の提案に賛成したので、

「賛成三と反対二で学院に戻ることが決まったよ」

と言うと、二人はしぶしぶ従った。

学院に戻り、学院長に報告する。

四人が学院長と話をしている。僕はこれからどうするか、考えている。

どうやら報告は終わったようだ。

三人は礼をすると部屋から出る。

ルイズは、立ち止まって僕を見てくる。

「僕はオールド・オスマンに話があるから、先に行つてて」

ルイズが今度こそ部屋から出ていく。

「なにか、私に言いたいことがおありのようじゃな」

「ええ」

「言っでごらんさい。できるだけ力になろう。君に爵位を授けることはできんが、せめてものお礼じゃ」

オスマンは、コルベールとロングビルに退室を促した。

コルベールはしぶしぶと、ロングビルはさっさと部屋を出ていった。僕はオスマンに自分がこの世界の人間ではないことと、破壊の杖も自分の世界の武器だということを説明する。

すると、オスマンは、破壊の杖を手に入れた経緯とガンダールヴのルーンについての説明をした。どちらも既に知っている事柄ではあるが、知らないフリをする。

「おぬしが元の世界に帰れるように、私なりに調べるつもり
「その必要はないですよ」なんじゃと？」

オスマンが驚いた顔でこっちを見てくる。

「僕は元いた世界では既に死人なんです。だから、僕はこの世界で
生きます」

「まあ、こつちの世界も住めば都じゃからの」

そう言って笑うオスマン。ちなみにバルタン笑いだ。
フーケの正体について、説明しておくか。

「フーケのことなんですが、僕はフーケの正体を知っています」

「なッ！なんじゃと！」

オスマンはかなり驚いた様子で、こつちを見てくる。

「フーケの正体はロングビルさんです」

「そ、それは本当か？」

「本当ですよ。根拠があります」

「その根拠とやらを聞かせてもらおうかの」

オスマンが探る目付きでこちらを見てくる。

「ロングビルは朝から調査をしていたと言っていました。それは不可能です。学院から、あの小屋まで行くのに、何時間もかかったのにそれを往復したのに朝に帰って来られるのはおかしいと思いませんか？」

「ふむ……。確かに」

「フーケは、破壊の杖の使い方が分らなかった。そこで、フーケはこう考えたのです。『魔法学院の者なら知っているのではないかとね。だから、僕たちをあの小屋まで連れて行ったのです』」

「うむ。分かった。では、フーケをどうする？」

こちらを試すように聞いてくるオスマン。

「捕まえはしません。その代わりにここでしっかりと働いてもらいましょう。僕の協力者としてね。それが無理なら、故郷に帰らせま

しょう」

「ほっほっほっ。なかなか面白いことを思いつくもんじゃのう。よろしい。おぬしの言う通りにしよう」

「有り難う御座います。それでは失礼します」

僕は部屋を出た。

アルヴィーズの食堂の上の階にあるホールで、フリッグの舞踏会が行われている。

僕はバルコニーでぼくつとしながら、月を見ていた。

「相棒、中に入らねえのか？」

デルフが話しかけてくる。

「僕はね、ああゆう喧しいのは苦手なんだ」

「相棒は変わってるねえ」

キュルケはさつきまで、僕のそばにいたが、パーティーが始まると中に入ってしまった。

たくさんの男に囲まれ、談笑している。

タバサは、お前はフードファイターか、とツツコミたくなるぐらい料理を食べている。

見ているだけで胸焼けしそうだ。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな~~~~り~~~~!」

やっと来たのか。遅かったな。

ルイズは群がる男たちの誘いを断っている。

バルコニーで月を見ている僕に気付いたらしく、こっちに来る。

「楽しんでるみたいね」

「そう見える?」

デルフがルイズに

「おお、馬子にも衣装じゃねえか」と言った。

「うるさいわね」

「ルイズは踊らないの?」

「相手がいないのよ」

「たくさん誘われているように見えたけど?」

ルイズが手を差し伸べる。

「踊ってあげても、よくってよ」

「僕は踊りたい、なんて言った覚えはないんだけど?」

ルイズは沈黙した。

「今日だけだからね」

ルイズはドレスの裾を両手で持ち上げ、一礼した。

「わたくしと一曲踊ってくださいませんか。ジェントルマン」

「喜んで」

僕は笑いを噛み殺しながら、ルイズの手を取り、ホールへ向かう。

「ダンスなんてしたことないよ」

「私に合わせて」

見よう見まねで踊る。

最初はぎこちない動きだったが、だんだん上手くなってきた。

「上手いじゃない」

ルイズが褒める。

「ルイズの動きを真似しただけだよ」

「ホントに、なんでもできるのね」

そう言うと、ルイズは黙り込んだ。

「ルイズ？」

「……ねえ、ケント。信じてあげるわ」

「何を？」

「……その、あんたが別の世界から来たってこと」

「なんだ。まだ信じてなかったのか」

「今まで、半身半疑だったけど……。でも、あんな凄いの見せられ
たら、信じるしかないじゃない」

ルイズは少し俯き、

「ねえ、帰りたい？」

と聞いてきた。

「別に」

「べ、別につてなによ。あんたは帰れなくてもいいの？」

「もうあの世界には、僕の居場所はない。だから、僕はこの世界で
生きていく。つまり、君の使い魔でいてあげるってことだよ」

「そう……」

ルイズは顔を赤らめ、

「ありがとう」

と言った。

「その……、フーケのゴーレムに、潰されそうになったとき。助け
てくれたじゃない」

「気にする必要はないよ」

「どうして？」

「僕は、君の使い魔だろ？なら、それは当然のことだ。だから、ル
イズが気にする必要はないよ」

そう言っただけかけるとルイズは顔を赤らめた。

「どうしたの？顔が赤いよ？」

「な、なんでもないわよ」

とうとう焦ってるんだろう？
すると、ルイズは誤魔化す様に口を開く。

「ね、ねえ。ケントの持ってたあの剣は、なんだったの？」

やっぱり聞いてきたか。説明するの面倒だな。

「明日、授業が終わったら、キュルケとタバサをルイズの部屋に呼
んでよ。そのときにまとめて説明するから」

「分かったわ」

バルコニーで存在を忘れているデルフリンガーは、ホールの二人の様子を見て、こう言った。

「おでれーた！相棒！てーしたもんだ！主人のダンスの相手をつとめる使い魔なんて、初めて見たぜ！」

デルフリンガーは、踊る二人を見ながら、おでれーた！と繰り返していた。

第九話

舞踏会の翌日、僕は昼食が終わった後、学院長室にいた。

「さて、ミス・ロングビル。いや、フーケよ。何か弁明があるかの？」

今、学院長室には、僕とオスマン。そして、杖を取り上げられ、拘束されたロングビルこと、フーケがいた。

「よくわたしがフーケだと分かったね」

「彼のおかげでの」

オスマンがこっちを見てくる。

「落ち着いて考えれば、誰にだって分かりますよ」

「あまり自分を過小評価するもんじゃないよ。じゃないと、あんたに気付かれたわたしの立場がないじゃないか」

「じゃあ、どうだ、凄いだろ。って言った方がいいですか？」

フーケは首を横に振り、

「いや、わたしが間違ってたよ。で、わたしはどうなるんだい？魔法衛士隊にでも引き渡されるのかい？」

そう聞いてきた。

「貴女の選択肢は三つあります。

一つ、貴女の言う通り、魔法衛士隊に引き渡す。

二つ、ここで秘書を続ける。

三つ、家族の待つ家に帰る。

さあ、どれにする？」

「ハアッ！？二つ目と三つ目が緩すぎないかい？」

予想通りなりアクションだな。

「ここで秘書を続ける場合は、制限がいろいろ付くし、家に帰る場合は、僕や学院を敵にまわすようなことをしたら……」

ここで一旦言葉を切り、宣言する。

「僕の敵になったことを後悔させるほどの絶望を与えてやる」

少し殺気を込めて言う。

「ひっ!？」

あっ、悲鳴をあげた。

「で、どうする？」

「そ、そうだね……。久し振りにあの娘のところに帰るのも悪くないね。よし、三つ目にするよ」

やっぱり三つ目にしたか。よっぽどセクハラされるのが嫌だったん

だな。可哀相に。

僕は、フーケの拘束具を外してやる。

「それじゃ、これ、少ないですけど、差し上げます」

僕はフーケにお金を渡す。

「え？いいのかい？」

「ええ。どうせスリから奪い取っ……、もとい貰ったモノですから」

フーケは冷や汗を垂らしながら、

「い、今、聞いちゃいけないことを聞いた気がするよ」

と言ったので、

「気のせいですよ」

と爽やかな笑顔で言ってる。

「そ、そう。そ、それじゃ、わたしは帰るよ。これ、有り難く受け取っとくよ。じゃあね」

フーケは部屋から出ていく。

これで、フーケがレコン・キスタに入る可能性は減ったかな？
まあ、敵になっても、また倒せばいいだけだし、どっちでもいいんだけどね。

「オールド・オスマン。僕はもう戻ります」

「何か困ったことができたら来るといい。できる限り、力になるう」

「有り難う御座います。では、失礼します」

僕は部屋から出る。

今は授業中だし、部屋で待機しておくか。

僕はルイズの部屋に戻った。

今日の授業が終わり、ルイズ、キュルケ、タバサの三人は健年の待つ、ルイズの部屋に向かっていた。

「ねえ、ルイズ。ダーリンの話ってなんなの？」

キュルケがルイズに聞く。

「フーケのゴーレムを倒したときに使った剣について、話してくれるそうよ」

ルイズが答える。

「あのときのアレがなんだったのか、気になってたのよね」

「同意する」

「それじゃ、さっさと部屋に行きましょう」

ルイズがそう言うと、キュルケとタバサは首を縦に振り、無言でル

イズの部屋に歩いていった。

扉の向こうに気配を感じ、ドアを開ける。

「思ったより早かったね。さ、早く入りなよ」

僕は三人を部屋に招入れた。

「それじゃ、説明してくれる？あの力はいったいなんだったの？」

開口一番に聞いてくるルイズ。

「あれは、僕のいた世界では、宝具と呼ばれるモノだよ」

「ダーリンのいた世界って、どういうこと？」

そういえば、キュルケには言っていなかったな。

「僕はこの世界の人間じゃない。もっと別の世界から来たんだ」

「ええ！？そうだったの！？あなたたち、知ってた？」

キュルケは僕の言葉に驚き、ルイズとタバサに尋ねた。

「そりゃ知ってるわよ。あんまり信じてなかったけどね」

とルイズ。

「彼に何者か、と聞いたたら、異世界人だ、と言われたことがある」

とタバサが言うと、

「なによー。知らなかったのはあたしだけなのね」

キュルケは拗ねてしまった。

「ごめんごめん。聞かれなかったからね。言うタイミングがなかったんだ」

「もういいわ。そんなことより、ダーリンの元いた世界って、どんなところ？」

「簡単に言うと、貴族や魔法が存在しない世界、かな？」

「そんな世界があるの？」

タバサが聞いてくる。

「ああ。向こうの世界では、魔法の代わりに科学が発展してるんだ。これが科学によって作られたものだよ」

僕はバッグの中に入っていた携帯電話を見せる。

「これは、携帯電話っていう道具だね。遠くにいる人と話すことができるんだ」

「そんなことができるの？」

ルイズが驚いている。

「この世界では無理だけどね」

「ふ〜ん。そうなんだ」

三人は興味深げにケータイを見ている。

「それじゃ、本題に入ろうか。まず、あのとき使ったのは投影と呼ばれている魔術だ」

「あんたのいた世界に魔法はないんじゃないの？」

「表向きはね。向こうの世界では、魔法のことを魔術と呼んでいるんだ。そして、魔術を使うことができる者を魔術師と呼ぶ。魔術師は『魔術は隠匿するもの』としているんだ」

三人は驚いた顔をしている。

「何故、隠すの？」

「魔術師の目的は『根源』に辿りつくこと。他人に自分の研究を見せたりはしないのさ」

三人共、沈黙している。

「話を続けるよ。僕の使った投影魔術は、魔力を自分の想像通りに物質化させる。つまり、魔力で机や椅子を造り上げる魔術なんだ」

「それは魔力で出来てるんでしょ？長続きするものなの？」

キュルケが尋ねる。

「時間が経てば消えるよ。投影魔術は、もともと儀式なんかで使う道具の代替品として使われるものなんだ。だから、投影を使う魔術師は少ないんだ」

「あなたは使っている」

「僕の投影は特殊だね。僕が消えろ、と念じるか、壊れる、と思わない限り存在し続ける」

「どうして？」

「僕が投影に特化した魔術師だからさ。僕からの説明はこれで終わりにしてもいいかな？」

僕がそう聞くと、

「まだあの剣について話をして貰ってないわよ」

やっぱり説明するのって疲れるなあ。

「あれは、宝具って呼ばれる武器の一つだ。宝具は、言ってみれば、伝説の武器だ。僕はそれを投影で作ったんだ」

三人共、驚いているようだった。

「これで僕からの説明は終わりだよ。さあ、ご飯でも食べにいくか」

僕は皆に部屋から出るように促した。

『F a t e』の設定で説明したけど、大丈夫かな？僕は説明するのが苦手だからなあ。不審に思われないといいけど……。

漠然とした不安を抱えながら、食堂に行く。

アルビオンのこともあるし、前途多難だな。まあ、なんとかするか。歩きながら、そんなことを考えている、僕だった。

第十話

ルイズはベッドの上で、夢を見ていた。生まれ故郷のラ・ヴァリエールの実家の出来事。

夢の中の幼いルイズは屋敷の中庭を逃げ回っていた。

「ルイズ、ルイズ、どこに行ったの？ルイズ！まだお説教は終わっていませんよ！」

ルイズの母が叫んでいる。昔から、デキのいい姉たちと魔法の成績を比べられ、叱られていた。

「ルイズお嬢様は難儀だねえ」

「まったく。上の二人のお嬢様はあんなに魔法がおできになるっていうのに……」

召使たちに同情されるのも屈辱だった。

ルイズは、『秘密の場所』と呼んでいる、中庭の池に向かう。

そこは、ルイズが唯一安心できる場所だった。あまり人の寄り付かない、うらぶれた中庭。池の真ん中には小さな島があった。

島のほとりに小船が一艘浮いている。だが、ここには誰も来ない。

姉たちは魔法の勉強で忙しかったし、父は船遊びなんぞに興味はなく、母は娘たちの教育と、その嫁ぎ先以外、眼中になかった。

だから、忘れ去られた中庭の池と、そこに浮かぶ小船を気にする者はいない。ルイズは叱られると、決まってこの小船の中に逃げ込んでいた。

そこで、じつと、隠れていると、一人の貴族が現われた。

「泣いているのかい？ルイズ」

つばの広い、羽根つきの帽子に隠れて、顔が見えない。年のころは十六歳ぐらいの少年。

ルイズは彼が誰だかすぐに分かった。最近、近所の領地を相続した、年上の貴族。

ルイズの憧れの子爵。晩餐会をよく共にした。そして、父と彼との間で交わされた約束……。

「子爵さま、いらしてたの？」

ルイズは慌てて顔を隠した。泣いているところを憧れの人に見られて、恥ずかしかった。

「今日はきみのお父上に呼ばれたのさ。あのお話のことだね」

「まあ！いけない人ですわ。子爵さまは……」

「ルイズ。僕の小さなルイズ。きみは僕のことを嫌いかい？」

「いえ、そんなことはありませんわ。でも……。わたし、まだ小さいし、よくわかりませんわ」

ルイズははにかんで言った。子爵はにっこりと笑った。そして、手をそつと差し伸べてくる。

「子爵さま……」

「ミ・レイディ。手を貸してあげよう。ほら、つかまって。もうじき晩餐会が始まるよ」

「でも……」

「また怒られたんだね？ 安心しなさい。僕からお父上にとりなしてあげよう」

島の岸边から小船に向かって手が差し伸べられる。大きな手。憧れの手……。

ルイズは頷いて、立ち上がり、その手を握ろうとした。そのとき、風が吹いて貴族の帽子が飛んだ。

「あ」

現われた顔を見て、ルイズは当惑の声をあげた。ルイズはいつの間にか、六歳から十六歳の今の姿になっていた。

「な、なによあんた」

そこにいたのは、憧れの子爵などではなく、使い魔の健年だった。

「プツ。くくく。『いけない人ですわ。子爵さまは……』だって。クツクツクツ。そんなキャラじゃないだろうに」

「な、なんであんたがここにいるのよ」

「あは、アハハハハ……」

ついに、堪えきれなくなったのか、健年は大声で笑う。

「わ、笑うな！」

ルイズはぼかぼかと健年を殴りつけたが、健年は気にせずには笑う。そんな健年を見て、ルイズは妙な安心感を覚えた。それがさらに夢の中のルイズを苛立たせるのであった。

朝、いつもどおりにルイズを起こした。だが、何故かルイズの様子がおかしい。

「ルイズ。なんか様子がおかしいよ？熱でもあるの？」

「な、なななんでもないわよ！」

怒鳴られた。なんで？まあ、どうでもいいけど。普段通り、教室に向かう。椅子に座り、僕は眠りの体勢に入った。もつとも、周りからは普通に座っているようにしか見えないが……。

なんか熱い。

そう思い、まだ眠っている頭を覚醒させると、キュルケが炎の玉をギトーに放っているところだった。

ギトーは杖を剣を振るようにして薙払う。風が炎の玉を掻き消し、キュルケを吹き飛ばす。

そのままギトーは風の系統について話し始めたので、僕は寝直すことにした。

むむ、今度はなにやら騒がしい。

どうやら、コルベールのカツラが取れたシーンのようだ。

爆笑している生徒たちに怒鳴っている。

ちなみに、『爆笑』は大勢の人間が笑っていることを指す言葉らしい。

そんなことを考えていると、どんどん話が進んでいき、正装をして門に整列することになった。

魔法学院の正門をくぐって、王女の一行が現われると、整列した生徒たちは一斉に杖を掲げた。しゃん！と小気味よく杖の音が重なった。

オスマンが本塔の玄関で王女の一行を待っていた。

馬車が止まると、召使たちが駆け寄り、馬車の扉まで赤いじゅうたんを敷き詰めた。

呼び出しの騎士が、緊張した声で、王女の登場を告げる。

「トリスティン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーーーーーり
ーーーーッ！」

しかし、扉を開いて出て来たのは枢機卿のマザリーニだった。

生徒たちは一斉に鼻を鳴らした。まったく、わかりやすい反応である。しかし、マザリーニは意にも介さず、馬車の横に立つと、続いて降りてくる王女の手を取った。生徒の間から歓声があがる。

王女はにっこりと薔薇のような微笑を浮かべると、優雅に手を振った。

「あれがトリスティンの王女？ふん、あたしの方が美人じゃないの」
キュルケはつまらなそうに呟く。

「ねえ、ダーリンはどっちが綺麗だと思う？」

「さあ？どつちだろうねえ？」

「ちゃんと答えてよ。ねえ、どつち？」

僕はしつこく聞いてくるキュルケを無視して、グリフォンに跨った、貴族を見る。

あいつがワルドか。あいつは空気が違う。ガンダールヴの力だけだと苦戦しそうだ。まあ、負けないけど。

僕はワルドから視線を外し、ルイズと静かになったキュルケを見る。ルイズもキュルケも、顔を赤らめて、ワルドを見つめている。

タバサは、普段通り、座って本を読んでいる。

……暇だ。暇が売れたら大儲けできるくらい暇だ。………寝よ。

結論をだした僕は、地面に寝転がった。

その日の夜……。

僕は、投影した布団の上で、ルイズを見ていた。投影魔術がルイズたちに知られてしまったので、堂々と投影しているのだ。

ルイズは立ち上がったたり、再びベッドに腰掛け、枕を抱いてぼんやりしたり、なかなか面白い動きをしている。

確か、もうすぐアンリエッタがここに来るんだっけ。話を聞くのも面倒だし、屋上にでも行くか。

そう思った僕は部屋を出て、屋上に向かった。

屋上に着いた僕は、青白く輝く二つの月を見ながら、考え事をして

いた。

僕の能力は“別の作品の魔法が使える”ことだ。今、僕が使える魔法は、この世界の魔法と“Fate”の魔術だ。残り一つの空きをどの作品にするかが問題だな。

趣味に走るか、強力な魔法にするか……、悩むなあ。あの作品を僕以外に知ってる人、一人しかいなかったから、知名度低そうだし。かといって、誰もが知ってる作品にするのも面白みに欠けるし、どうしようかなあ。

そうやって、十分程悩んでいたが、そろそろアンリエッタの話が終わる頃なので、ルイズの部屋に戻ることにした。

アレはいつたい何がしたいんだろう？

僕の目の前には、ルイズの部屋のドアに張り付くバカー一人。ハルケニギアにもゴキブリっているんだね。このゴキブリは金色だけど。害虫駆除はきっちりしないとね。

僕は部屋のドアに張り付いている害虫に向かって走り出し、

「蹴り、穿つッー!!」

言葉とともに、強力な蹴りをお見舞いした。

「あがぁッー!!」

という奇声を放ったゴキブリと共にルイズの部屋に飛び込んだ。

「な、なにやつー!？」

と奇妙な科白を発したのはルイズ。

「な、なにごとですか!？」

とルイズよりは冷静なアンリエッタ。

「あ、どうも初めまして。僕はルイズの使い魔の健年です。姫様。お騒がせしてすいません。扉に害虫が張り付いていたので、つい飛び蹴りをお見舞いしてしまいました」

二人のリアクションは完全に無視して、自己紹介と事情の説明を行う僕。視界の端に、ピクピクと痙攣しているモノがあるけど、気にしない気にしない。

「が、害虫つて、それギーシュでしょ？な、なんか、危険な状態に見えるんだけど……」

「気のせいだよ」

良い笑顔でそう言つと、

「そ、そう……」と若干ヒキ気味に応えるルイズ。僕、なにか変なこと言つたかな？

「しかし、今の話を聞かれたのは、まずいわね……」

いつの間にか、復活したギーシュが立ち上がった。

「姫殿下！その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけますよう」

ギーシュとアンリエッタがなにか話をしているが、それを無視して

ルイズに話し掛ける。

「ギーシュが『困難な任務』って言ってたけど、いったい何処に、何しに行くんだ？」

「明日の朝、アルビオンに行くのよ。それで、ウェールズ皇太子にこの密書を届けて、姫さまが以前したためた手紙を返してもらおうよ」

アルビオンか……。まあ、分かってたけど。けど……。いくの面倒だなあ。

「頼もしい使い魔さん」

ギーシュとの話が終わったようだ。

「はい。なんですか？」

「わたくしの大事なお友だちを、これからよろしくお願いしますね」

アンリエッタは、ずっと左手を差し出した。

「いけません！姫さま！そんな、使い魔にお手を許すなんて！」

「いいですよ。この方はわたくしのために働いてくださるのです。忠誠には、報いるところがなければなりません」

「はあ……」

これが騎士が王女とかにするアレか……。なんか緊張するな。

僕はアンリエッタの手を取り、片膝を着き、手にキスをした。その際、手袋ごしではなく、むき出しになっていた中指に唇が当たったが、気にしたら負けだ。

僕は立ち上がり、アンリエッタを見ると、さすがに恥ずかしいのか、顔を赤らめていた。

ルイズはこちらを半眼で睨んでいるし、さっきから存在を忘れられているギーシュは未だにトリップの真っ最中。

こんなん、明日から大丈夫かな？ なんだか心配になってきた。

一抹の不安を覚える僕だった。

第十一話

朝もやの中、僕とルイズとギーシュは、馬に鞍をつけていた。アルビオンに行くの面倒だな。ラ・ロシエールは確か馬で何日かかかったはずだし、はぁ……、面倒臭いなあ。そんなことを考えていると、ギーシュが困ったように言った。

「お願いがあるんだが……」

「なに？」

「ぼくの使い魔を連れていきたいんだ」

「別にいいけど……。その使い魔はどこにいるんだ？」

「ここ」

ギーシュが地面を指差す。

「いないじゃないの」

ルイズが乗馬鞭を片手に持ったまま、そう言った。どうでもいいけど、鞭を持つてる姿は妙に似合っている。

ギーシュはにやっと笑うと、足で地面を叩いた。すると、地面がモコモコと盛り上がり、巨大なモグラが顔を出した。

「ヴェルダンデ！ ああ！ ぼくの可愛いヴェルダンデ！」

ギーシュが巨大モグラを抱き締める。

はあ……。勝手にやってる。

ギーシュとヴェルダンデに興味を失った僕は、馬の準備を進める。馬で行くので、荷物は軽い方がいいかな。と思って、武器はデルフリンガーしか持ってきてない。

ルイズたちの方を見ると、ルイズがヴェルダンデに押し倒されている。

まだやってたのか。まったく、面倒な奴等だ。

若干、呆れた目で見てみると、突然、ルイズに抱き付いていたヴェルダンデが吹き飛んだ。

「誰だッ！」

ギーシュが激昂して、周囲を見渡した。

朝もやの中から、一人の貴族が現われた。羽帽子をかぶっている。

やっと来たか。ワルド。来るならもっと早く来いよ。

ワルドはルイズを抱きかかえている。

もし、僕がこの世界のことを知らなかったら、ワルドのことを口をつく人だと思っていたかもしれない光景だな。

「……お恥ずかしいですわ」

「彼らを、紹介してくれたまえ」

「あ、あの……。ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のケントです」

ルイズが交互に指を指してくる。ギーシュは深々と頭を下げ、僕は軽く礼をしておいた。

「きみがルイズの使い魔かい？人とは思わなかったな」

ワルドがこっちに近付いてきた。

「ぼくの婚約者がお世話になっているよ」

「はぁ……。そうですか……」

「どうした？もしかして、アルビオンに行くのが怖いのかい？なかに！何も怖いことなんかあるもんか。君はあの『土くれ』のフーケのゴーレムを倒したんだろう？その勇気があれば、なんだってできるさ！」

いや、あつはつは、じゃないから、ただ単に面倒臭いだけだから。そう思ったが、わざわざ言うようなことではないので、黙っておい

た。ワルドは、ルイズを抱きかかえて、グリフォンに跨った。

「では諸君！出撃だ！」

グリフォンが駆け出す。その後を、ギーシュが感動した面持ちでついて行く。

これからラ・ロシエールまで、ワルドは休憩なしで、走ってたっけ。憂鬱な気分でギーシュの後に続いた。

アンリエッタは出発する一行を学院長室の窓から見つめていた。目を閉じて、手を組んで祈る。

「彼女たちに、加護をお与えください。始祖ブリミルよ……」

オスマンが、隣りで鼻毛を抜いている。

「見送らないのですか？オールド・オスマン」

「ほほ、姫、見てのとおり、この老いぼれは鼻毛を抜いておりますのでな。あいだっ！」

そんなオスマンを、アンリエッタは呆れ顔で見つけた。

「トリステインの未来がかかっているのですよ。なぜ、そのような余裕の態度を……」

「既に杖は振られたのですぞ。我々にできることは、待つことだけ違いますかな？」

「そうですが……」

「なあに、彼ならば、道中どんな困難があろうとも、やってくれますでな」

「彼とは？あのギーシュが？それとも、ワルド子爵が？」

オスマンは首を横に振った。

「ならば、あのルイズの使い魔の少年が？まさか！彼はただの平民ではありませんか！」

「姫は始祖ブリミルの伝説をご存知かな？」

「通り一遍のことなら知っていますが……」

オスマンがにっこりと笑う。

「では『ガンダールヴ』のくだりはご存知か？」

「始祖ブリミルが用いた、最強の使い魔のこと？まさか彼が？」

しまった。喋りすぎたかの？姫さまのことを信用していないわけはないんじゃないか……。まだ王室の人間に知られるのはまずいかの。

「えーおほん、とにかく彼は『ガンダールヴ』並みに使えるところ、そういうことですな。ただ、彼は異世界から来た少年なのです」

このぐらいなら話しても構わんじやろ、とオスマンは考えた。

「異世界？」

「そうですね。ハルケギニアではない、何処か。『此処』ではない、何処か。そこからやってきた彼ならばやってくれと、この老いぼれは信じておりますでな。余裕の態度もその所為なのですじゃ」

「そのような世界があるのですか……」

アンリエッタは、遠くを見るような目になった。自分の手を見る。あの少年の唇の感触が、まだ残っている。アンリエッタは、左手を指でなぞり、目をつむると微笑んだ。

「ならば祈りましょう。異世界から吹く風に」

はあ……。すごい疲れるし、とてつもなく暇だ。

ワルドは魔法学院を出発して以来、一度も休まずにグリフォンを走らせている。僕たちは途中の駅で二回、馬を交換している。だが、グリフォンは疲れた様子を見せずに走り続けている。やっぱりグリフォンっていいなあ。

「もう半日以上、走りっぱなしだ。どうなってるんだ。魔法衛士隊の連中は化け物か」

隣りを走るギーシュが、馬の首にぐったりと上半身を預けている。

「そうだね」

僕は適当に相槌をつく。

どうやったら疲れずにすむんだろう？自分の身体に強化でもかけてみるか？でも、長時間強化を掛け続けたことはないし。どうしよう？そんなことを考えていると、ギーシュがニヤニヤと笑いながら話しかけてきた。

「ぷ、ぷぷ。もしかして、きみ……。やきもち焼いてるのかい？」

「なにが？」

「あれ、当たった？もしかして図星？」

「だからなにが？」

「なんだ。違うのかい？ぼくはてつきり、きみがルイズに恋心を抱いているんじゃないかと思っていただけ……」

「ああ。そういうことか……」

僕はようやく、ギーシュの言っていることが理解できた。

「僕はルイズのことは好きだけど、それは異性としてではないよ。一人の人間として好きなんだ」

「ルイズのことは好きだけど、恋ではない、ってことかい？」

「そういうこと」

ギーシュと話している間に、ワルドとの距離が離されていることに気付いた。

「ほら、早くしないと置いていかれるぞ」

僕は馬の速度を上げる。ギーシュも慌てて、速度を上げた。

馬を何度も替え、飛ばしてきたので、僕たちは夜中にラ・ロシエールの入り口についた。

ギーシュは、体力の限界が近いようで、かなりぐったりしている。僕は途中で強化魔術を使ったので、身体の疲労感は少ない。まあ、その代わりに魔力が割と減っている。そこはまあ、腰が痛まなかっただけ、マシだと思いたい。

そんなことを考えていたときだ。

不意に、僕たちの跨った馬めがけて、崖の上から松明が何本も投げ込まれた。

傭兵たちのご登場か。

僕は馬から飛び降りた。隣りではギーシュが馬から放り出されている。

既にデルフを抜いているので、飛んでくる矢に関しては問題ない。けど、ギーシュがピンチだ。

無数の矢が、僕たちに向かって放たれた。

だが、矢は僕たちの前に現われた小型の竜巻に弾き飛ばされた。

「大丈夫か！」

「大丈夫です」

ワルドの奴、自分が雇った傭兵だろうに。白々しいヤツ。

「相棒、寂しかったぜ……。鞘に入れっぱなしはひでえや」

「あ、ごめん。忘れてた」

「ひ、ひでえ……」

デルフが落ち込む。

今度からは、もう少し構ってあげようかな？

そんなことを考えていると、上のほうから、ぱっさぱっさと、羽音が聞こえた。

シルフィードか。これで、終わりだな。

小型の竜巻が舞い起こり、崖の上の男たちを吹き飛ばす。

「おや、『風』の呪文じゃないか」ワルドが呟いた。

月明りがシルフィードの姿を照らす。

「シルフィード！」

ルイズが驚きの声をあげた。

シルフィードが地面に降りると、キュルケがシルフィードから飛び降りた。

「お待たせ」

ルイズがグリフォンから飛び降りて、キュルケに怒鳴っている。

また始まった。いい加減、飽きないのかな？

僕は二人を無視して、パジャマ姿で本を読んでいるタバサに声をかける。

「有り難う。助かったよ」

「気にしないでいい」

相変わらずの無表情だな。なんとかして無表情以外の顔を見たいな。

「ご褒美に頭を撫でてあげよう」

なでなで。

むむ、以外と撫で心地がいいな。髪も柔らかいし。

タバサがこちらを見上げてくる。なにか言いたげな感じだ。

僕はそれをあえて無視して、タバサの頭を撫で続ける。

なでなで。

タバサの表情が微妙に変わった。心なしか、気持ち良さげに見える。ワルドに言い寄っていたキュルケがこっちに声をかけてきた。

「ほんとだね。ダーリンが心配だった……から……よ?」

なんだかキュルケの様子がおかしい。

「どうしたの?キュルケ」

「ダ、ダーリン……。いつの間にタバサと仲良くなったの?」

「僕は皆と仲が良いつもりだけど?」

「そ、そうじゃなくて……、どうしてタバサの頭を撫でてるの?」

「?それがどうかしたの?これくらい普通じゃない?」

いったい、どこがおかしいというんだろうか。不思議だ。

僕が首を傾げていると、傭兵を尋問していたギーシュが戻ってきた。

「子爵、あいつらはただの物取りだ、と言っています」

「おいギーシュ。やり方が生温いんじゃないか?ただの物取りなわけないだろ」

タバサの頭を解放した僕は、ギーシュにそう言つと、

「じゃあ、きみがやってみろよ」

と言ってきたので、

「分かった」

と答えて、男たちの方に向かう。

「それじゃ、これからきみたちに拷問……、じゃなかった、尋問を始めるから、正直に答えてね」

ボキッ！！メキメキ！バキッ！！グチャグチャ！メキヤッ！！

とても尋問をしているとは思えない音が鳴り響き、突然、静かになった。

「ギーシュ。あいつら、白い仮面の男に雇われたんだってさ」

僕が傭兵たちの尋問から戻ると、皆、何故か僕を怯えた目で見てくる。

「き、きみ……。あの男たちにいったい何をしたんだね」

ギーシュが恐る恐る聞いてきた。

「普通に尋問しただけだけど？」

「い、いや、とても尋問しているような音ではなかったんだが……」

ワルドまで、青ざめた表情でこちらを見てくる。

「まあ、いいじゃないですか。そんなこと気にせず、さっさと宿にでも行きましょうよ」

僕は馬に乗って、歩き出す。

皆もしばし、呆然としていたが、僕の後を追ってくる。

皆、僕から距離をとっている。

何故だろう？

僕は、そんな皆の反応を不思議に思っていた。

第十二話

ラ・ロシエールで一番上等な宿、『女神の杵』亭に泊まることになった僕たちは、一階の酒場でくつろいでいた。ギーシュだけはテールブルに突っ伏している。

そこに、ワルドとルイズが、棧橋に乗船の交渉から帰ってきた。

「アルビオンに渡る船は明後日にならないと、出ないそうだ」

「急ぎの任務なのに……」

原作通り、船は出ないのか。ということは、明日の朝、ワルドと決闘することになるな。

僕が考え事をしている間に、部屋分けの話は終わったようだ。

「大事な話があるんだ。二人きりで話したい」

……原作さえ知らなければ、『ロリコン子爵』と呼んでやるのに。

「なあ、相棒、気にならないのか？」

「なにが？」

今、僕とギーシュは割り振られた部屋にいる。

「だからよお。貴族の娘っ子とあの貴族の話、気にならねえのかよ

お
」

「特に興味ないかな？」

今ごろ、ワルドはルイズに『きみの使い魔はガンダールヴだ』とか、『きみはそれだけの力を持ったメイジなんだよ』とか言ってるんだろう。既に知っている話に興味などあるはずがない。

「本当は気が気でないんじゃないのかい？」

ギーシュまで何を言ってるんだろう？

「ワルドとルイズが何を話していようが、僕には関係ないよ」

僕がそう言つと、ギーシュとデルフは

「からかい甲斐がない」と声を合わせて言った。

「はあ……。バカなこと言ってるんで、さっさと寝るぞ」

僕は、眠りについた。

翌朝、僕が目を覚ますと、扉がノックされた。

ワルドがきたのか。面倒臭いなあ、と思いながらドアを開ける。

「おはよう。使い魔くん」

「おはようございます。それで、こんな朝早くからどうしたんです

か？」

「きみは伝説の使い魔『ガンダールヴ』なんだろう？」

「そうらしいですね」

「それでだね。あの『土くれ』のゴーレムを倒した腕がどのぐらいのものだか、知りたいんだ。ちょっと手合わせ願いたい」

「手合わせって、決闘ですか？」

「どうしよう？ワルドと戦うの面倒だな。」

「そのとおり」

ワルドがにやつと笑う。

……しょうがないな。わざと負けるとしよう。下手に勝つと、警戒されるだろうし。」

「何処でやるんですか？」

「この宿は昔、アルビオンからの侵攻に備えるための砦だったんだよ。中庭に練兵場があるんだ」

僕たちは、ワルドの話していた練兵場に、二十歩ほど離れて向かい合っていた。

「昔……、といつてもきみには分からんだろうが、かのフィリップ三世の治下には、此処でよく貴族が決闘したものさ」

「そうなんですか」

僕は、背負ったデルフの柄を掴んだ。

「古き良き時代、王がまだ力を持ち、貴族たちがそれに従った時代……、貴族が貴族らしかった時代……、名誉と、誇りをかけて僕たち貴族は魔法を唱えあつた。でも、実際はくだらないことで杖を抜きあつたものさ。そう、例えば女を取り合ったりね」

何言つてんだか。

若干、呆れながら、剣を引き抜いた。すると、ワルドが左手で制した。

「どうしたんですか？」

「立ち会いには、それなりの作法というものがある。介添え人がいなくてはね」

「何処にいるんですか？」

「安心したまえ。もう、呼んである」

ルイズが物陰から現われた。ルイズは僕たちを見ると、なにやら驚いた顔をしている。ルイズがワルドに『バカなことはやめて』と言っているが、とりあえず無視することにした。

「では、介添え人も来たことだし、始めるか」

ワルドは、剣のような杖を腰から引き抜いた。
フェンシングのような構えをしている。

「それじゃ、いきますよ?」

「ああ、全力で来い」

僕は、原作の才人のように、一足飛びに飛んで、切りかかった。
しかし、僕の剣はワルドの杖に受け止められた。僕は一旦後ろに下がり、様子を見る。

今度はワルドが近付いて来た。凄まじい速さで突きを放ってくる。
僕はそれを、デルフで薙払う。ワルドは杖を弾かれた瞬間に、後ろに飛ぶようにして下がった。

「なんでえ、あいつ、魔法を使わないのか?」

「手加減、してるんじゃない?」

「魔法衛士隊のメイジは、ただ魔法を唱えるわけじゃないんだ。詠唱さえ、戦いに特化されている。杖を構える仕草、突き出す動作……、杖を剣のように扱いつつ詠唱を完成させる。軍人の基本さ」

口上が長い。言いたいことがあるなら、さっさと言え方がいいのに。

「きみは確かに素早い。ただの平民とは思えない。流石は伝説の使い魔だ。しかし、隙だらけだ。速いだけで、動きは素人だ。それでは本物のメイジには勝てない」

まだ喋るつもりなのか……。大人しく聞いてやってるんだから、早

く話し終えろよ。

「つまり、きみではルイズを守れない」

ワルドは、先程の突きとは比べ物にならないぐらいのスピードで、突きを繰り出してきた。

僕はその突きを、なんとか防いでいるように見せた。

「デル・イル・ソル・ラ・ウィンデ……」

閃光のような突きを繰り出しながら、ワルドは呪文を唱えている。

「相棒！ いけねえ！ 魔法がくるぜ！」

そろそろだな。

そう思ったとき、見えない巨大な空気の塊が、僕を吹き飛ばした。

僕は積み上げられていた、樽に激突した。

イツつゝゝゝ！？あ、頭打った！？チヨゝ痛えゝゝ。ん？なんだか言葉遣いがおかしくなってる気がする。

と見事に混乱している僕にワルドが近付いてきた。デルフを踏み付け、僕に杖を突き付ける。

デルフがなにやら喚いていたが、ワルドは気にした風もなく、口を開いた。

「勝負あり、だ」

あ、頭から血が出てる。手当ての仕方なんて分かんないのに……。どうしよう……。

ワルドがルイズに『彼ではきみを守れない』とか言ってるけど、そんなこと気にしちゃいけない。今の僕は、応急手当ての仕方と思

い出すのに忙しいのだ。

何時の間にか、ワルドとルイズは立ち去っていたようだ。

「いやあ、負けちまったな」

デルフが呟いた。

「しかし、あの貴族は強いな。気にすんな相棒。あいつは相当の使い手だよ。スクウェアクラスかもしれないね。負けても恥じゃねえ」

「別に、負けたのが悔しいわけじゃないよ」

「そうなのか？」

「どちらかというと……、頭の傷をどうするかの方が、今の僕には重要なんだ」

デルフは呆れたように、溜め息を吐いた。

僕は、デルフが口を開く前に鞆におさめた。その際、デルフが何か呟いた気がしたが、気にしないことにした。

さっさと宿に戻ろう。

そう思った僕は、服についた埃を払い、その場を後にした。

自分の部屋に戻ると、疲れがドツと押し寄せてきた。

ね、眠い。こんなに眠いのは、随分と久し振りだ。

ぼんやりとした頭で、そんなことを考えていたが、どうやら限界が近いようなので、デルフを壁に立て掛け、ベッドに横になると、深い眠りについてしまった。

「お、おい相棒。寝る前に傷の手当てした方がいいんじゃないか？
……ってもう寝てるのかよ……」

デルフは、はあ、とどこか諦めた様な溜め息を吐いた。

僕は、夢を見ていた。

あの世界での、まだ幸せだった頃の夢……。

「健年！何時まで待たせるの！早く支度をしなさい！！」

母さんが怒鳴る。僕は、はいはい、と生返事をしながら旅行鞆を手に、玄関に行く。

そこには母さんの他に、父さんと二つ下の妹がいた。皆、余所行き
の格好をしている。

これは三年前の夏休みに家族旅行でグアムに行くはずだった、あの
日の話だ。

「由衣。荷物多すぎじゃない？」

僕の妹、由衣は可愛らしく首を傾げて、こう言った。

「そんなことないと思うよ？というか、お兄ちゃんが少なすぎなん
だと思う」

「なに言ってるんだ。僕は人が一人まるまる入りそうな鞆一つ持っ
てるんだぞ？これで少ないはずがないだろ？」

「うーん……。そうかなあ……」

「それに、由衣は僕の三倍の荷物じゃないか。それに宅配便で親戚の家に荷物送って貰ったんだろ？それで多くないっていうのはおかしいと思うぞ？」

僕がそう言つと、由衣は不満そうに口を尖らせた。

「なにやってるんだ。二人とも。早く乗りなさい」

父さんがワゴン車の助手席に座り、僕たちを急かす。

「今行くよ。……由衣、荷物持つてあげる」

由衣の荷物を半分持ち、車に詰め込む。そして由衣と一緒に後ろの座席に座る。運転席には親戚の叔父さんが座っている。挨拶もそこそこに、車は空港に向けて、動き出した。

そこまでは……、本当にそこまでは、幸せだった……。

目の前から、大型トラックが突っ込んで来る。

叔父さんは叫び声をあげながら、ブレーキを踏み、父さんは母さんを庇おうとしていた。僕はそんな様子をぼんやりと見つめて、ああ、死ぬんだな、漠然とそう思った。

僕は怯える由衣の頭を撫で、襲つて来た衝撃に意識を失った。

僕が次に目覚めたのは、病院のベッドの上だった。

そこで医者から聞かされたのは、叔父と両親、そして……、妹の由衣の死だった。

僕だけは、軽傷で済んだらしい。その理由も医者が教えてくれた。

由衣が僕に覆い被さるように抱き付いていたらしい、由衣が僕の身代わりに死んだと思うには、充分だった。後悔した。こんな事になるんなら、僕が由衣を庇ってやれば良かったと……。

けれど、家族を失った悲しみは、病院を退院するのと同時に消えていた。何時までも悲しんでなんかいられない、由衣も僕が悲しむことを望んでないと思ったからだ。

だから僕は生きた。由衣の分も幸せになる為に……。

う、うゝん……。

昔の夢を見るなんて、随分と久し振りだな。一年振りかな？
身体を起こす。辺りを見渡すと、部屋は薄暗い。どうやら夜になっているようだ。

それはいいんだが……、何故に此処にいるんだろう、この人は。

「なんで此処に居るの？タバサ」

横で僕の顔を覗き込んでいる、青い髪をした小柄な女の子に問い掛ける。すると、タバサは腕を上げ、デルフを指差した。

「デルフ。どういうこと？」

「相棒が傷の手当てもせず寝ちまったから、オレが人を呼んだんだよ。そしたら、この貴族の娘っ子が来て相棒の傷を治してくれたってわけだよ。相棒」

確かに、頭の傷はふさがっているようだ。痛みもない。

「ありがとう。タバサ」

僕が礼を言つと、タバサは首を振った。
気にするな、という意味なんだろうな。

「大丈夫？」

「うん。タバサのおかげで痛みもないし、たっぷり寝たから疲れもとれたよ」

「違う」

タバサは首を横に振る。

「うなされてた」

ああ、そういうことか……。

「昔の夢を見たんだ……。家族が死んだ日を……。ね……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

む、無言だ！？マ、マズイ……。く、空気が重い。こんな事になるんなら、カツコつけて『家族が死んだ日を……。ね……。』なんて言うんじゃないかった。だ、誰か……。この空気を変えてくれ……

！！！

「ごめん……なさい」

「ふえ？」

あ、今変な声出しちゃった。

「聞いては……、いけないことだと思ったから……」

「いや、別にそんなことはないから、タバサが気にすることじゃない」

「でも……」

「だからタバサが気にすることじゃないよ。僕が勝手に言っただけなんだから。なんなら、あの日のことを今ここで赤裸々に語ってあげてもいいよ？」

「分かった」

タバサは首を縦に振った。

ようやく分かってくれたか。

僕が安堵していると、

「一個借り」

と言った。

ていうか、全然分かってないよねそれ。

「だから気にしないでいいんだって」

「一個借り」

断固として譲るつもりはないらしい。
どうしたもんなかな？

「タバサは僕に怪我の治療をしてくれたんだから、それで貸し借り
なしってことにしよう」

「ダメ」

バツサリですか……。参ったな。どうすれば、納得してくれるんだ
ろう？

「まあ、その借りはいずれ返してもらおうということで、勘弁してく
れないかな？」

「……分かった」

しばらく考えてから首を縦に振った。

「それじゃあ、下に降りよう。喉かわいちゃった」

タバサが頷いたのを確認し、デルフを持って部屋を出る。

そろそろ傭兵たちが襲ってくる頃か……。或いは、既に襲われてい
る最中なのかもしれない。面倒臭いけど、頑張りますか！

僕は、そう考えながら下に降りるのだった。

第十三話

宿の一階では、既に戦闘が始まっていた。

僕とタバサ以外の皆はテーブルの足を折り、盾にしているようだ。

傭兵たちは魔法の射程外から矢を射っている。

僕はデルフで、タバサは風の障壁で矢を弾きながら、キュルケたちの下に駆け寄った。

「やあ、皆大変そうだね」

「あんた！ いったい何してたのよ」

さっそくルイズに怒鳴られた。

「寝てた」

短く、簡潔に答える。

「あら、ダーリンったら、タバサと一緒に寝てたの？」

「そんなわけないだろ。僕一人で寝てたんだ。タバサはワルドさんと決闘した時についた傷を治療してくれただけだよ」

「ふうん……。そうなんだあ」

キュルケがニヤニヤとした笑みを浮かべながら、僕とタバサを見てくる。

からかう気満々だな。やましい事は何もしてないから、痛くも痒くもないけど。

「で、これからどうする？あいつら、この前の連中でしょ？僕が相手しましょうか。ストレス発散に使えるし……」

「うつ……」

何故か皆、顔を青くしている。

「い、いや、やめておいた方がいい。見ろ、あの後ろに立っている男……、恐らく腕の立つメイジだろう。傭兵たちの矢が尽きたら、我々に魔法を唱えるつもりなんだ」

ワルドの言う通り、傭兵たちの後ろで、こちらに杖を向けている。オリキャラ登場か……。面倒だな。

「まあ、大丈夫でしょ。あいつら、僕のこと覚えてるみたいだし」

「わかるの？」

タバサが尋ねた。

「うん。だってあいつら、僕の顔を見た瞬間、矢の攻撃が緩んだんだ。間違なく覚えてるね」

「間違なく覚えてるでしょうね」

ルイズの言葉に皆が、うんうんと頷く。

「いや、なんで皆頷いてるんだよ。いやいや、なんで皆、『わからいでかつ！』て顔してるんだよ。おかしいだろ」

僕の抗議は無視されてしまった。

「えーっと……、気を取り直して、僕がああ、の傭兵たちを黙らせるから、皆は此処で待っててくれ」

言うと同時に僕は飛び出した。後ろから『あ、こら』とか、『ちょっと待ちなさい』とかいう声が聞こえてきたが、聞こえなかったことにしよう。

「おいッ！お前たち！」

僕がそう叫ぶと、傭兵たちは身体を強張らせて、僕の顔を見た。

「ひッ、ヒッ……！」

「お、お前は……、あの時の」

「アンタらも懲りないなあ。もっとキツイオシオキが必要かな？」

「あ、あの、その……、えーと……」

「お前たちに一つ聞きたいことがある」

「は、はいッ！ナンなりとッ……！」

うん。良い返事だ。

僕はにつこりと笑みを浮かべて、言った。

「お前たちは僕の味方か？それとも……、“獲物”か？」

周りの空気が、凍った。ビシッという効果音が聞こえた気がする。

「ハッ、ハイッ！！わたくしたちは、貴方様の味方で御座いますッ！！！」

傭兵たちが、最敬礼をしながら、声を合わせて言った。

「よろしい。一応忠告しておくが……、次に僕の目の前に敵として現われたら……、「潰す」よ？」

「ハッ、ハイッ！！肝に命じておきますッ！！！」

「じゃあ、あのメイジを倒せ。言うことを聞かなかったら……、分かってるだろ？」

「了解しましたッ！野郎共オ！！あのメイジを倒すぞオ！！！」

「ハッ！ハッ！！！」

傭兵たちはメイジに向かって攻撃を仕掛けた。突然寝返った傭兵たちには戸惑っているようだ。

まだ名前も言っていないのに、可哀相なオリキャラだな。

僕は踵を返し、宿に戻った。

皆は何故か、青ざめた表情で僕を見ている。

「どうかしたの？皆」

「な、なんでもない……」

？変なの。まあ、どうでもいいけど……。

「い、こここれから、どとどとどうするんだ？」

震えながらギーシュが尋ねた。

……居たのか、ギーシュ……。影が薄くて分らなかった。

「今のうちに、僕らは裏口から出て棧橋に向かうべきだ」

ワルドの言葉に皆は一斉に頷いた。

「では僕について来てくれ」

ワルドを先頭に、ルイズ、キュルケ、ギーシュ、タバサ、そして僕が続いた。

だが、僕の足は裏口を出てすぐのところで止まってしまった。
なんだ？このイヤな感じは。

後ろを振り向くと、何時の間に現われたのか、白い仮面の男がこちらに向けて、杖を振っていた。

僕は急いでデルフを引き抜いたが、奴に攻撃を仕掛ける時間がない。
ならば、今の僕の選択肢は三つ、

1．防ぐ

2．躲す

3．受け止める

消去法でいけば、1はワルドに手札を見せることになるから却下。

2は躲せば後ろにいるタバサに当たる可能性があるので却下。

なら、残った3を選ぶしかない。まあ、デルフで受けるんだから、死にはしないだろう。

僕がここまで考えた瞬間、稲妻がデルフに直撃した。

「ぐああああああアッ！！！！」

僕はその場に崩れ落ちた。

「ガッ、ア、ああ……」

ワルドが仮面ワルドにエア・ハンマーの呪文を唱えた。目に見えない空気の塊が、仮面ワルドを吹き飛ばす。仮面ワルドはこちら背を向け逃げ出した。

ルイズ、キュルケ、ギーシュがこつちに駆け寄って来た。

タバサは珍しく焦った表情で、僕に治癒魔法をかけている。

ルイズのヤツ……、泣きそうな顔してるな。

キュルケも珍しく慌ててるみたいだ。

ギーシュは……、別にどうでもいいか。

タバサ……、確かに無表情以外の顔が見たいとは思ってたけど……

……泣きそうな顔を見たいとは思ってないぞ。

自分の腕を見てみると、悲惨なことになっていた。

服は電撃により、炭化している。所々破れていて、隙間から見える

腕は火傷でヤバい感じになっていた。

意識が朦朧としてきた。気絶する一歩手前、と言ったところか。

そこまで考えたところで、僕の意識は途絶えた。

う、うゝん……。此处は何処だ？

僕はベッドに寝かされていた。両腕には包帯が巻かれている。

状況から察するに、ここはアルビオン行きの船の船室のようだ。

窓から入ってくる光が眩しい。

どうやら半日近く眠っていたらしい。

他の皆は何処にいるんだろう？

そう思い、辺りを見渡す。すると、床に毛布を敷いて寝ているギー

シュとキュルケの姿があった。ルイズとタバサは僕の寝ているベッドに頭を置いて寝ていた。

一晩中、看病してくれたみたいだ。

「よう、起きたのか？相棒」

壁に立て掛けられていたデルフが話しかけてきた。僕は震える手でデルフを掴み、手元に引き寄せた。

「デルフ。皆寝てるんだから、起こさないように小声で喋ってくれ」

「相変わらず、相棒はマイペースだねえ……」

デルフがしみじみと呟いた。

「そんなことはどうでもいいから、僕が気絶した後のことを話してくれる？」

デルフが昨日あったことを話してくれた。

僕が気絶した後、仮面の男は逃げたこと。

気絶した僕をタバサがシルフィードを呼んで運んでくれたこと。

そして、僕に治癒魔法を掛け続けてくれたこと。

ルイズも手当てをしてくれたこと。

キュルケがここまで運んでくれたこと。

全ての話を聞き終えた僕は、思った。

ギーシュ何もしないじゃん。まあ、いいか。ギーシュだし。

「皆には迷惑かけたな……」

「迷惑なんて、思っていないわよ」

いきなり声をかけられたので、少々驚いた。

「ルイズ、いきなり話しかけないでよ。びっくりするだろ？」

「ふん！わたしたちを心配させた罰よ！」

「ルイズ、皆寝てるんだから、あんまり大きな声だしたら駄目だろ？」

僕の言葉にルイズははあ、と溜め息を吐いた。

「あれだけのことがあったのに、アンタは相変わらずなのね……」

ルイズまでデルフと同じこと言ってる。なんだかよく分からないけど、失礼なことを言われてる気がする。

「まあいいわ……。それで、腕は大丈夫？」

「まだ張ってる感じがするけど、戦闘に支障はないよ。痛みもないしね」

「わたしが言いたかったのはそういうことじゃないんだけどね……」

……

「何か言った？」

「何でもないわよ！」

なんで怒ってるんだろう？変なの……。まあ、どうでもいいか……。

そんなことよりも、喉渴いたなあ…………。

「ねえルイズ……。水持つてきてくれないかな？喉渴いちゃった」

「アンタ、ご主人様を何だと思ってるのよ！……………まあいいわ。アンタ、一応怪我人だし……。持つてきてあげるわよ。感謝しなさいよね！」

そう言うと、ルイズは船室から出ていった。

流石はマイ・マスター。見事なツンデレっぷりだ。別にどうでもいいけどね。

「ふ……。あ、……………ふあ」

どうやらタバサが起きたようだ。僕の顔を見て、目をパチパチさせている。朝に弱いみたいだ。

「おはよう。タバサ」

そんな様子が微笑ましくてつい和んでしまう。

「……………おはよう」

こっちをぼーっと見ながら、挨拶を返すタバサ。ちょっと可愛いと思ってしまった。ついつい頭を撫でてしまう。

「ん……………ふ……………ん……………」

気持ち良さそうに目を細めるその姿は、まるで子猫の様に可愛らしい。

こ、この姿をひぐらしの鳴く村の、ある女の子に見せたら『おもちかえり〜〜！』とか言いそうだな。実際僕もぐらつときてるし……。

頭から手を話すと、

「あ……」という悲しそうな声が聞こえたが、気にしたら負けだ！
タバサは暫くの間、目をごしごしと手で拭っている。漸く頭が覚醒したらしく、僕を見て、

「大丈夫？」

と聞いてきた。

「怪我のことなら心配ないよ。違和感はあるけど自由に動くから。問題ない」

「そう……」

少し、ホッとしたようだ。ふうと安堵の息を漏らした。

「ありがとう。タバサ。治癒魔法をかけてくれて」

「貴方はわたしを庇って傷ついた……。傷の治療をするのは当然」

気付いてたのか……。流石だな。

「そんなことないさ。あの時、僕は最善の選択をしただけだ。タバサが気にすることじゃない」

「でも……」

「デモもストもない。僕は僕のやりたいことをしただけだ。それが結果的にタバサを助ける行動だった、たったそれだけのことなんだ。だから、タバサが気にする必要はまったくない。分かった？」

タバサはこくりと頷き、

「一個借り」

と呟いた。

「……………なんかこんなことが前にもあった気がする。これがデジヤヴというヤツなのかな？あははは……………」

「あータバサ？さっきも言ったように、あれは僕が勝手にやったことで、タバサが気にすることじゃないんだけど……………」

「それでも…………、貴方がわたしを助けたことに変わりはない」

だから

「一個借り」と呟いた。

タバサは妙なところで強情だからな。何を言っても無駄だろう…………。それこそ無限ループに陥ってしまう。

「はぁ…………。分かったよ。この借りはいつか返してもらおうとするよ」

僕の言葉に漸く納得したのか、タバサは首を縦に振った。

「ダーリンったら、やっぱりタバサと仲良いじゃない」

「ああ、とても羨ましいよ」

いつの間に起きていたのか、キュルケとギーシュがイヤな笑みを浮かべてこっちを見ている。

「おはよう。キュルケ、ギーシュ。二人共、何時から起きてたの？」

「ダーリンが、タバサの頭を撫でてた辺りから」

「随分楽しそうな声音だな。あと語尾に、つけるな。イラッときたぞ」

「ダーリンこわい」

「今更見苦しいぞ！大人しく認めたらどうなんだい？」

なにコイツ等、殴っていいかな？殴っていいよね？殴っていいんですよね？三段活用っ！！

そんなことを考えていると、ぼん！という大きな音が聞こえた。

「な、なにことだー！！」

ギーシュが叫ぶ。

こんなことでいちいち取り乱すなよ。五月蠅いヤツだな。まったくドアが勢いよくバタン！と開いて、ルイズが入ってきた。

「空賊よー！！」

「な、なななんだってー！！！！？」

「空賊ッ！？」

ギーシュ五月蠅い。キュルケもリアクションはしたが、言う程驚いているわけではないようだ。

「ルイズ。ワルドさんは？」

「甲板にいたけど、この船を浮かべるのに魔法を使ってたから……」

「魔法を使うだけの精神力が切れた、ってところ？」

「そうなるわね……」

今の戦力では、勝率は低いか……。まあ、相手はウェールズ皇太子の御一行だし、大人しく捕まっておいた方が無難だな。

「ルイズ。ここは大人しく捕まっておこう」

「どうしてよッ！！」

ルイズは僕の提案に納得できないようだ。

僕がルイズを説得する為に口を開こうとした次の瞬間、

「その坊主の言う通りにした方が、身の為だぜ」という声と共に如何にも自分は空賊の頭ですよ。といった風貌の男が入って来た。

「貴方が、空賊の頭ですか？」

「ああ、そうだ」

ふむ……。この人がウェールズ皇太子か。変装する為とはいえ、ここまでするとは……。侮れないな。アルビオンの王族というモノは……。

「それでは、船長室にでも案内してくれますか？」

「何故お前らを、船長室に連れて行かなきゃならんのだ？」

僕はウェールズの黒髪と髭を掴み、剥ぎ取った。

「あ……」

「いつ」

「うつ」

「え……？」

「お？」

時間が停まった。

皆、予想外の出来事に、脳の活動が停止したようだ。
ちよつと唐突だったかな？まあ、遅いか速いかの違いだ。特に問題はないだろう。多分……。

「さて……、詳しい話は船長室でお聞かせ下しますかな？空賊の頭さん？」

この気まずい空気の中、僕はにっこりと笑みを浮かべて、ウェールズに案内を頼むのだった。

第十四話

ウェールズは僕たちを自分の船の船長室に案内した。僕の記憶が確かなら、イーグル号という名前だったと思う。……別にどうでもいいけどね。

船長室にはガラの悪い空賊の格好をした兵士たちがいた。ウェールズに対し礼をしていたが、後から入って来た僕たちを見て、かなり驚いているようだ。目を見開き、口をぽかんと開いている。

「か、頭。そいつ等は一体……」

かなり動揺しているようだ。

ウェールズは船員たちを一瞥した後、こちらに向き直った。

「私たちのことを話す前に君達に聞きたいことがある。君達は何者なんだ？この時期にトリステインの貴族がアルビオンに来る理由はそう多くはないだろう？」

ウェールズの問い掛けに皆押し黙ってしまった。

「もしかして、君達はアルビオンの貴族派かい？」

ルイズはその言葉に反応した。

「誰が薄汚いアルビオンの反乱軍なものですか。バカ言っちゃいけないわ。わたしたちは王党派への使いよ！」

そう言っつて、ルイズはウェールズを睨みつけた。それを見ていたキユルケはハアと溜め息を吐いた。タバサは相変わらずの無表情で、

ギーシュは顔が青ざめている。

ウェールズとその部下たちも、少々呆気に取られているようだ。

「ルイズ。正直なのは君の美德だけど、時と場合を考えた方が良いでしょう」

「うるさいわね！あんたは大人しくわたしの言うことに従ってればいいのよ！..」

「ルイズに従ってたら、命が幾つあっても足りないよ。.....まあ、今回ばかりはそれであってるんだけどね」

「それ、どうゆう意味よ」

「つまり、この人たちも王党派なんだよ。そうですよね？ウェールズ皇太子殿？」

「..ハアッ！？」「..」

僕の言葉に皆はかなり驚いているようだ。ウェールズたちも絶句している。

「驚いたな。どうして分かったんだい？」

「禁則事項です」

一度言ってみたかったんだよね。これ。

「あはははは...。これは一本取られたね」

ウェールズは腹を抱えて笑っている。そんなに面白かったのかな？
アレ。

「如何にも。私はアルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」

ウェールズは女性受けしそうな魅力的な笑みを浮かべ、ルイズたちに席を勧めた。

ルイズたちは未だにポケットと突っ立っている。

まあ、ここから先は原作通りだったので、話は適当に聞き流しておいた。

ウェールズが手紙を読み終えたところで、僕はぼくっとしていた意識を呼び戻した。そして、あることに気付いた。

「あれ？ワルドさんは？」

「あ」

どうやら、ワルドはルイズにさえ忘れ去られていたらしい。……
不憫な奴。

船長室から出た後、僕たちは後甲板にきている。ウェールズがワルドと話しをしている。

ルイズは疲れていたようで、眠ってしまった。そしてキュルケがルイズにレビテーションをかけて船室に運んでくれた。ギーシュは僕から十メートル離れた所で黄昏ている。ウェールズとアンリエッタが恋仲であることに気付いたのかもしれない。……色恋沙汰限定で勘のいい奴だ。

そして、タバサは何処にいるのかというと……

「すう、すう……すう」

僕の膝を枕にして眠っている。キュルケにルイズと一緒に運んでもらおうと頼んだら、

「タバサはダーリンの膝枕してもらってるからぐっすり眠ってるのよ」

とのこと。

よく分からないけど、ぐっすり眠ってるタバサを起こすのは可哀相なので、このままにしておく。

……タバサの寝顔を見るのもそれはそれで楽しいしね。しかも可愛いし。

タバサの髪を手櫛で梳く。タバサの髪は柔らかくて手触りが良い。癖になりそうだ。

そうやって、タバサの寝顔を眺めながら髪を触っていると、船が停止し、ゆっくりと上昇し始めた。

すると、眩いばかりの光にさらされた。気が付くと、既にニューカッスルの秘密の港に到着していた。

「う、ううん……」

タバサが起きた。

「ごめんねタバサ。起こしちゃって」

「……………」

タバサは無言で僕を見ている。どうやら状況が飲み込めていないようだ。

「わたし、寝てた？」

「うん。ぐっすりと」

「どうして？」

「どうして起こさなかったのかってこと？」

タバサが首肯する。

「タバサが気持ち良さそうに寝ていたから、起こすのが可哀相だと思っ
て起こさなかったんだ」

「……………そう」

「君達、そろそろ降りるぞ！」

ウェールズが少し離れた所から僕たちを呼んでいる。僕とタバサ以外の皆はウェールズの側にいる。……………何故かルイズが顔を赤くしてこっちを見ている。

……………何か怒らせるようなことしたっけ？

ウェールズに先導され、タラップを降りた。その際、ルイズがずっと僕を睨んでいたが、気にしないことにする。

だってなんか面倒臭いし……………。

名前は忘れたが、老人がウェールズに近寄ってきて、ウェールズを
労った。

ウェールズに案内されたのは城内の彼の居室だ。王族の部屋とは思えないほど質素な部屋だ。

因みに、今この部屋には僕とルイズ、ワルド、ウェールズの四人しかいない。他の皆はパリーという老人に客室に案内された。何故別行動なのかというと、ルイズ曰く、

「密命だから」だそうだ。

現在、僕の前ではルイズがウェールズを説得しようと必死だ。原作の流れを変えてしまうと僕の知る未来が変わる可能性がある。その為、僕は大きな改変をするつもりはない。ウェールズを助けても原作に大きな違いは出ない……ハズだ。だから、可能ならばウェールズを助きたい。どうにかして、ウェールズを説得できればいいんだけどなあ。

「そろそろ、パーティーの時間だ。きみたちは、我らが王国が迎える最後の客だ。是非とも出席してほしい」

……説得できるかどうかはわからないけど、やれることはやるだけさ。

僕はべそをかいているルイズとパーティー会場に向かった。

パーティー会場では、アルビオンの王、ジェームズ一世の話が終わり、喧騒に包まれている。

ルイズたちは王党派の貴族の対応に追われている。キュルケとワルドは割と普通に対応しているが、ギーシュは貴族の持つてくる料理やワインの処理の所為でかなり酔っているようだ。タバサは貴族を無視してご飯を掻き込んでいる。しかし、ルイズは会場の雰囲気になんとも耐えきれず、外に出て行った。

「ワルドさん。ルイズの相手して下さい」

「君は行かないのかな？」

「面倒臭い」

「その反応は予想してなかったよ」

ワルドは苦笑して、ルイズの後を追った。

ルイズを手に入れる為の点数稼ぎに余念がないな。ワルドの奴……。久し振りに食べるご飯を咀嚼しながらそんなことを考えていると、ウェールズが近寄ってきた。

「ラ・ヴァリエール嬢の使い魔の少年だね。しかし、人が使い魔とは珍しい。トリステインは変わった国だな」

「トリステインで使い魔が人間なのは、ルイズだけですよ」

「そうなのかい？」

「ええ、そうですとも」

そう言うと、僕はウェールズと共に笑い合う。

「ところで、ヴァリエール嬢と子爵はどうした？先ほどから姿が見えないが……………」

ウェールズにさっきまでのことを説明する。

「彼女は本当に優しい娘だね」

「そうですね。僕もそう思います」

それきり、会話が途切れる。

……………ここは説得するチャンスだな。ここを逃せば、ウェールズを説得するチャンスは来ないかもしれない。

「あの……………、聞きたいことがあるんですけど……………」

「ん？何かな？」

「死ぬのが……………怖くないんですか？」

「く、くくく、あははは…。案じてくれてるのか！私たちを！きみは優しい少年だな」

「僕は一度死にかけたことがあるんです……………。僕は凄く怖かった。

僕が死ぬことではなく、僕を知る誰かが哀しむのが怖かった」

「そうか……………、そうだな。それは確かに怖い。守るべきものがあれば、自身の死の恐怖は忘れさせてくれる……………。しかし、私が死ぬことで哀しむ者を慰めることは出来ないのだから……………」

「なら、考え直してくれませんか？」

「…………それはできない」

強情な奴だな。面倒臭い。

「…………何故ですか？貴方が死ねば、姫様が悲しみます。手紙にだつて、亡命するように書かれてあつたんでしょう？」

「私がトリステインへ亡命したならば、貴族派が攻め入る格好の口実を与えるだけだ」

「貴族派の……『レコン・キスタ』の目的はご存知でしょう？そんな口実などなくても攻め込んできます」

「だが、我らの義務を果たさなくてはならない。貴族派に勇氣と名譽の片鱗を見せつけ、ハルケギニアの王家たちは弱敵ではないことを示さなければならない。それが、内憂を払えなかった王家に、最後に課せられた義務なのだ」

ああもうこの人は本当に面倒臭い。そんなものに何の意味もないのに……。

「さっきも言った様に、貴族派の連中は口実などなくても攻め込んでもくる。貴方が死のうが死ぬまいが、関係なくね。けど、貴方が死ねば、姫様が悲しむ。そして、姫様は貴方を殺した貴族派を恨むだろう。憎むだろう。復讐しようと考えてるだろう。その後は戦争だ。たくさんの人が死ぬことになる。そうなったら、貴方はどう責任を取るつもりだッ！死んでしまつては責任を取ることすらできない！貴方が死ぬことが義務だと言うが、そんなものは義務ですらない！単なる逃げだッ！！」

「ならば、どうしろというのだ！私にここにいる皆を残し、一人おめおめと逃げ出せと言うのか！」

いつの間にか、人だかりが出来ている。しかし、ここで諦める訳にはいかない。

「なら、僕が貴方たち全員が逃げる為の時間を稼いでやる！」

「そんなこと、出来る訳がないだろう！君は五万の軍勢とたった一人で戦うつもりか！？それこそ無茶だ！出来る訳がない！！」

「お二人共、落ち着きなされ」

僕たちの言い争いを止めたのは、パリーという老人だった。

「五万の軍勢を一人で止めることは不可能です。もし、それが出来たとしても、全員を乗せられる船が足りませぬ」

そう、確かにそうだ。僕一人で五万の軍勢を引き止めることはできないし、船が足りないのであれば、全員で逃げることも不可能だ。全て分かっていたことだ。

「しかし、ウェールズ様には是非とも生き延びて頂いて、アルビオン王家を復興して貰わなくては困ります」

「パリー……」

「パリーとその少年の言う通りだ。ウェールズよ。お前は逃げなさい」

今度は王様のご登場か。

「しかし、父上……」

「よいなウェールズ。お前は何としても生き延び、アルビオン王家を復興するのだ。それが、お前の責務だ」

「く……父上……」

どうやら、ウェールズも渋々だが納得してくれたようだ。これで、悩みの種が一つ減ったか……。良かった。

「それにしても、ダーリンがあんな大声出すの初めてじゃない？」

「同感」

「そうだね。いつも落ち着いて話してたしね」

声のした方を見ると、キュルケ、タバサ、ギーシュの三人がこつちを見ている。

「見てたのか……」

「あれだけ大声で騒いでいたら嫌でも目につくわよ」

「ああ、そう……」

当分大きな声は出したくないな。

することももうないから、近くにいた給仕に、何処で寝ればいいのか尋ねた。

三人と共に部屋に向かっていると、前からワルドが現われた。ワルドが明日結婚式をする話を始めた。

どうでもいいので適当に聞き流し、先に進んだ。

長い廊下の途中にルイズがいるのが見えた。

これは……、僕が慰めるしかない、か……。

三人に気付かれないようにルイズの下に向かった。

ルイズは僕に気付くと、僕の体にもたれかかった。

「なに、泣いてるの？」

ルイズは無言のままだ。妹にしていたように頭を撫でた。

「いやだわ……、あの人たち……、どうして、どうして死を選ぶの？ わけわかんない。姫さまが逃げてって言うてるのに……、恋人が逃げてって言うてるのに、どうしてウェールズ皇太子は死を選ぶの？」

「レコン・キスタにトリスティンに攻め込む口実を与えたくないんだってさ」

「それ、どうゆう意味？」

「ウェールズ皇太子がトリスティンに亡命すれば、それを口実にして貴族派が攻め込んでくる。……ウェールズさんは、自分の所為で姫様を危険な目に晒したくないんだよ」

「…………わたし、説得する。もう一度説得してみるわ」

「駄目だよ。ルイズは手紙を姫様に届ける仕事が残ってるだろ？」

「…っ…………う…」

「さあ、もう部屋に戻ろう。今日はもう寝たほうがいい」

「……………うん」

ルイズは泣いていたが、さっさと部屋に戻らせた。今は余計なことを考えず、休んだほうがいいと思ったからだ。

……………僕も部屋に戻ろう。明日はいろいろと忙しいしね。

部屋に戻るまでの間、僕は明日のことについて、考えるのだった。

第十五話

朝、僕はイーグル号に乗り込んでいる人達の列を眺めている。この人達はニューカッスルから疎開する人達だ。その隣りには、輸送船、マリー・ガラント号がある。そちらにも、疎開する人達が乗り込んでいる。

「ラ・ロシエールの港で待ってて下さい。迎えに行きますから」

「ああ、わかった。一足先に行ってくるよ」

僕の目の前にいるフードを目深に被った人…… ウェールズもイーグル号に乗り込んでいた。

「しかし、君はどうやってここから脱出するつもりなんだい？」

「企業秘密です」

「ふふ、またそれかい？ 参ったな」

「無事脱出したら教えてあげますよ。…… それじゃ、僕はもう行きます。やる事がまだありますから」

「ああ、無事を祈っているよ」

ウェールズに別れを告げ、踵を返す。

鍾乳洞から出てすぐの所にタバサとギーシュがいた。

「こんな所にぼくたちを呼び出して……、一体なんの用なんだい？」

「うん。二人にはあることをお願いしようとおもってね」

ふっふっふ。ワルド。決戦の時は近いぞ？あの時の借り、思う存分返させてもらっぞ。

一方その頃、礼拝堂では、ワルドとルイズの結婚式が執り行われていた。

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

詔を読み上げているのは皇太子の礼装で身を包み、白い仮面を被ったウエルズ皇太子だ。

ワルドは奇妙な格好をしたウエルズを見て、怪訝そうな顔をしたが、特に気にせず、式を続行している。

キュルケも式に出席している。キュルケ曰く、『ライバルの幸せを祝うのも、ライバルの務め』なんだとか。残りの三人がいないことにまたケントが何か企んでいるのでは？と思ったが、今は結婚式の方が大事らしい。

「新婦？」

ルイズは困惑していた。朝早くにワルドに起こされ、『今から結婚式をするんだ』と言われ、ここまで連れて来られたのだ。

もともと朝に弱いルイズは、死を覚悟したウエルズたちのこともあり、かなり寝ぼけた状態だったのだ。

「緊張しているのかい？仕方がない。初めてのときは、ことがなんであれ、緊張するものだからね」

ルイズが困惑している間にも、式は進んでいる。
けど、とルイズは思う。

このまま、流されるままにワルドと結婚していいのか？わたし、本当にワルドのことが好きなんだろうか……。

「まあ、これは儀礼に過ぎぬが、儀礼にはそれをするだけの意味がある。では繰り返しそう。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして夫と……」

そして気付いた。ワルドに対する気持ちに……。確かに、わたしはワルドのことが好きだった。けれど、それはもう過去の話だ。今ではもう、ワルドは単なる憧れの対象でしかない。ワルドは恋愛対象には成り得ないのだ。

「どうしたね、ルイズ。気分でも悪いのかい？」

「ごめんなさい。ワルド、わたし、あなたとは結婚できない」

ルイズはワルドに明確な結婚に対する拒絶の言葉を放った……。

「ん？」

「どうした？相棒」

僕はタバサとギーシュにある“お願い”をした後、礼拝堂に向かって走っていた。

「ああいや……、礼拝堂の様子が見えるんだよ。これは多分、ルイズの視界だね」

ワルドが凄いい剣幕で言い寄ってきている。

「何が見えるんだ？相棒」

「僕たちの倒すべき敵さ」

僕は走る速度を上げた。

「いやよ、誰があなたと結婚なんかするもんですか」

それは拒絶の言葉。ルイズはワルドとの結婚を拒否していたが、ワルドの目的が自分の在りもしない魔法の才能だったことがわかり、ワルドを完全に拒絶したのだ。

「この旅で、きみの気持ちをつかむために、随分努力したんだが……」

キュルケはワルドの様子を見て、何かイヤな予感がした。

……あたしの感って、結構当たるのよね。特にこつこつ予感だね。
キュルケは先程までのワルドの様子を見て、呆れていたが、今の妙に落ち着いている様子は、嵐の前の静けさの様だとも思った。

「こつなつては仕方ない。ならば目的の一つは諦めよう」

「目的？」

「そうだ。この旅における僕の目的は三つあった。その二つが達成できただけでも、よしとしなければな」

「達成？二つ？どういうこと？」

ルイズは考え得る最悪な想像をしながら尋ねた。

「まず一つはきみだ。ルイズ。きみを手に入れることだ。しかし、これは果たせないようだ」

「当たり前じゃないの！」

「二つ目の目的は、ルイズ、きみのポケットに入っている、アンリエッタの手紙だ」

「ワルド、あなた……」

ルイズは自分の想像が当たってしまったことを悟った。

「そして三つ目……、貴様の命だ。ウェールズ！」

ワルドは詠唱を完成させ、青白く光る杖で突いた。

「投影、開始」

しかし、ウェールズの手いきなり出現した双剣に防がれた。

「なんだとっ!!」

「「え?」」

驚愕と疑問の声……。

ワルドはいきなり現われた剣で自らの攻撃を防がれたことに驚き、ルイズとキュルケは何もないところから剣が現われるという、見覚えのある現象に疑問の声をあげたのだ。

「ふっ……。ワルド、お前が『レコン・キスタ』であることは初めて会った時からお見通しだ」

「……何者だ、貴様、ウェールズではないな」

「おいおい、随分と今更なセリフじゃないか。こんな仮面を被っている時点で、僕がウェールズではないことを疑うべきだったんだよ……」

「いいからその面妖な面を取り、素顔を見せろ」

「酷いな。お前のつけていた仮面をイメージして作ったのに……。まあいい。そこまで言うなら取ってやるよ。尤も、そっちの二人は僕の正体に勘づいてると思うけどね」

「まさか、本当にアンタなの？」

僕はルイズの問い掛けを無視して、仮面を取った。

「ケ、ケント……」

「さあワルド。この間の借り……、百倍にして返してやる！」

「ふんっ！笑わせるな！僕に手も足も出なかった貴様が、どう勝とうというのだ！！」

「ワルド。あんなモノが僕の全力だと……、本気で思っているのか？」

「……どういう意味だ」

「全力ではなかった。そう言ってるんだ」

「ふん！どうせハツタリだろう？もしそれが本当だったとしても、貴様ごときに負けるわけがない」

そうやって僕のことを侮っていればいいさ。その方が都合がいい。

「行くぞ、ロリコン子爵。魔力の貯蔵は充分か」

「ロ、ロリ……？な、なんだかよくわからんが馬鹿にしおって……
…、生きて帰れると思うなよ！！」

中ボスのような科白だと思ったが、意図的に無視して切りかかった。

「なかなかやるな。僕の影分身」

「いやいや、感心してる場合じゃねえだろ」

僕は今、礼拝堂の出入口から中の様子を見ている。

ワルドと戦っているのは僕の分身で、僕と同等の力を持っている。だが……、流石に五対一は無理があるようだ。ワルドの遍在は厄介だから仕方がないことなんだと思う。

まあ、それを打倒する為の干将・漠耶なんだけどね。あれは魔術を使う際、媒介としても使える。つまり、この世界の魔法の発動体としても使えるということだ。

「なあ、何時までこんなところにいるつもりなんだ？相棒」

「こういつのはタイミングが重要なんだ。という訳でもう少しの間、ここで待機」

「へいへい。わかったよ。あー、退屈だな……」

「暇なら自分の本当の姿に戻ったら？」

「俺の本当の姿？」

「ワルドと戦うんなら、デルフが自分の本当の姿を思い出してからだね」

自分の本当の姿すら忘れてしまっているポケ剣のことは置いて、中の様子を見る。

自分が戦ってる姿を客観的に観る手段なんてそうそうないからな。もう一人の僕は今のところは問題なさそうだ。さて、ルイズとキュルケはどうしてるかな？ってこっちに近付いてきてる！？ヤバイ。絶対なんか言われる！か、隠れなきゃ！

「さてと……、ここなら巻き込まれる心配はないかしら」

キュルケはルイズと共に、扉の前でケントワルドの戦いを観戦し始めた。

「何バカなことやってんのよ！わたしたちも戦うのよ！！」

「馬鹿ね。そんなことしたらダーリンの邪魔にしなければならないでしょ？そういうことはトライアングルクラスのメイジを倒せるようになってからにしないさい」

「自分の使い魔が戦ってるのに主人であるわたしが何もしないわけにはいかないでしょ！」

相変わらずのルイズの様子に、キュルケは安堵した。しかし、ルイズにケントの邪魔をさせるわけにはいかないので、なんとか説得を試みる。

「ほら、見てみなさいよ。あのケントの顔を」

キュルケに言われた通り、ケントを見る。

「笑ってる？」

五人のワルドと切り結んでいるケントの顔は、疲労の所為か、汗が滲んでいるが、薄い笑みを浮かべていた。

「ダーリンには勝算があるのよ。それをあたたちの勝手な行動でなくしてしまうかもしれない……。そのツケはあたしたちじゃなくてケントにいく……。だから今のあたしたちにできるのは、邪魔にならないように少し離れた所から見守ることだけなのよ……………」

「……………ふん！わかったわよ！」

ルイズは、そっぽを向いて頷いた。

「ふははははは！先程までの威勢はどうした？まさかこのまま終わりという訳ではあるまい。あの様な大口を叩いたのだから、僕の遍在の一体や二体、退けてみせろ！」

五体のワルドの猛攻を防ぐ。絶え間なく紡がれる剣撃は、未だ絶えることはない。

だが……、それも永くは続かない。ワルドとて体力が無限にあるわけではない……。現に今、肩で息をしている。しかも、動きにブレ

が出てきた。もうすぐ決定的な隙ができるだろう。そのときが勝負だ。

僕の“魔法”で蹴散らしてやる！出来るだけ派手にね！

「ハアッ！」

このままでは埒があかないと思ったのか、遍在ワルドが大振りの攻撃を繰り出してきた。

……………今だ！

ワルドが杖を振り降ろすタイミングに合わせて跳躍し、一気に距離を離す。

「僕から離れたのが運のつきだ！」

ワルドが杖を振り降ろした。それと同時に不可視の空氣の塊が飛んでくる。それを半歩横にズレ、紙一重で躲す。

「今度はこっち番だよ。さて避けられるかな？」

干将を五人のワルドに突き出し、呪文を紡ぐ。

「マス・テル・マ・スキル・マギステル。光の精霊17柱。集い来たりて敵を射て。“魔法の射手・連弾・光の17矢”！！」

光輝く17の矢がワルドを襲う。突然のことに対処出来なかったのか、五体の内の二体に命中した。

「な！平民が……………魔法を使うだと？」

「驚いている暇はないぞ？」

更に魔力を練り上げ、とっておきの魔法を詠唱する。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。来たれ雷精！風の精！」

「くっ……、やらせせん！」

苛立たしそくに、ワルドは呪文を詠唱する。

「雷を纏いて吹きさばせ！南洋の嵐」

干将に稲妻が迸る。凄まじい魔力が周囲を満たす。

「『ライトニング・クラウド』！」

しかし、ワルドの方が速かった。黄色い閃光が、こちらに向かって迸る。だが……、その稲妻は僕を捉えることはなかった。

「ワルド……、これで終わりだ。“雷の暴風”」

瞬間、凄まじい威力の雷が『ライトニング・クラウド』を飲み込み、そのままワルドを貫いた。その雷はワルドだけではなく、礼拝堂の床を抉り、壁をぶち抜き、空の彼方へ消えていった……。

「これでお終い……、かな？」

辺りは煙りが漂い、視界が悪い。

「ゲホ、ゲホ、こほ……」

「な、何なのよ……、もう」

向こうの方からルイズとキュルケの声が聞こえる。まあ、煙りにむせてるだけなんだけどね。そこら辺は気にしない方向で。

「まだだ……、未だ終わってはいない」

「な！まだ居たのか！？」

「せめて、貴様らだけでも！」

足音が聞こえる。その足音は僕の方ではなく、ルイズたちの方に向かっていているようだ。

「死ね。ルイズ」

漸く煙りが晴れてきた。傷だらけのワルドの姿があらわになる。

「く、しつこい殿方は嫌われるわよ！」

キュルケが杖を構えて詠唱を始めるが、それより速く詠唱を完成させていた、風の魔法……、『ウィンド・ブレイク』を受け、ルイズ共々壁に叩き付けられた。

「う、ぐう」

「さよならだ。ルイズ」

痛みに呻きをあげるルイズにワルドは杖を突き付ける。

「助けて……、お願い……」

ルイズはただ、己の使い魔に助けを求めるだけ……。ワルドは呪文を詠唱する。ルイズを確実に仕留められる……。電撃の呪文を……。

ルイズは本能で理解した。この電撃の魔法を受ければ命はないことを……。しかし、今のルイズにはなにもできない。

「ケント！助けて！」

「『ライトニング・クラウド』」

ルイズが絶叫をあげるのと同時に、呪文が完成し、杖を振り下ろそうとした瞬間……、壁が砕け、ワルドの後ろにいる筈の使い魔が飛び込んできた。

「さて……、仕切り直した」

僕はそう言い、不敵な笑みを浮かべるのだった。

第十六話

「貴様……、いつの間に」

「さっきの間に」

杖をデルフで受け止め、ワルドの問いにふざけた答えを返す。
距離を離すか……。

より一層力を込めてデルフを横に払った。ワルドはその力を利用して飛び退り、距離を取る。

僕の分身はとくに消してある。ワルドに僕が遍在の様な魔法が使えることを悟らせない為だ。……魔法といっても気を使った分身なので、厳密に言えば魔法じゃないんだけどね。

「どうした？ ガンダールヴ。来ないのなら、こちらから行かせてもらおう！」

ワルドがまた遍在の呪文を唱えた。ワルドが今度は六人に増える。

「思い出した！」

ワルドが僕に向かって走り出したのと同時にデルフが叫んだ。

「やっと思い出したのか。速く本当の姿に戻ったら？」

「おうよ！ 相棒がガンダールヴなら、俺もこんな格好してる場合じゃあねえからな！」

デルフの刀身が光出す。遍在ワルドの一人が『ウィンド・ブレイク』を唱えた。

猛る風が、僕を目指して吹きすさぶ。

しかし、未だに光っているデルフの刀身に吸い込まれ、消え去った。そして、漸くデルフは本当の姿に戻った。

「これがほんとの姿さ！相棒！いやあ、てんで忘れてた！そういや、飽き飽きしてたときに、テムエの体を変えたんだった！なにせ、面白いことはありゃあしねえし、つまらん連中ばかりだったからな！」

「自分の姿を変えるのはいいけど、本当の姿を忘れてちゃ、意味ないよね」

「う、それは言わねえ約束だぜ、相棒。でも安心しな。ちやちな魔法は全部、俺が吸い込んでやるよ！この『ガンダールヴ』の左腕、デルフリンガーさまがな！」

意気込みは立派だね。……あくまで意気込みだけはね。

「呑気に話している暇はないぞ！」

ワルドは『エア・ニードル』で杖を青白く光らせた。

「杖自体が魔法の渦の中心だ。その剣で吸い込むことはできぬ！」

僕の魔法を封じる為に白兵戦でカタをつけるつもりか！
六人のワルドの猛攻により、ワルドの狙い通り呪文が詠唱できなくなってしまった。

「魔法が使われたときは肝が冷えたが……、これでは詠唱する暇もあるまい」

ワルドは入れ代わり立ち代わりに攻撃を仕掛けてくる。

正直言つて、かなり厳しい。だが、手が無いわけではない。というか既に準備万端だ。

これだけでは何のことかわからないだろうから、回想スタート！

それは……、僕の分身体がワルドに魔法をぶっ放している最中だった。

「すげーな相棒！あんなの出せんのかよ！！」

「まあね。結構魔力消費するんだよ？」

僕の分身体の魔法により、ワルドの遍在が何体か吹っ飛んでいる。

「けど……、本体は未だヤル気みたいだし、一応準備だけでもしとこうかな？」

「なんの準備なんだ？相棒」

「保険だよ。ほ・け・ん」

僕はデルフに詳しい説明はせずに、自身の魔術回路に魔力を通す。

「投影、開始」

頭の中に十本の剣の設計図を思い描く。

「憑依経験、共感終了」

思い浮かべるのは昔、学校の社会科見学で行った歴史博物館で見た
刀剣類の展示コーナー。

「工程完了。全投影、待機」

所詮は博物館のモノと侮るなかれ、そこに展示されていたのは古今
東西の妖刀、名剣、そんじょそこらのナマクラとは訳が違うのだ。

「取り敢えず、これで準備完了だ」

「結局教えてくれねーのかよ……」

そうやってばやくデルフを見て、僕は笑った。

……回想終了……

てな理由で、準備は万端なのだ！後は、放つのみ！

「停止解凍、全投影連続層写！」

現われたのは、歴史ある十の剣……。その名剣は、三体のワールドを貫いた。

「なん、だと……？」

ワルドはそれを驚愕の眼差しで見ている。

……… 今がチャンスだ！

「食らえええ！ワルドオオ！！」

今まで出したことのない物凄いスピードで、残り三体のワルドを切り裂いた。

本体のワルドが地に伏し、切り離された左腕が地面に落ちた。

「はあ… はあはあ」

あー、疲れた。ガンダールヴの力を引き出したおかげで身体に負担がかかったみたいだ。

とても立っていられる状態ではなく、膝についてしまった。

「くそ………、この閃光がよもや後れを取るとは………」

ワルドが立ち上がった。しかし、限界が近いようで、足下がふらついている。

ワルドが残った右腕で杖を振り、宙に浮いた。

「目的は果たせなかったが、どのみち貴様らはここで終わりだ。もうすぐ我がレコン・キスタの大群が押し寄せる。ほら！馬の蹄と竜の羽の音が聞こえるだろう！」

ワルドの言う通り、外から戦いの音が聞こえてくる。

「愚かな主人ともども灰になるがいい！ガンダールヴ！」

ワルドは壁に開いた穴から飛び降りた。

……やっぱり中ボスの捨て台詞だったな。まあ、それがワルドの限界なんだろうな……。

と、そんなことはどうでもいいや。

「キュルケ。そろそろ起きたら？目、覚めてるんだろ？」

「あら、バレてたの」

キュルケがずっとたちあがり、服や髪についた埃を払う。

「何時から気付いてたの？」

「ワルドが壁から飛び降りたときに気付いたんだ。杖を持つ手がピクツと動いてたから」

「よく見てたわね」

キュルケは感心しているようだ。

「まあね。……とりあえず、ルイズを起こしてくれる？起きなかったら持ち運びよろしくね」

「なんであたしが！？ケントがやればいいじゃない」

不満を一分たりとも隠そうとしていない。ある意味大物だな。

「僕はもう疲れた。できることなら今すぐ寝たいんだよ。………まったく、慣れないことはするもんじゃないね」

キュルケが、尚も不満そうに文句を言おうと口を開こうとしたその

とき、ルイズが寝ている直ぐ側の地面が盛り上がった。

「きゃっ!?! な、何なのよ?」

いきなり地面が盛り上がったことに驚いたのか、小さい悲鳴をあげるキュルケ。

「お! 心強い仲間が来たみたいだね!」

「え? それどういうこと?」

「見てればわかるよ」

床が割れ、ヴェルダンデが顔を出した。

「あら? ギーシュの使い魔のジャイアントモールじゃない。どうしてこんなところに……」

ヴェルダンデは床の上で寝ているルイズを見つけると、嬉しそうに鳴きながら駆け寄った。

恐らく、水のルビーを探す為だろう。次いで、ヴェルダンデが掘った穴からギーシュが出てきた。

「やっと着いたか……。やあ、ケント。君からの願い通り、脱出路を掘ったよ。まったく君も人使いが荒いよ……」

「なるほど」。朝から姿が見えないと思ってたら、こういうことだったのね」

「こうなることは大体予想はしていたからね。二人にお願いして脱

出路を掘ってもらったんだ。……………そんなことよりも速くここから出よう。今、敵に見つかったら面倒だし……………」

「そうと決まれば長居は無用よ。急ぎましょう!」

キュルケはルイズに『レベテーション』をかけ、一緒に穴に潜った。その後をギーシュが追う。

僕もそれに続こうとしたが、ふと、何か忘れている気がして立ち止まった。

「な〜んか忘れてるような気がする……………そうだ!『始祖のオルゴール』だ!〜すっかり忘れてた!……………まあ、今更取りに行く時間はないし、面倒だからどうでもいいか……………」

とりあえず放つとくことにした。

穴から出た後、落下していた僕たちだが、シルフィードに無事、受け止められた。

「ごめんねシルフィード。痛かったろう?」

そう言い、背中を撫でてやると、きゅいきゅい!と鳴いた。気にするなど言っている気がしたので、シルフィードはエラいなあ、と言って撫でてやると、今度は嬉しそうに鳴いた。

「怪我はない?」

シルフィードを労っていると、タバサが近付いて来た。
「というかこの不安定な所で立って歩けるタバサは凄いと思う。……
…まあ要は慣れなんだろうけど。」

「細かい傷なら幾らかあるけど、放っておけば勝手に治るよ」

「そう……」

タバサが僕の隣りに腰を降ろす。

「それにしても、今日はすごく疲れちゃったよ……。魔力を使い過ぎた所為か、凄く眠い」

「そんなに……手強かったの？」

「まあね。腐っても風のスクウェアだからね。苦戦して当然だよ」

「そう……」

「といつても手の内はできるだけ隠してたから、そんなの気にせず全力で戦えばもつとすんなりケリはついてたんだろうけど……」。

「それじゃ、僕はもう寝るから、後は任せたよ。タバサ」

「わかった」

タバサの了承の意を伝える言葉を聞きながら、寝転がると、頭に妙な感触がした。

柔らかく、それでいて弾力のあるこの心地よい感触はまさか!?

そう思い、目を開けると、そこには青空と同じ色をした髪の少女がいつの間にか僕を見下ろしていた。

「タバサ……、これはもしかして俗に言う“膝枕”とか言うヤツですか？」

「もしかしくてもそう」

普段と同じく、淡々とした表情であっさりと言われた。

「あー、えーっと……、取り敢えず、何故に膝枕？」

「わたしは貴方に借りがある。だから今、その借りを返している」

「じゃ、じゃあこれで貸し借りナシってことで……」

「ダメ」

「……もしもタバサさん？そこまで力強く『ダメ』って言わなくても……」

「ダメ」

うわーい、力一杯拒否されちゃった、

「この程度では、まだ返し切れない」

「……ああそう。もうどうでもいいや。気の済むまで借りを返してくれ、僕はもう寝る」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

タバサの膝の感触を味わいながら、僕の意識はまどろんでいった。

その頃、ルイズは夢を見ていた。

前にも見た、故郷の地、ラ・ヴァリエールの屋敷の夢だ。

誰も近寄ることのなくなった中庭の池に浮かぶ小船の上で、ルイズは寝転んでいた。

ルイズは昔から辛いことがあると、ここに来ていた。

誰も来ない忘れ去られた場所……。自分しかない、秘密の場所……。

ルイズはワルドのことを考えていた。

もう、ワルドはここには来ない。優しくった子爵さまはもういない……。憧れだったあの人は、本当の意味で幻想になってしまった。

あの薄汚い裏切り者は、姫さまの想い人である皇太子の命を狙い、拳句の果てにはこのわたしをも手にかけようとした残念な……。じやなくて残忍な卑劣漢……。

そう考えるとまた泣けてきた。

小船の上で、泣いていると、ぱしゃぱしゃという水音が聞こえてきた。

「だれ？」

あの子爵はもうここには来ない……。では一体、誰がくるのだろうか

か。

現われたのはケントだった。あの五月蠅いボロ剣を背中に吊り、何時も通り、柔和な微笑みを浮かべながら近付いて来る。わたしはケントに抱き抱えられた。

「泣いてるの？ルイズ」

わたしは、こくりとまるで幼い子供のように頷いた。

「泣かないで、ルイズ。人生は楽しまなきゃ、ね？」

ケントは小さい子供に言い聞かせるような優しい声音で話しかけてくる。

わたしは何だか悔しくなつて怒鳴りつけようとしたが、ケントに優しく撫でられると、心地がよくなり、体から力が抜けてしまった。そして、不覚にも気持ち良いと思ってしまったのだ。

風竜の上、キュルケの腕の中、ルイズは目を覚ました。

ルイズは自分が、キュルケの腕に抱かれていることに気付いた。

何でキュルケがわたしを抱いて寝ているんだろうか？

疑問に思ったが、キュルケが気絶した自分を運んでくれたのだろうと当たりをつけた。

い、一応感謝しておくけど、これじゃあ身動き取れないじゃない！！キュルケは眠っているが、ルイズの身体をしっかりと抱いて離さない。ルイズは脱出することを諦め、辺りを見渡した。視界の端に風竜の尻尾が見えた。

どうやら、尻尾の付け根の辺りにわたしはいるようだ。というか“わたしを抱いたキュルケが”になるんだろうけど……。

ギーシュは背びれを背もたれにして座っている。

「やあ、起きたのかい？ ルイズ」

ニヤニヤとイヤな笑みを貼り付けたギーシュが話しかけてきた。

「ええ、起きたわよ。何だかとても不本意なことになってるけどね！」

「まあまあ、いいじゃないか。キュルケは気絶したルイズをここまで運んで疲れてるんだから」

「わかってるわよ！」

だから嫌なんじゃない！ ツエルプストーが起きていれば、この拘束からも抜け出せるし、さつさとお礼も言えるんだから！

「まあいいわよ……。それで、ワルドはどうなったの？」

「君の使い魔に負けて逃げ出したらしいよ」

「そう……、ワルドは逃げたのね……」

今度会ったら、絶対爆発させてやる！

「そうだ！ ケントは？」

そう聞くと、ギーシュはより一層気持ち悪い笑みを浮かべて自分の

後ろを指差す。

そこに居たのは……、何時もと変わらず本を読んでいるタバサと、そのタバサの膝を枕にして眠っている自分の使い魔だった。

何やってるのよアイツは！！

「ご、ごごごご主人様が気絶してるっていうのに、あ、あああああ・い・つ・は~~~~~！！！！」

「ま、まあまあ、落ち着きたまえよ。彼だって疲れてるんだ。あれぐらい許してやりなよ」

「くっ……」

確かに、わたしの窮地を救ったのはアイツだし……、仕方ない。

「今回だけだからね！」

渋々認めることにした。

取り敢えず、この心地良い風が止むまでは……、許してやることにしたのだった。

第十七話

アルビオンから無事脱出した僕たちは、港町ラ・ロシエールに来ていた。一足先に脱出していたウェールズを迎えに行く為だ。

そして何事もなくウェールズを発見するまでは良かったのだが……

…、

「ねえ、これはどういうことなのかしら？」

ウェールズのことを話さなかったことにご立腹なマイ・マスターが出来上がってしまったのだ！

「あー、ルイズ？ウェールズさんのことを話してなかったのは謝るけど……、そんなに怒らなくてもいいんじゃないかな？なあんて思っちゃったりしちゃったりして……」

「あんたねえ！ご主人様には内緒にしてた癖に、タバサとギーシュには皇太子様のことを話してたんでしょ！？その上わたしが気絶してる間にタバサに膝枕させてるし……、アンタみたいなご主人様をないがしろにする使い魔にはオシオキが必要なようねえ……」

ルイズはふふふと不気味に笑いながら杖を僕に向けてきた。

「い、いやちよつと待て！二人に話してたのは隠す必要がなかったからだし、大体ルイズにこういう腹芸は向いてないだろ！？これは作戦上仕方のないことだったんだ！ていうか最後のは関係ないだろうつ！」

「問答無用！！！！」

杖の先端が光る。

「ちょ、待……………」

ドゴーン！という爆発音を薄れゆく意識の中で聞きながら、僕は気絶した。

「ちょっとルイズ！やり過ぎよ！」

「う、うるさいわね！ちょっと気絶しただけじゃない！わたしは悪くないわよ！！」

キュルケとルイズは言い争っていた。

怒りに我を忘れてたルイズの爆発魔法により、ケントが気絶してしまったからだ。

「か、彼は想像以上に過酷な環境で日々を過ごしているんだね……………」

先程までの一部始終を見ていたウェールズが言った。

……………少し顔が青く見えるのは気の所為ではないだろう。

「ルイズは怒りっぱいから、こんなのは日常茶飯事ですよ」

同じく、少し離れた位置にいたギーシュが言った。

「そ、そうなのかい？ 大変だな、彼は……。で、彼は大丈夫なのかい？」

「大丈夫ですよ。元々、ケントは体が丈夫だし、今はほら、タバサが治療してくれますから」

ギーシュの言葉通り、タバサが気絶したケントの治療をしている。心配そうにしているが、その些細な表情の変化はよく一緒に居るキウルケか、ケントぐらいしかわからないだろう。

「取り敢えず、彼のことは彼女に任せておいた方がいいみたいだね」
ウェールズは、気絶したケントをかいがいしく看病するタバサの姿を見て、微笑ましく思ったようだ。顔が緩んでいる。

「出発は、ルイズたちの喧嘩が収まってからになりそうだね……」
ギーシュが呟く。

ルイズとキウルケの言い争いは、まだまだ終わりそうになかった……。

「あー……、ひどい目にあった……」

ルイズの爆発魔法をモロにくらい、気絶してしまった僕は無事、意識を取り戻し、トリステインの王宮へ急いでいた。

それにしても……、何でルイズはあんなに怒ったんだろう……。不思議だ。というか何故僕は爆発魔法を避けなかったんだろうか？ 不意を突かれたとはいえ、あれくらい簡単に避けられる筈なのに……。あの時、体が動かなかった。まさか、これが世界の修正力というヤツなのか！！

……何か空しい。

「大丈夫？」

「うん、タバサのおかげで傷は治ったし、睡眠も充分とれたから調子いいよ」

「そう……」

タバサが安心したように微笑む。

ルイズの所為でボロボロになった僕の体を癒してくれたタバサは本当に優しい娘だ。

感動して泣きそうになる。それにひきかえ……

「ふんっ！」

あちらでご立腹なマイ・マスターは未だに機嫌が悪いらしく、僕と目を合わせようとしない。

まったく……、何時まで怒ってるつもりなんだろね。何かもう……このまま放置しておくか、面倒臭いし。

そう結論を出した僕はこのまま大人しくしていることにした。

「タバサ、王宮まではどのくらいかかる？」

「もうすぐ」

どうやら、目的地は近いらしい。

だが、原作では城の衛士に呼び止められた……ような気がする。どうでもいいシーンだったのであまり覚えていないが……、まあなんとかなるだろ。

面倒なことにならないことを祈り、空を眺めた……。

案の定マンティコア隊（マンティコアに乗っていたので、そう断定した）に呼び止められ、拘束されかけたが、アンリエッタが騒ぎに気付いたのかやってきて僕ら三人（僕とルイズとウェールズ）を自分の部屋に案内した。キュルケたちは若干不満そうにしていたが、大人しく謁見待合室に残った。

「では、何があつたのか聞かせて下さい」

ルイズが今まであつたことを手短かに話した。

僕とウェールズは黙って座ったまま喋らなかつた。

……説明するのが面倒だった訳じゃないからね？ いやホントだよ？ ウェールズはどうか知らないけど。

「あの子爵が裏切り者だったなんて……。まさか、魔法衛士隊に裏切り者がいるなんて……」

どうやら説明は終わったようだ。

アンリエッタは僕たちを見つめながら涙を流した。

「姫さま……」

ルイズが、アンリエッタの手を握ったのが見えた。

僕も慰めた方がいいのかな？

そう思い、声をかけてみる。

「姫様？どの組織にも腐った人間はいるものです。どうか悲しまないで下さい」

「しかし、わたくしが貴方たちを危険に晒したようなものなのですよ！裏切り者を、使者に選ぶなんて……、わたくしはなんということを……」

「アンリエッタ、泣かないでくれ……。僕はアンの悲しむ姿を見たくはないんだ」

「ウェールズさま……」

人目も憚らず見詰め合う美男美女。うーん、絵になるなあ。

「その御二方、イチャつくのは後にしてくれませんか？」

「そ、そうだね……」

「そ、そうですね……」

僕がそう言つと、二人は顔を赤くしながら離れた。というかいつの

間に手を握り合っていたのだろうか。

「それで、これからどうするんですか？」

「どうする、とはどういうことだ？」

「ウェールズさんがトリステインに居ると敵に攻め込む口実を与えることになります。まあなくても攻め込んでくるとは思いますが、無い方がいいでしょう？」

僕の言葉に三人がなるほどと頷いた。

「それなら、一応考えてある。君の連れにタバサという少女がいただろう？彼女に頼みたいんだが……」

「タバサに？」

どうやらウェールズは、タバサがオルレアン家の者だと気付いていたらしい。

「それじゃあ、僕がタバサに聞いてきます」

僕はアンリエッタの居室から退室した。

僕が謁見待合室に入ると、キュルケとギーシュが近付いて来た。

「あら？ダーリン一人なの？」

「ルイズは一緒じゃないのかい？」

僕一人だけ戻ってきたのを不思議に思っただけ、二人が聞いてくる。

「僕はウェールズさんに頼まれてね。ちょっとタバサに用があるんだ」

僕はそう言うと、二人を無視してタバサの下に向かう。その際、二人が恨みがましい目で見て来たが、気にしない方向で。

「タバサ、ウェールズさんがタバサの実家に潜伏したいって言うてたんだけど……、いいかな？」

タバサはしばらく思案した後、こう言った。

「かまわない。ただし、条件がある」

「条件って？」

「人の心を壊す水の秘薬の解毒方法の解読」

タバサのお母さんのことか……。

「わかった。伝えてくる」

僕は部屋に戻ろうと踵を返した。

「待つて」

返したのだが……、タバサに呼び止められてしまった。

「どうしたの？」

「……聞かないの？」

「ああ……魔法薬のこと？」

うーん、どう言い訳したもんか。

「何か、複雑な事情があるんだろ？」

タバサがこくりと頷く。

「なら深くは聞かないよ。タバサなら悪いことには使わないだろうし……」

「……………」

「それに水の秘薬の“精製方法”じゃなくて“解毒方法”を知りた
いってことは水の秘薬で心を侵された人がいるってことだ。違う？」

「…………… 違うない」

「なら問題なし。……その人が治るといいね」

僕は今度こそ謁見待合室を後にした。

「ねえタバサ、ダーリンと何話してたの？」

「……………」

ケントが部屋を出てからほんの数秒も経たないうちに、キュルケはタバサにニヤニヤとイヤな笑みを浮かべながら話しかけていた。あの話を他人に知られるわけにはいかないタバサは無言を通す。

「ねえ？教えなさいな、誰にも言わないから……………」

それでもキュルケはしつこく聞いてくる。

キュルケにとつてはいい暇つぶしなのだろうが、タバサにとってはいい迷惑だ。心なしか、イラついているようにも見える。

「そうだよ、ぼくにも教えてくれないかい？」

そこにギーシュまで加わってきた。

タバサも今まで我慢していたが、あまりの鬱陶しさに堪忍袋の尾が切れたらしい。

しかし、ここはトリステインの王宮だ。

下手な真似をして捕縛されては意味が無い、そう考えたタバサは、『サイレント』の呪文を唱えた。

周りの音が遮断され、キュルケとギーシュの声も聞こえなくなった。
『サイレント』を唱えられたことに気付いた二人は、これ以上何を言っても無駄だと思い、大人しくしていることにした。

僕が部屋に戻ると、ルイズがアンリエッタに水のルビーを返そうと
しているところだった。

こんなシーンもあったな。確か、この後サイトが風のルビーをアン
リエッタに渡すんだっけ。

ウェールズは生きてるから渡せないんだけどね。

「おや？戻ってきてたのかい？」

どうやら僕が部屋に入ったのに誰も気付かなかったらしい。

……もしかして、僕って影薄いのかな？

軽くヘコみながら、報告する。

「タバサは『構わない』って言ってましたよ？」

「そうか！それは良かった。ひょっとしたら、断られるんじゃない
かと心配してたんだよ」

そう言うと、ウェールズは心底嬉しそうに微笑んだ。

「但し、条件があります」

「それは……、一体なんなんだい？」

条件と聞き、神妙な顔付きになるウェールズ。

いつの間にかルイズとアンリエッタも不安そうな顔でこちらを見ている。

「その条件は“人の心を壊す水の秘薬の解毒方法を教えること”です。もし知らないのなら、全力で調査して下さい」

条件を聞き、目を丸くして驚いているウェールズ、アンリエッタ、ルイズの三人。

最も速く再起したのはウェールズだった。

「それは水の秘薬により、心を病んだ者が居ると判断してもいいのかな？」

「はい、そうです。これを条件に指定してきたということは、よっぽど大切な人だと思っています」

ていうか母親だけだね。

「……アン、調査を依頼しても構わないかな？」

今まで空気と化していたアンリエッタはウェールズの言葉に再起を果たす。

「わかりました。わたくしが全力をもって調査いたします」

「有り難う御座います」

僕はアンリエッタに頭を下げる。すると、ルイズが言った。

「なんでアンタが礼言うのよ。それはタバサのセリフでしょ？」

「何言ってるんだよルイズ、タバサは僕達の大切な“仲間”だ。その“仲間”を助けてくれるって言うんだから、僕が礼を言うのは当然だろう？」

ホント、何言ってるんだろねルイズは……。こんな考えるまでもないことなのに。

しかしルイズは、複雑な表情をしたままだった。

ルイズから何も反応がないので放っておくことにした。

「ケント君、礼で思い出したんだが、君に渡したい物がある。……受け取ってくれないか」

ウエルズが指輪を差し出した。

これは！？いや、まさか、そんな！？

「どうかしたのかね」

僕が何時まで経っても反応しないので、怪訝に思ったのか、ウエルズが心配そうに顔を覗き込んできた。

「……すみませんウエルズさん、まさかウエルズさんが同性愛者だとは思わなくて……」

「……ちょっと待ちたまえ、今、『同性愛者』と言ったのかい？」

「すみません……。僕にその気は無いので諦めてくれませんか？」

「僕にだってないわ！！それとその二人！何故に顔を赤らめているんだ！？おかしいだろ！？」

「安心して下さい、冗談ですから」

言いつつ、横目でルイズ達を見る。

そこにはウェールズの言った通り、顔を赤らめている二人の少女がいた。

何で顔を赤くしているんだろう？……………もしかして、僕とウェールズさんの絡み妄想したのか！？

などとバカな考えは削除しながら『風のルビー』を頂く。

これが風のルビーか……。綺麗だな。流石は王家に伝わる秘宝だ。

「有り難う御座いますウェールズさん。大切にしますね？」

「あ、ああ、それは良いんだが……………、もうあんな心臓に悪い冗談を言うのは止めてくれないか？」

「考えておきます」

王族らしからぬ言葉を使って狼狽していたウェールズさんは見てて面白かったし、また弄って遊ぶことにしよう。

アンリエッタへの報告も済み、魔法学院に向かう途中なのだが……………、また問題が発生した。

画面の前の皆さんも大体想像はついているだろう。そう、我らがツンデレマスター・ルイズである。

王宮を後にした時から、何故か不機嫌そうにしているのだ。

まったくもって面倒臭い。主人のメンタルケアまでやってられるか！ルイズがそんな調子なので、僕も多少なりともやさぐれてしまうのは、仕方がないことだと思う。

「ねえ？結局どんな任務だったの？教えなさいよ」

だが、幾らルイズが不機嫌そうに見えても、キュルケはそれを意にも介さない。ある意味凄いと感心してしまう。

ギーシュはとぼつちりをうけないよう、離れている。

空気の読めないバカなヤツだと思ってたけど、存外、学習能力はあるみたいだな。

「タバサ、姫様とウェールズさんが水の秘薬の解毒方法、調査してくれるってさ」

「そう……」

どちらにせよ、僕にはどうでもいいことだ。

なので、タバサとお喋りすることにした。

タバサと一緒にいると和むので、今の荒んだ僕の中には丁度いい。

「解毒方法、見つかるといいね」

「そう……」

某ファーストチルドレンのような返事しか返ってこないが、それがタバサらしい。

そのままお互い黙り込み、前を見る。

周りの景色が流れていく様は、とても清々しい気分にさせてくれる。後ろで喧嘩を始めたルイズとキュルケの怒鳴り声を聞きながら、僕は突然襲ってきた睡魔に身を委ねるのであった。

第十八話

アルビオンから帰ってきた翌朝、原作ではルイズがサイトに優しくなる時期だが、僕に対しても優しくなっていた。
というかまんま原作通りっぽい感じだったので、ここでは割愛させてもらう。

問題なのは、その次の日の夜のことだった……。

「ふう。気持ちいい」

「気持ち良さげだな。相棒」

「うん。気持ちいいよ」

さて、画面の前の皆さんは、今僕が何をしているかお気付きだろうか。

分からない人の為にヒントをあげよう。

一日一回は入らないと不潔な人だと思われるしまうような行為だ。
基本的には夜に行われる。人によつては朝に行なうこともある。

もう分かったと思うが、一応正解を言っておこう。

正解は………お風呂だ。

投影を駆使して創った風呂釜を魔法で生み出したお湯で満たし、更に魔法で温度を一定に保っているのだ。

僕はいつも、屋上にこの風呂を設置し、結界で風が入ってこないようにしてある。

………そこ！能力の無駄使いとか言わない！！

「なあ相棒、何時も思っただけどよ、なんで相棒はあの娘っ子に手え出さねえんだ？」

「そりゃ出す訳ないだろ。ルイズは僕の好みじゃないし」

僕はツンデレよりクーデレ派だからなあ。

「そんなもんか？」

「そんなもんだよ」

デルフとの会話を切り上げ、夜空を眺める。そこには蒼く輝く双月が、僕を照らしていた。

「……いい月だ」

「私も……そう思う」

……誰？いや分かってる、分かってるよ？こんな喋り方するのは僕の思い付く限りでは一人しか居ないし……。でもね、分かっているにしても否定したいことだってあるんだよ。認めたくないことだってあるんだよ……。

「デルフ……今、何か言った？」

「俺は何も言っただけだよ相棒。“俺は”何も言っただけだよ」

あくまでも“俺は”なんだね……。しょうがない。何時までも逃避してないで、いい加減……現実と向き合うことにしよう。

「タバサ、何でいるの？」

疑問の言葉と共に振り返る。そこには二つの月に照らされ、より美しく見える空色の髪を持つ、赤い眼鏡をかけた少女……。タバサがいた。

「貴方が、上がって行くのが見えたから……」

「気になってついて来たってこと？」

タバサはこくりと頷く。

「ご覧のとおり、お風呂に入ってるだけなんだけど……」

「……これが？」

「貴族用の大浴場に比べたらショボいけどね」

「そう……」

むう……。タバサとの会話はよく途絶えるなあ。流暢に話すタバサなんて想像もできないけど……。

まあタバサとの間に出来る沈黙は、嫌いじゃないから別に良いんだけどね。

「どうしてこんな所にお風呂を？」

「此所が一番人が来ない所だからだよ。タバサだって人前で裸になつてお風呂に入りたくないだろ？」

タバサはこくりと頷いた。

「因みに、これは僕の国の昔のお風呂をベースに魔術で造ったんだ」

「本当？」

「うん。『五右衛門風呂』って言うんだ。本物は火を釜の底に当ててお湯を温めるんだ。で、そのまま入ると釜の底が熱くて火傷しちゃうから木の板を敷くんだ。これは魔術で生み出したお湯だから関係ないけどね」

最初の方は五右衛門風呂を使ってたけど、いちいち薪をくべるのが面倒だったので、こういう方法に変えたのだ。

「私も入ってもいい？」

「……………今、ナンとオッシャイマシタカ？コノお嬢サンは。」

「私も入れて欲しい」

「何故に！？」

「貴方の作ったお風呂に興味がある」

「えーっと……………」

ここはどう答えるべきなのだろうか？

「…………ハッ！？そうだ！これならイケるかも！！」

「僕はもう出るから、その後に入りなよ」

「イヤ」

「なんでさ!？」

即答されたので、つい士郎君の口癖が出てしまった。

「タバサ、僕はそろそろ出ないとのぼせそうなんだ。だから僕が出た後に入ってくれないかな？」

「……………分かった」

何なんだこの間は…………？別にどうでもいいけど…………。

「タバサ、あっち向いてて」

僕はタバサが後ろを向いたのを確認してから風呂釜から出た。タオルで体を拭き、服を着る。

「それじゃ、僕はもう行くよ。お風呂は後一時間くらいで消えるから、後片付けはしなくていい。後、このタオルも上げるから使つて？それもその内消えるから」

僕は投影したタオルをタバサに手渡す。

「おやすみ、タバサ」

「…………おやすみなさい」

若干間をおいて返事をしたタバサに軽く苦笑しながら、屋上を後にした。

「……………相棒、俺を忘れて行きやがった……………」

屋上に忘れられてしまったデルフは落ち込んでしまった。

最近空気になることが多かったからだろうか？

タバサはそんなデルフを一瞥したが、特に興味がなかったのだからと服を脱ぎ、ケントお手製の風呂に入った。

「……………ふう」

何時も無表情なタバサでも、風呂に入ると顔が緩むようだ。もっとも、この表情を誰かに見られても誰もその変化には気付かないだろうが……………。

「嬢ちゃん、何時も思っただが……………、あの小僧と話す時だけ楽しそうだな」

タバサと空気になってしまったデルフ以外、誰もいない筈の屋上に声が響いた。

その声はタバサが脱いだ服の置いてある辺りから聞こえてくるようだ。

タバサは服の下からナイフを取り出す。

「オメエ、同類か」

「その通りだよ、ご同輩」

どうやらこのナイフ、デルフと同じインテリジェンスソードのようだ。

「俺はデルフリンガーだ。お前さんの銘は？」

「俺はシエルンノスだ。しかし……………」

急に口ごもるシエルンノス。

「どうした？」

「いや何か……。聞いたことある気がするんだよな。デルフリンガーって」

「奇遇だな！俺もだ！」

「おお！そうなのか！しかし思い出せねえ……………」

「まあ気にすんなよ。俺も思い出せねえし、その内思い出すだろ」

「それもそうだな」

デルフの適当な言葉に納得するシエルンノス。何年も生きていると細かいことは気にしなくなるのがデフォルトなのだろうか？

剣同士気が合ったのか、タバサを無視して喋り続けた。

剣が喋っているだけでもシニールなのに、二本の剣がお喋りしてい

るシーンもかなりシユールだ。というか正直言っただけかなり不気味だ。もし誰かがこの場に居たならば、大層気味悪がったことだろう。だが、今ここに居るのはタバサのみ、この程度のことでは動じない。というか考え事をしているようだ。

「……………」

シエルの言ったあの科白。小僧というのは彼……ケントのことだろう。問題なのは、『楽しそうだな』というところだ。

私は、彼が側に居る時、楽しいのだろうか？楽しそうに見えているのだろうか？

私は……、何故、彼の側に居たいと思っているのだろうか……？そもそも、私は彼の側に居たいと思っているのだろうか？

次々と浮かんでくる疑念に対して、自問自答するタバサであった。

屋上から帰る途中、ルイズの部屋がある階まで降りて来て漸くデルフが居ないことに気付いた僕は、再び屋上まで来ていた。

何処かのラブコメの様に、ドアを開けたら美少女の着替え中だった……、などということはなく、既に服を着ていたタバサからデルフを受け取る。その際、デルフがグチグチと何か言っていた気がするが、鞘に納めて黙らせる。タバサも少し様子がおかしかった気がするが、気の所為だろう。

こうして、いつもより遅い時間になってしまったが、ルイズの部屋に戻ってきたのである。

「随分遅かったわね。何してたの？」

開口一口目でそれですか……。いや、別にいいんだけどね。いつもより遅い時間なんだから、不審に思うのは普通だし……。けどね、もう少し言い方があると思うんだよね。そんないかにも『わたし、不機嫌です！』と公言しているかの様な態度と声音されたら僕だって困るんだよ……。

「お風呂に入ってたんだ」

「お風呂に入るだけでこんなに遅くなる訳ないじゃない！」

「忘れ物したんだよ」

「……………そう、まあいいわ」

あれ？もつと何か言われると思ってたのにあっさり引き下がるんだな。

少々拍子抜けしてしまった。

「それじゃ、僕はもう寝るから」

僕は布団を投影する。

ルイズはもう、投影魔術を見ても驚かなくなった。ちょっと淋しい。さっさと寝ようと横になると、枕が飛んできた。

「どうかした？」

「その枕持ってきたさい。昨日、ベッドで寝ていいって言ったじゃ

ない。ばか」

そうなのだ。昨晚、僕はルイズと一緒に寝た。断ろうと思ったけど、ルイズが泣きそうだったから仕方なく一緒に寝たのだ。

原作と同じ質問もされた。特筆すべきことでもないので省略した。このシーンは想像で補って欲しい。別に書くのが面倒だった訳ではない。断じてない。ないっただけなのだ。

「早く来なさい」

「はいはい……」

ルイズが催促してくるので、苦笑しながらベッドに潜り込む。

「昨日も思ってたけど、誰かと一緒に寝るなんて久し振りだな」

「あんた……、誰かと一緒に寝たことあるの？」

「二つ下の妹がね、よく『一緒に寝てもいい？』って言いながら勝手にベッドに潜り込んできてたんだ……」

ホント、由衣は甘えん坊だったからなあ……。怖い話とかした日には必ず一緒に寝てたし。

「あんた、妹さんと逢いたくないの？」

「逢いたくても逢えないよ……」

「どうして？」

「もう……死んでるから」

「え？」

ルイズは目を丸くして驚いている。

「言ってなかったっけ……。三年前にちょっとした事故があつてね。その時に僕の家族は皆死んじゃったんだ……」

「その……、ごめんなさい……」

「謝ることないよ。もう三年も前の話だよ？とつくの昔に吹っ切ってる」

僕が笑いながらそう言うと、ルイズは悲しそうに目を伏せた。

「ケントが元の世界に帰りたがらない理由って……」

「家族が居ないから、だろうね。それ以外にも色々あるけど、一番は多分これだね」

「……………友達とか恋人とか居なかったの？」

「友達は居るけど、そんなに親しい訳じゃないし、恋人だって居ないよ」

「というか、そもそも僕は恋すらしたことないしね。」

「だから、僕はルイズの使い魔として、この世界で暮らしていく……。今の僕の居場所は此処だけだから……」

なんか柄にもなく湿っぽい話をしてしまった。恥ずかしい……。横を見ると、ルイズは声もなく泣いていた。だが、三十分も経つと泣き疲れたのか寝てしまった。僕はやることもないので、さっさと寝ることにした。

ルイズの部屋の窓の外では、キュルケがぶかぶかと浮いていた。恐らく『フライ』の魔法で浮かんでいるのだろう。

「ホント、随分仲良くなってるみたいね……」

キュルケはつまらなそうに呟いた。

割とシリアスな展開だったが、キュルケはそんなの関係ねえ！とばかりにケントとルイズの仲の良さに驚いていた。

「それにタバサのこともあるし……、どうしようかしら？」

キュルケは呟きながら自分の部屋に戻り、ベッドに寝転がる。

「タバサが珍しく興味を持ってるみたいだし……、今回は諦めようかしら？」

キュルケは、相手にとって一番大切なモノは奪わないことを信条としている。

大切な友人である二人の為に、今回は手を退くことにしたのだ。

「そうと決まれば少しは作戦でも練ろうかしら？ ケントって以外とモテるし……、陰謀は得意じゃないけど………」

今キュルケが言った様に、ケントはモテる。以前ギーシュと決闘し、圧勝したことにより、シエスタは勿論のこと、他のメイド達にも惚れられている。

そして、最近では貴族達……、つまり女生徒にもモテ始めているのだ。以前は平民であるケントには見向きもしなかったが、フーケのゴーレムを倒したのがルイズの使い魔だという噂が流れてから、ケントを見る目が変わったのだ。しかも、ケントは見た目もよく、性格も温厚だったのがそれに拍車を掛けている。

しかし、ケントはそれに気付いていない。せいぜい、自分に向けられる視線が否定的な物じゃなくなっただけ、ぐらいのモノである。

「せめてあの二人以外、近付かない様にしなくちゃね」

キュルケはこれからどうするか考えながら、眠りにつくのであった。

第十九話

僕達がアルビオンから帰ってきて十日、僕の生活サイクルが変わった。

まず食事は食堂でルイズ、キュルケ、タバサ、ギーシュの四人ととるようになった。

次に授業に出なくなった。ルイズが『あんた授業中寝てばっかなんだから、まともに受けたくなったら時だけ来なさい』と言われたからだ。

最後に、何故か男子生徒から決闘を申し込まれるようになったことである。

負けたり、怪我を負うこともないので実害はないが、何故彼らは立ち向かってくるんだろうか？ 凄く不思議だ……。

何か『貴様を倒してあの子の心を射止めるんだ！』と訳の分からんことを叫びながら挑んでくるのだ。

まあ、いい退屈しのぎにはなるんだけどね。

そんなこんなで、今日の僕は授業に出ずに、ルイズの部屋で読書に勤しんでいる。因みに、この世界の本ではない。

もう忘れている方も多だろうが、僕には神様から贈られてきたボストンバッグがある。その中には着替えや歯ブラシ等のお泊りセットだけでなく、僕が生前読んでいた小説や単行本が大量に収納されていたのだ。

もう読めないと思っていたのでかなり嬉しい。

うん、相変わらず上条君の不幸ぶりは常軌を逸しているね。よくピンポイントでスプリングラーが作動するもんだ。

今読んでいたライトノベルも読み終わったので次はマンガを読むことにした。

久し振りに読むなあ、これ。というかゴンの嗅覚マジですげー。犬並みってどんだけ凄いの？ そういえば、これ連載再開したのかな？

せめて完結するまでは生きていたかった。

「おい、相棒」

「どうしたの？デルフ」

そのまま読み進めていると、デルフが話しかけてきた。

まったく、今良い所だったのに…………。

そう愚痴りながら、今何時なのか気になったので腕時計（元の世界から持ってきたソーラー電池仕様）を見る。………… 昼休みの時間になっていた。

いつの間にお昼過ぎてたんだ？うゝん…………、本を読むと時間を忘れる癖は改善しないとな。

「客が来てるぞ」

「客？」

誰だろう？ルイズなら普通に入ってくるだろうし、キュルケかタバサかな？それとも他の生徒か教師、後は………… 使用人くらいか…………。僕は扉の向こうにいる人物を推理しながら、客を招き入れた。

一方その頃、東の広場、通称『アウストリ』の広場では、ルイズがベンチに腰掛け、編み物をしていた。

ルイズはセーターを編んでいるつもりなのだが、どうやらルイズに

は編み物の才能がなかったらしく、どう見てもセーターには見えな
い。よく言ってもセーターっぱいなかである。悪く言えば、まあ、
その………なんだ………、ヒトデ？のようにも見えなくもないナニカ
だ。

セーターを編んでいるつもり of ルイズは、手を休め、結婚式の詔を
考えた。しかし、何も思い浮かばなかったのか、白紙のページが延
々と続く『始祖の祈祷書』を閉じ、また編み物に取り掛かった。
昼休みになってから、ずっとこの調子である。

だが、ルイズはもう編み物は諦めたようだ。奇怪なナニカを編むの
を止めて、ただそれを見詰め、溜め息を吐いた。どうやら、編み物
一つ出来ない自分に軽く鬱に入ったようだ。

だからだろうか、後ろから近づく人物に気付かなかったのは………。

「ルイズ、何してるの？」

聞き慣れた忌々しい声が聞こえたのと同時に、ルイズは凄まじい速
さで傍らに置いてあった始祖の祈祷書で『作品』を隠した。光の速
さとは、このことをいうのだろうか？

「み、見ればわかるでしょ。読書よ、読書」

ルイズは何事もなかったかのように、しかし、少々どもりながら答
えた。

すると、先程の声の主、キュルケがルイズの隣りに座り、言った。

「でも、その本真っ白じゃないの」

「これは『始祖の祈祷書』っていう国宝の本なのよ」

「何でそんな国宝を貴女が持つてるの？」

ルイズは、自分がアンリエッタの結婚式で詔を詠みあげること。その際、この『始祖の祈祷書』を用いること等を説明した。

「なるほど。その王女の結婚式と、この前のアルビオン行きて関係してるんでしょ？」

これって頷いていいのかしら？とルイズはちょっと悩んだが、今自分が言い淀んでいる時点で肯定している様なものだという事に気づき、頷いた。

「あたしたちは、王女の結婚が行われる為に、危険を冒したってわけなのねえ。名誉な任務じゃないの。つまり、それってこないだ発表されたトリステインとゲルマニアの同盟が絡んでるんでしょ？」

名推理である。キュルケは探偵になれるかもしれない。

「誰にも言っちゃダメなんだからね」

「言うわけじゃない。あたしはギーシュみたいにおしゃべりじゃないもの。ところで、二人の祖国は同盟国になったのよ？あたしたちもこれからは仲良くしなくっちゃ。ねえ、ラ・ヴァリエール」

「ま、まあ、ツエルプストーがどうしてもって言うなら仲良くしてあげてもいいわよ」

キュルケは目を丸くしてルイズを見た。

まるで、新種の動物でも発見したかの様な顔である。

まあ、プライドが高く、必要以上に自分のことは敵視していた相手がいきなり殊勝なことを言ってきたのだから、当然の反応と言える

だろう。

「な、何よ！何か文句でもあるの！！」

キュルケが無言で凝視してくるものだから、ルイズも少し焦った様に怒鳴った。

傍から見ると、完全に照れ隠しである。その証拠に顔が少し赤くなっている。

「ルイズ、貴女……、本当に可愛いわね」

キュルケは、それはもう心の底からそう思った。この子ったら抱き締めてあげたくなるくらい可愛いわね。ていうかホントに抱き締めちゃおうかしら？とも思った。

「な、なによいきなり……。言っとくけど、わたしにそんな趣味はないわよ？」

「あら、失礼ね。あたしにもないわよ」

キュルケに『可愛い』と言われ、もしかしたらキュルケにはそっちの趣味があるのかと思っただが、キュルケが即答してくれたおかげで安心することが出来た。

もし、即答せずに言い淀んでいたら……、そう考えるとゾツとしないわね……。

と、もしもの話で身震いした。

「ねえルイズ？今、なにか失礼なこと考えなかった？」

「な、なに言ってるのよ！べ、別に何も考えてないわよ！」

「ふうん……。ま、いいわ。そういうことにしておいてあげる」

ルイズは、ほっと安堵の息を吐いた。あのまま追求されていたら、ぼろっと何を考えていたか喋っていたかもしれない。

「で、さっきまで何を編んでいたの？」

……安心するのはまだ速かった様だ。

顔が熱い。自分の顔は、今頃真っ赤に染まっていることだろう。

「な、何も編んでなんかいないわ」

「編んでた。ほら、ここでしょ？」

キュルケは、始祖の祈祷書の下に隠してあったセーター？を取り出した。

「か、返しなさいよ！」

ルイズは取り返そうとしたが、身長差がある為、手が届かず、その上押さえ付けられてしまった。

「こ、これなに？」

と半ば呆然としながら、ルイズの編んだセーター？を見つめた。

「セ、セーターよ」

「セーター？ヒトデのぬいぐるみにしか見えないわ。それも新種の」

「そんなの編むわけじゃないじゃないの！」

ルイズはやつとの思いで、キュルケの手から編み物を取り返すことに成功した。

「あなた、セーターなんか編んでどうする気？」

「あんたに関係ないじゃない」

「いいのよルイズ。あたしはわかってるわ」

キュルケはイヤらしい笑みを浮かべながら、ルイズに顔を近付けた。

「ケントになにか編んでいるんでしょう？」

「あ、編んでないわよ！ばかね！」

顔を赤くして怒鳴っても逆効果にしかならないことに、ルイズは気付かない。

「あなたってほんとにわかりやすいのね。好きになっちゃったの？
どうして？」

キュルケは楽しそうに尋ねた。

「す、好きなんかじゃないわ。好きなのはあんたでしょ。あんなバカ
カのどこがいいのかしんないけど」

嘘である。ルイズはケントの良い所も悪い所もそれなりに見てきた。だからルイズは、ケントのことを好きになった。その“好き”が恋愛か親愛かは定かではないが……。

「あのねルイズ。あなたって嘘つくとき、耳たぶが震えるの。知ってた？」

ルイズははっとして耳たぶを摘んだ。しかし、すぐにキュルケの嘘に気付いたので慌てて手を降ろした。

この場合、キュルケの嘘に騙されるルイズが単純なのか、即興の嘘でルイズを騙したキュルケが凄いのか、判断に悩むところである。

「と、とにかく、あんたなんかにあげないんだから。ケントはわたしの使い魔なんだからね」

「独占欲が強いのはいいけれど、あなたが今心配するのは、あたしじゃなくってよ？」

「どついう意味よ」

「ほら……、なんだっけ。あの、厨房のメイド」

本当はもつといるんだけどね。と思ったが口には出さない。

ルイズの吊り上がった目を見て、必要以上の情報与えるのは危険だと思ったからだ。主にケントの身が。

「あら？心当たりがあるの？」

「べ、別に……」

「今、部屋に行ったら、面白いものが見られるかもよ?」

ルイズは凄い勢いで立ち上がった。

「好きでもなんでもないんじゃないの?」

キュルケは楽しげな声で言った。するとルイズは、

「わ、忘れ物取りに行くだけよ!」

と怒鳴り、駆け出した。

「美味しいですか?」

「うん、美味しいよ」

「そ、そうですか?なら、たくさん食べて下さいね」

今僕の目の前には、たくさんの料理が小さなテーブルの上に所狭しと並べられている。

多分、僕一人では食べ切れない。というか、全部食べられるのは某食いしん王くらいだろう。

何故こんな状況になっているのかだって?わかるだろう?あの時、扉を開けた先にはシエスタがいて、最近厨房にこない僕のこと心配して料理を持って来てくれたんだ。NOと言えない日本人である僕は断れなかったんだ。この先の展開も覚えてるけど断れなかったん

だ。大事なことから二回言いました。

だって『要らない』って言おうとしたら、悲しそうな顔するんだもん。断れないよ……。

「あの、どうかしました？」

「え？ な、なんでもないよ。ちょっと考え事してただけだから」

お腹は空いていたとはいえ、流石に苦しくなってきた。

『お腹いっぱいだからもう要らない』なんて絶対に言えない。既に満腹になっていることをシエスタに悟らせない様に気をつけないとね……。

そう思い、シエスタが不審に思わない様に絶え間なく料理を口にする。その結果、シエスタが話しかけてきても、生返事になったり脊髄反射でこたえてしまうのは、しょうがないことだと思う。

気がつくと、テーブルの上には大量の皿が重ねられていた。

ふ、ふははははははは！！勝った！僕は永く苦しい戦いに勝ったんだ！！

無心になって食べ続けて良かったあ……。もう、思い遣すことは……
……なにも……ない……。

……ハ！いかん！一瞬、意識が飛んでた。死んだ父さんと母さんが川の向こうで手振ってたし、ヤバイヤバイ。
深呼吸をして心を落ち着かせる。

……ふ。少し吐きそうだけど、だいぶ楽になったな。

シエスタはどうしたんだろう？

腹ごなしも兼ねて、立ち上がり、シエスタの方を見ると……………、何故かブラウスをはだけさせた黒髪メイドがそこにいた。

あれ？もしかして……………、このイベントから僕は逃げられないの？

何を思ったのか、シエスタが突っ込んでくる。避けようと思ったが、お腹が苦しくて思う様に体が動かなかった。

そして、僕はベッドに押し倒された。

……………え？これヤバくね？

「シ、シエスタ？な、なにを……………」

「あ、安心してください。責任とれなんて言いませんから」

いやいやいや！そういう問題じゃないから！

そう思い、口を開こうとした時、ボタン！という音がした。

……………終わった。

音のした方向を見ると、そこには……………、般若がいた。正確には鬼の様な形相をしたルイズなんだけどね。

どちらにせよ、僕は世界の修正力とやらには勝てないらしい……………。

シエスタは慌てて立ち上がり、ブラウスのボタンを付け直し、ルイズに頭を下げて部屋を出た。

腹が苦しかったが僕もなんとか立ち上がり、その後くる衝撃に備えた。

すると、ルイズは実にいい笑顔を浮かべながらこちらに近付いてきた。

あ、死ぬかも。と思う程の凄まじい黒いオーラ放っているマイ・マスター！。

な、なんだか身体が動かないよ？これが金縛りというヤツかな？アハハハ……………、初めて知ったよ。

「死ね」

という短い言葉と共に、ルイズの杖から爆発魔法が放たれたところで、僕の意識は途絶えたのだった。

第二十話

目を覚ますと、僕はルイズの部屋の前に放り出されていた。そして近くには僕の荷物が置かれていた。

まったく、ルイズの早とちりにも困ったもんだ。まあいつか。いい機会だし、キュルケが竜の羽衣の地図を持ってくるまで自由を満喫することにしよう。

いや、今から僕一人でタルブ村に取りに行くのも良いかもしれない。

「おい、相棒」

「どうかしたの？デルフ」

「貴族の娘っ子からの伝言だ。『あんたなんかクビよ！クビ！』だつてよ」

やっぱり予想通り、いや、ここは原作通りと言った方が正しいか……。
まあそんなことはどうでもいいか。

「これからどうすんだ？相棒」

「そうだね。取り敢えず……」

「取り敢えず？」

「住むところでも探すさ」

「はあ……。相棒はどんな時でも呑気だねえ……」

なんだかそこはかたなく馬鹿にされた気がする。戻って来た時、まだルイズが怒ってる可能性が高いんだから、住居の確保はしておくべきだと思うのは、間違ったことなのだろうか？

疑問に思ったが、口には出さないでおく。

そうだ！タルブ村に行くにしても住居の確保にしてもオールド・オスマンに言えば良いんだ！

そのことに気付いた僕は、意気揚々と学院長の下へ向かった。

「と言う訳で、外出許可と仮の住居の手配をお願い出来ますか？」

「何が』と言う訳で』なのかはさっぱり解らんが、まあいいじやろ」

学院長は随分あっさりと許可を出してくれた。

「確か、職員寮に空きがあつた筈じゃ。そこに住むとええ。場所はコルベール君にでも訊きなさい」

「有り難う御座います」

「で、外出許可と言ったが……、何処に行くつもりじゃ？流石に国外は無理じゃぞ？」

「行きませんよ、ちょっとした小旅行の様なものですから」

最低でも、姫様の結婚式が始まる三日くらい前には帰るつもりだし、そもそも国外に行く意味は余り無いし……。といっても興味が無い訳じゃないんだけどね。

「タルブ村には『竜の羽衣』というマジックアイテムがあると聞きまして……………」

「ほう……………、何故それを？」

学院長が目を細めてこちらを見てくる。なんだか品定めされてるみたいで気持ち悪い。

「少し前に誰かが話していたのを小耳に挟みまして、気になったのでいろいろ調べてみたんです。そしたら……………」

何かこの世界に来てから嘘がすらすらと出てくる様になったなあ……………。純粹だったあの頃が懐かしい……………。
と昔の自分を懐かしみながらも続きを話す。

「その『竜の羽衣』が僕の世界の物かもしれないということが解ったんです」

「なんじゃと!？」

学院長が目を見開き、驚愕した。そんなに驚くことだろうかと思ったり思わなかったりして。

「それは本当なんじゃろうな」

「それは実物を見てみないとほんと……………」

「むう……………」

学院長は眉間に皺を寄せて考え込んでいる。でも、元から皺だらけだから本当に眉間に皺を寄せているかどうか見分けがつかない。

「今何か失礼なことを考えなかったかの？」

「あははは……。そんなこと考えるワケないじゃないですか。何言ってるんですかもう」

なかなか鋭いジジイだと思ったのは胸の内に仕舞っておこう。

「まあよい。それでは言ってくるの良い」

「え？許可証とか要らないんですか？」

「良いんじゃないよ。お主は学院の生徒ではないからの。これから何かあつたらわしに言いなさい。なるべく力になるからの」

「有り難う御座います！いや、只のエロジジイじゃなかったんですね！助かります」

「……………今のは聞かんかったことにするから、はよう行きなさい」

「？はい、失礼します」

最後の言葉の意味がよくわからなかったが、取り敢えず職員寮に行くことにした。

職員寮に行く途中、女子寮のある方角から出て来たキュルケと会った。

「あら？ケントじゃない。どうしたの？こんなところで」

「いや、実はルイズに追い出されちゃって……」

「なにそれ？どういうこと？」

僕はさっきルイズの部屋でおきたことを話した。……自分は被害者であることを解らせる為に。

「つまり、ケントが大量の料理を気合いと根性で完食した後、そのシエスタっていうメイドがなんだかよくわからない内にブラウスのボタンを外して体当たりしてきて、満腹で動けなかったケントはその勢いで後ろにあったベッドに押し倒されたところで、ルイズが部屋に入って来て、その状態を見たルイズはケントとメイドが抱き合っていると誤解し、ケントは爆破されたと……。これであってる？」

「あってる」

テストだったら百店満点だ。

「……これってあたしの所為？」

「何か言った？」

「う、ううん。何でもない」

「？そう」

何かぼそつと言ったみたいだけど、聞き取れなかった。しかも気まずそうに顔を背けてるし……。……。ああそうか！確かあのイベントは中庭で編み物をしていたルイズをキュルケが焚き付けたことでおこるんだっけ。……。コイツノセイカ！！

おっと、怒りの余り片仮名になってしまった。少し落ち着こう。

「それで、せっかくだから旅に出ようと思って」

「旅？」

「うん。まあ旅って言ってもそんなに長い間出掛ける訳じゃないけどな。一週間くらいで戻るさ。その頃にはルイズの機嫌も治って……。治つてると良いなあ……。」

自分でも希望的観測でしかないことはわかってはいるんだけど……。願わずにはいられないのが人の性という奴なんだよね。と黄昏てみたりする。

「と、ところで、何処に行くの？行き先くらい決めてあるんでしょ？」

キュルケは、僕が遠い目をしているのに気付き、焦った様に質問してきた。

「タルブ村に行くつもり」

「タルブ村？」

「うん。そこにある『竜の羽衣』っていう秘宝が僕の世界の物である可能性があるんだ」

「え！？それほんと！？」

「ほんと」

この話をするのと皆驚くよね。そんなに驚く様なことなのかな？

「それじゃ、僕はもう行くよ。それから、ルイズを宿めるのはキユルケに任せるから、じゃあね！」

後ろで『ち、ちょっと待ちなさいよ！』とか聞こえてきた気がしたけど、気の所為だろう。……あのイベントを発生させた仕返しじゃないからね？ホントだよ？

あの後、無事にコルベールを発見し、空き部屋の確認をして、さて……、そろそろ行くかと思ったら、コルベールから『よければ、馬を連れていくといい』という有り難いお言葉を頂戴し、馬を一頭貸してもらった。

いや、コルベールも役に立つよね。これからも利用させてもらお

う。ふっふっふ。

いつの間にか黒い笑みを浮かべてしまった所為か、デルフと馬に若干引かれてしまったのは些細なことだと思いたい。

まあそんな訳で、僕はデルフと馬一頭を引き連れて旅に出たのだが……、早速問題が発生した。それは……道がわからないということだ！

「むう……。地図を借りればよかった……」

「相棒は意外と抜けてんだな」

「うぐう……」

僕だって好きで迷子になったワケじゃないのに……。

次、遠出することがあったら地図を忘れない様にしよう！

「これからどうすんだよ、相棒」

「どうすれば良いんだろうね……」

言い忘れていたが、ここは鬱蒼とした木々が生い茂る森の中……。

正直言つて、この森から出られる気がしない。

「はあ……」

「あ、相棒、元気出せよ！……そうだ！歌でも歌ったらどうだ？少しは気が紛れるだろ」

鬱になった僕を見て、慌てて元気付けようとするデルフ。僕もこのまま落ち込んでても意味ないなと思っていたので、何か歌ってみよ

うかな？という気分になった。

けど……、何を歌おうか？……森、そう、ここは森だ。なら、森に係する歌にしよう！……あれ？『森のくまさん』しか思い浮かばない……。まあいいか。どうせ僕達以外、誰もいないんだし……。

「あるゝ日ゝ森の中ゝくまさんにゝであゝったゝ」

……あれ？続きなんだっけ？ええい！もう一度だ！

「あるゝ日ゝ森の中ゝ山賊にゝであゝったゝ」

……あれ？歌詞おかしくね？

「間違つてねえから戻つてこいよ、相棒」

僕の目の前にはありがちな格好をした山賊が十人……。くまさんじゃなくて山賊さんに出会ってしまった。

……え？マジで？

僕が軽く放心していると、下卑た笑みを浮かべた山賊Aが話しかけてきた。

「へっへっ。おい坊主！有り金全部置いてきな！！」

なんという決まり文句！何となく感動した！すると、隣りにいた山賊Bも話しかけてきた。

「後、荷物と坊主の着てる服もなあ！」

「くっくっく。そりゃあ良い！結構な値で売れるだろうな！」

「いやいや！コイツを貴族に売っちゃまうのもいいんじゃないか？」

「……がっはっはっは……！！！！」

それに便乗して山賊C、Dが発言する。そして大笑いするその他大勢………。殺るか。

久し振りにハルバートを手に取る。

「お！このガキ俺ら相手にヤル気だぜ？」

「げひゃひゃひゃひゃ！イイ度胸じゃねえか！おい野郎ども！！」

「……おう！！！！」

「このガキに“恐怖”ってヤツを教えてやんな！！」

「……応！！！！」

山賊A（恐らく首領）の言葉に声を揃えて返事をする山賊B………。

僕は早速襲いかかってきた二人の攻撃を一步後ろに下がることで躲し、ハルバートを横に薙払う。

二人は吹っ飛んで木に叩き付けられた。起き上がってくる気配はない。どうやら死んでしまった様だ。ていうかアレで死ななかったら人間じゃない。

「こ、このガキ……。ぶっ殺してやる！！」

他の山賊どもは怒り心頭。血走った目でこちらを睨み付けてくる。

「さて、僕に“恐怖”とやらを教えてくれる代わりに、お前達には“死”を与えてあげるよ」

死は誰にでも平等に訪れる……。だが、この山賊どもは人の命を弄ぶクズだ。容赦はしない。

「左手に魔力、右手に気」

人を殺す覚悟なら、この世界で生きることを決意した時からしている……。

「合成！」

けど……、それはしたつもりでしかない……。だから……

「咸卦法……！」

その“覚悟”を嘘にしない為にも……お前達には死んでもらう。

「ハアア！」

咸卦法により強化された肉体は疲れを知らず、ハルバートは山賊を武器ごと切り裂く……。

「な、ナンなんだよ！？ナンなんだよ！お前はあ……！」

気付けば、目の前で喚いている山賊A以外、全員殺していた様だ。

「クソ！イヤだ！死にたくない！死にたくない！」

「お前は、今までそうやって命乞いをした人達を生かしたことがあるのか？」

「ある！あるから助けてくれえ！！」

僕の問い掛けに狂った様に、何度も『助けてくれえ！』と叫ぶ山賊A。

「残念だけど、嘘つきは嫌いなんだ」

「ある！本当だ！信じてくれえ……………」

或いは、本当に生かしたことがあるのかも知れない……。だが、僕はコイツを殺す。ここでコイツを見逃せば、同じことを繰り返すかも知れないから……。

「死ね」

ハルバートを思い切り叩き付ける。殺し損ねないように、出来るだけ強く、念入りに……。

そうして、山賊Aは息絶えた。顔に恐怖と絶望の表情を張り付かせたまま……………。

「……………なあ、相棒」

「……………なに？」

ずっと、山賊Aの死体を凝視したまま動かない僕に、デルフが話しかけてきた。

「相棒は……人を殺すの……初めてか？」

「……………うん」

僕のいた世界……、というよりは、日本という平和な国で人を殺したことがある人間は珍しいと思う。僕のような学生が、もし『人を殺したことがあるんだ』等と言えば、間違なく中二病かと笑われるか、『頭……大丈夫？』と病院に連れていかれるだろう。……主に頭の。

「俺は剣だからよ、担い手である相棒の気持ちはわからねえ……」

それはそうだろう。というか、デルフが剣であるかどうかなんて関係ない。僕の気持ちは僕だけのものだ。他の誰にもわからないし、理解も共感も出来ない。……それこそ、家族でさえ不可能だ。

「けどよ。俺はいつだって相棒の味方だ」

誰も本当の意味で、誰かを理解することは出来ない……。けど、そう言ってくれるだけで、僕は嬉しかった。

「ありがとう。デルフ」

僕はデルフの……相棒の言葉に、感謝するのだった。

第二十一話

あれから、しばらく彷徨い続けた。それも一時間近く。よくまあ、それだけ迷い続けることが出来たなと自分自身に呆れながらも、なんとか森から出ることに成功した。

マジで良かった。下手したら野宿することになってたかもしれないし……。因みに、山賊達は埋めといた。あのまま放置しておくのは環境に悪いしね。その際、山賊達の財布や金目の物を取ったりしたが、些細なことだ。気にしない気にしない。

埋めるのには時間はかからなかった。魔法使えば一発だし。

「相棒、もう日暮れだ。早いとこ村でも見つけねえと、野宿することになっちまうよ」

「わかってるよ」

僕だって野宿は嫌だ。ちゃんとした所で寝たい。でも、村なんて影も形も見当たらない。このまま野宿なんて嫌だ！面倒臭すぎる。投影使えば寝床の確保なんて楽勝だが、面倒なものは面倒なのだ。

「相棒の面倒臭がりも筋金入りだねえ……」

「しみじみと言わないでよ。僕が悪いみたいく聞こえるから」

悪いのは僕じゃない。なかなか見つからない村が悪いのだ。まあそんなこと言っただって意味がないのはわかってるんだけどね……。しょうがない。本気で探すか。

「同調、開始」

強化魔術で視力を上げる。幸い、ここは見通しの良い一本道。三キロ先くらいなら余裕で見える筈だ。もし、これで見つからなかったら野宿するしかないけど…………。

「見えた！」

「お！そいつは良かったな、相棒！」

「うん！」

およそ四キロ先の地点に村があるのが見えた。これで野宿しなくてすむ。

僕は村まで馬を走らせた。

「のは良いんだけどね……………ここって宿屋あんの？」

そんな疑問を覚えてしまう程に、この村は寂れていた。馬を引いて歩き周るも、人の姿はない。

……………ゴーストタウンかここは……………。

思わずそう思ってしまうのも無理のない話だと思う。何せ、人がまったく出歩いていないのだ。

家の中に気配は感じるが、物音一つ聞こえてこない。だというのに、じっと僕を見詰める視線だけは感じるのだ。まるで……………、何かに見つかるのを恐れているかの様にひっそりと息を潜め、それでいて僕

を監視するかのごとく、じつとりと見詰めてくる……。正直言つて鬱陶しいことこの上ない。

何か嫌な感じがする……。これはさつさとこの村から出た方が良さそうだな。厄介事に巻き込まれそうだし……。

そう思い、馬に跨がり走らせようとした矢先、僕の下へ老人が十代半ば程の少女に連れられて近付いてきたのだ。

……これは今さら逃げられそうにないな。はあ……。

そう思い、僕は深い溜め息を吐いた。

その老人と少女に案内されたのは、この村ではそれなり大きいと思われる家だった。

「旅の御方、僕はこの村の村長を任せれておるガラハと言います。その娘は僕の孫のアーシアです。……ほれ、挨拶せんか！」

「あ、は、はい！あ、アーシアです！」

「僕の名前は健年です。好きに呼んで下さい。……それで、僕に何の用が？それでも先を急いでいるのですが……」

比較的丁寧な挨拶をした村長と、ぎこちない挨拶をした孫娘に、不機嫌オーラを撒き散らしながら、言外にさつさと言え的な返答をする。

「実はこの村には一月程前からオーク鬼の襲撃を受けておるのです。

これまでは村の若い者が武器を持ち、追いつめてはいるのですが……、それもいつまで保つか……、お願いです！この村を助けて下され！お礼なら、出来る限りのことはします！何卒、何卒お力添えを……」

村長は涙を流しながら土下座した。

まさにRPGに在りがちな展開だ。ファンタジーの基本でもある。

「あ、あの！あたしからもお願いします！あたしもおじいちゃんも、村のみんなもこの村が大好きなんです！！だから、だから……」

……泣き落としては、そうですね。なんていうか、かなり鬱陶しい。そこまで言われたら断れないじゃないか。ここでもし『だが断る！』なんて言ったら完全に悪者扱いされるじゃないか……。

「はあ……。わかりました。その依頼、お引き受けしましょう」

「そ、それは本当ですか！？」

「ええ。ここで断って、もしこの村が滅んでしまったら寝覚めが悪いからです」

「「ありがとうございます！！ありがとうございます！！」」

村長と孫娘が二人揃って泣きながら頭を下げる。

うーん。見事なシンクロ率だ。シンジ君とアスカにも見習ってほしいものだ。なんて馬鹿なこと思いつつ、結局厄介事から逃れられない運命にあるのかと、肩を落とした。

オーク鬼はこの村を出て少し歩いた所にある洞窟に住み着いているらしい。

洞窟にいるのなら火炎瓶でも投げ込んで出口塞げばいいのに……、
と思ったが、この世界に火炎瓶があるのかは甚だ疑問ではあるし、
出口を塞ぐと言ってもメイジでなくては簡単にはいかないだろう。
しかし、今思えば不自然なことが幾つもある。何故なら、オーク鬼
に襲撃されたというのに村には何処にも荒らされた形跡がないから
だ。

家屋も倒壊していないし、畑も無事に残っている。といつても作物
は殆ど無かったが……。

だが、その割りには怪我人が多かった。骨折している人もいたし、
重傷を負い、寝込んでいる人もいた。

これならオーク鬼にやられたと言えなくもないが、切り傷に痣や打
撲というのはどうだろうか？

オーク鬼が刃物を使うというのは考え難いが、人間の使っていた物
を奪い取ったと言われれば、それらしく聞こえる。

しかし、オーク鬼に襲われて痣や打撲といった軽傷で済むのか？

僕の記憶が正しければ、オーク鬼は一匹で訓練を受けた人間の戦士
五人に匹敵すると言われていた筈だ。そのオーク鬼に襲われたなら、
痣や打撲で済む筈がない。まあ、運が良かったと言われればそれま
でなんだけど……。

……ん？待てよ……？おかしい……。何の訓練も受けてない村人
が、何故オーク鬼を追い返すことが出来たんだ？確か、村長の話で
は、確認出来たオーク鬼の数は十匹。村人全員で立ち向かったとし
てもメイジも居ないのに追い返せる筈がない。それこそ、強力な罫
でも仕掛けられない限りは不可能な話だ。けど、そんな物は何処にも見

当たらなかった。

考えれば考える程不審な点が浮かび上がる。

「あの、ちよつと訊きたいことがあるんですけど……」

「何でしょうか？」

この人は案内役のサウロさん。村長に明日、日が昇ってからでもいいのでは？と訊かれた時に、先を急ぐので今日中に済ませたいと言ったら、もうすぐ日暮れですし、土地勘のある者が一緒の方が良いでしょうとこの人を案内役としてつけてくれたのだ。

「オーク鬼の討伐を領主に訴えたのですか？」

「それは勿論！ですけど……、あの領主は兵を出すことを嫌ってわしらの訴えを無視したんです……」

ふむ……。確かに有り得ないことじゃないよな。むしろよくあることか……。

「見えてきました。あそこです」

サウロさんの指を指した方向を見ると、予想よりも大きめの洞窟だった。

だが、やはりここにも不自然なところがある。

それは……足跡だ。洞窟の周りには、人間の足跡があった。そう、人間の足跡はあるのに、オーク鬼の足跡が全く見当たらないのだ。これはおかしい……。オーク鬼は、言わば全長二メートルはある二本足で歩く豚だ。体重も人間のそれを軽く越えている。

その人間よりも重いオーク鬼の足跡が、一つも見当たらないという

のに、何故人間の足跡だけが遺っているのだろうか…。

「サウロさん、この足跡は……………」

なんですか？と続けようとしたが、その前に後頭部の辺りに強い衝撃を受け、僕は気絶した。

気絶させられたケントは洞窟の奥に運ばれた。

ケントの所持品や武器を運んだのは洞窟の奥から出てきた男だったが、気絶したケントを運んだのは、ケントを後ろから殴って気絶させたサウロだった。

サウロには家族がいる。猟師であるサウロは、妻と息子、三人で仲良く暮らしていた。

サウロは幸せだった。決して余裕のある暮らしをしていた訳ではない。だが、特別貧しかった訳でもない。それでもサウロは幸せだった。あの村に住む人達は間違なく幸せだった。そう“だった”のだ。それはもはや過去の話。

今から半年程前、ある山賊団が村にやってきた。

山賊達は村を荒らそうとはしなかった。ただ、一方的な要求をしてきただけだった。それは……、村で育てている作物の半分を寄越せ、というものだった。

当然、村人達は反抗した。武器を取り、立ち向かおうとした。だが、所詮は農民。ろくに喧嘩もしたかともない村人ではまるで歯が立たなかった。みせしめとして何人が殺され、二度と立ち向かえないように、人質をとられた。サウロの息子もその一人だった。

それ以来、村人達は山賊達の命令通りに過ごしてきた。若い女は慰み物にされ、お金も奪われた。この村は山賊達に搾取され続けた。しかし、この村にはもう何も無い。

そのことを山賊に伝えると、山賊の首領はこう言ったのだ。なら、村を訪れた旅人を連れてこいと…。

サウロは、先程まで背負っていた少年のことを思う。

あの少年は、村の依頼を受けてくれた心優しい子だ。こんなところで死なせたくなかった。だが、こうしなければ、代わりに息子が殺されてしまう。仕方ない、仕方がないんだと、そう自分に言い聞かせるしかなかった。

なるほど。そういう事情がある訳ね……。

ん？僕は気絶してたんじゃないのかって？確かに気絶はしたよ？そりゃあチートな能力を持つても後ろから殴られたら気絶くらいするさ。ただ、その気絶した時間が極端に短かったただけだ。

考えてもみてくれ、僕はルイズの爆発魔法を何度か受けてるんだよ？そりゃ耐久力も自然と上がってくるさ。……………ちょっと泣きたくなってきた……………。

「おい、ガキはどうしてる」

「ぐっすり眠ってますよ」

とつくに起きてるっての。さっきサウロさんの記憶もみたからアンタらが何をしてきたかも知ってるしね。

「そんじゃそいつは奥の牢屋に閉じ込めとけ」

「わかりやした！」

牢屋、ねえ……。ということは人質もそこにいるのかな？ だとしたら、好都合だな。救出が楽になる。

「よつと……。ふう。この間のおっさんに比べりゃ軽いもんだな。ちゃんとメシ食ってんのか？ こいつ。女みてえーだな、顔も女っぽいし……」

体重が軽くて悪かったな！ 僕は小食なんだよ！ ほつといてくれ！ 後、女つばいとか言うな！！ 結構気にしてるんだよこつちは！！

こいつは後で死刑だな。まあどちらにせよ、ここの山賊達は逃がないけどね。

僕をここまで運んだ山賊の足音が聞こえなくなってから、ゆっくりと起き上がる。

うげ、たんこぶ出来てるし……。サウロさんめ、本気で殴ったな！ まあ、ちゃんと気絶させないと息子さんが殺されちゃうんだから、仕方ないんだろうけど……。

「坊や。大丈夫かい？」

後ろを見ると、三十台後半から四十台前半女性が話しかけてきた。

「大丈夫です。貴女は人質にされた村人ですか？」

「ええ。わたしは村長の娘のソフィよ。坊やは？」

「僕は健年です。貴女がアーシアさんの母親ですか？」

「……………ええ。やはりお父さんとアーシアに言われてここに？」

「ここに住み着いたオーク鬼を退治してくれと頼まれました」

やっぱりか……。あの二人の涙は偽物じゃなかった。助けを求める声も本心からだったんだ……。依頼内容が『オーク鬼の討伐』から『山賊団の討伐』に変わっただけで……。

「ごめんなさい……。あの二人も必死だっただけなの。恨むのならわたしを恨んでちょうだい」

「いえ。ここに運ばれる途中で大体察しはついてましたし、大切な人を守りたいって気持ちは僕にもよくわかりますから、気にしてませんよ」

「ありがとう。気休めでも嬉しいわ」

泣きながら感謝されても反応に困る。どうすれば泣きやんでくれるんだろう？

「気休めじゃありませんし、嘘でもないです。僕の本心です。だからもう泣かないで下さい」

「ありがとう。……………ありがとう」

結局、ソフィさんは三十分間泣き続けた。

さて、これからどうしようか……。脱出するのは簡単だけど、人質を残しては行けないし、かと言って連れ出しても足手まといにしかならないし……。どうしたもんかなあ。

ソフィさんの話では、人質にされた村人達はもう一つ隣の牢屋に閉じ込められてるらしい……。

因みに、ソフィさんだけがこの牢にいる理由は、ソフィさん以外の人は衰弱死したからだそうだ。

もともと、この牢には老人だけを閉じ込めるつもりだったらしいが、老人の介護をする為に、わざわざ一緒に閉じ込めるよう頼んだそうなのだ。

多分、自分が村長の娘だからとか、そういう理由なんだと思う。

おっと、話が逸れたな。それで、牢の監視はしてないそうだ。

不用心だと思ったが、考えてみれば、この牢から抜け出しても脱出することが出来ないのだ。何故なら、この洞窟を出るには山賊達の住居スペースを横切る必要があるからだ。

これなら牢を監視する必要はない。山賊が考えたにしては、なかなか合理的ではある。

はてさてどうするべきかな？

僕はここから脱出する方法を考えるのであった。

第二十二話

取りあえず、ここで考えていても仕方がないので、牢を出ることから始めることにした。

「投影、開始」

手に現れるのは干将のみ。牢を切るのに使うだけなので、干将だけで充分なのだ。莫耶は必要ない。

「あの、それは……………」

「手品みたいなモノですよ。気にしないで下さい」

ソフィさんが突然出てきた干将に驚いているが、適当に誤魔化した。牢の鍵の部分だけを切り裂く。大きな音が出ない様にしないとね。山賊達に気付かれると面倒だし……………。

「さて、次はこっちか……………」

隣りの牢屋には男の人が数人、そのまた隣りには女の人が閉じ込められていた。

皆頬が痩せこけ、顔色が悪い。ソフィさんの話では食事は日に二回、固いパン一個と驚く程不味い冷えきったスープ一杯が与えられるらしい。

食欲は人の三大欲求の一つだ。だというのに、ここの食事は酷過ぎる。これでは必要な栄養を摂取することができない。

栄養失調で死んでしまった人だっていたかもしれない……………。

そう考えると、もっと早く来れば良かった。そうすれば助けられた

かもしれない。そんな想いに駆られる。

「あ、あんた誰だ？」

掠れる様な声に顔を上げると、そこにはサウロさんの記憶にあった青年がいた。不健康そうな外見だが、この人がサウロさんの息子で間違いないだろう。

「僕は貴方達を助けに来ました。今出しますから、大人しくしておいて下さい」

早速二つの牢の鍵を切り裂き、村人達を牢から出す。中にはろくに食べてない所為か、ふらふらしている人が何人かいたが、今は我慢してもらおう。

「じゃあ、僕の後が続いて下さい。出来るだけゆっくり歩きますから、足音を出来るだけ出さない様に注意して下さいね？」

さて、問題はこんなに大勢の足手まといを抱えた状態で山賊達に見つかからない様に出ることだが、それは不可能だろう。僕一人ならイケるが、村人達にそんなスキルは無い。

戦闘になれば乱戦になるのは確実。でも万全の状態でも戦闘経験皆無の村人達では簡単に捕まってしまう。

牢に残しておくのも一つの手だが、もし運良く僕から逃れた山賊が牢にいる村人を人質にすればアウトだ。

しかももう連れて来てるから今更『牢屋で待ってて下さい』とは言えないしね。

因みに、ここの山賊団は三十人の男で構成されているそうだ。

この程度の人数なら魔法使えば簡単に全滅させられるが、出来れば魔法は使いたくない。

魔法を使えば村人達は僕のことをメイジ、つまりは貴族であると勘違いされるだろう。それは色々と困る。

村人達には魔法を使える「貴族」という方程式が成り立つ。そうなれば、魔法を使える僕に対してあの手この手を使って媚びを売ってくる可能性が出てくるし、余計な気遣いをさせるかもしれない。もしくは単純に怯えられるかだ。

それは僕にとつては非常に面倒なことだ。不用意に怖がらせるのも気分が悪いしね。

そんな訳で、僕が使うとしたら、手品で誤魔化しがきく投影魔術が見た目では分からない身体強化系の魔法のみだ。

戦うのは村人達を危険に晒すことになるし、戦わずに脱出することは不可能……。遠く離れた所から相手を無力化出来る道具があれば良いんだけどなあ…………。

健年が山賊達を魔法を使わずに倒す方法を捻り出している頃、山賊達はこの洞窟内で最も広い部屋で宴会を行っていた。

「ガハハハハハ！！良い気分だぜ！！！」

「おう！なんとたつて久し振りの上玉だからな！！笑いが止まんねえよ！ゲハハハハハ！！！」

山賊達は大声で笑いながら、酒をグビグビと浴びる様に飲んでいる。テーブルの上には大きな肉が所狭しに並べられている。その肉からは温かそうな湯気が立ち上ぼっており、山賊達はそれを豪快に噛み

千切り、美味しそうに咀嚼する。

「あの坊主、なかなか良い武器使ってやがるぜ！どれも売れば良い値が付きそつだ！」

「ああ、金も結構持ってたからな！当分楽な暮らしが出来そつだぜ！！」

「坊主自体も高値で売れそつだぜ？ああいうひょろい見た目の奴は、女の貴族に気に入られ易いからな！！」

そこでまたガハハハハ！と下品な笑い声を上げる山賊達……。そんな山賊達を冷めた目で見る者がいた。

それは、酒に酔った山賊達に肩を抱かれている村娘達だ。

彼女達は今の自分達の置かれた環境を良く理解しており、山賊達には無駄に逆らわない様にしている。

逆らえば逆らう程自分の首を締めることが分かっているのだ。ならば、出来るだけ傷つかない様に行動するべきだと考えた結果だった。しかし、どんな人間でも限界はある。彼女達の精神は磨り減り、何人かは顔から表情から感情というものが抜け落ちていく。

この欲望のままに行動する魔の巣窟から抜け出さない限り、彼女達には笑うことも悲しむことも許されないのだ。

「うん？……ちっ！オイ！この酒樽もう空だぞ！！」

さっきまで酒を飲んでいた男が酒が無いと声を張り上げる。するとそれに呼応するかのように、他の男達もこっちもだ！俺のところも無くなっちゃったぞ！！と大声をだした。

「しゃあねえな……。オイ！その！」

「へ？俺っすか？」

リーダー格の男が目を付けたのはこのメンバーの中でも一番出入り口に近い位置で肉を頬張っていた男だった。

「お前奥まで行って酒持って来い！！」

「そ、そんな。無理ですよ！俺一人じゃそんなにいっぱい運べないっすよ！！」

「ならそこで呑んでる三人と一緒に取って来い！！持って来れる分全部だ！！」

「へい………。わかりやしたよ。行けば良いんでしょ！行けば！！」

男はあと溜め息を吐きながら、巻き込まれた他の三人と共に奥の貯蔵庫まで歩くのだった。

この洞窟は蟻の巣の様に枝別れしており、貯蔵庫には牢屋に行く道を右に進む必要がある。

貯蔵庫の手前に食料品が雑多に保管されている。酒樽が置いてあるのは、貯蔵庫を更に奥に進んだ先にある扉の向こう側だ。

「さっさと持ってくか……」

「そつだな。遅くなるとうるせーからなあ……」

愚痴をこぼしながら、一人で抱えていける様な大きさの酒樽を腕で抱き込む様にして持ち上げる。

さて行くか。一番出入り口に近い男がそう言おうとした時、突然赤いナニカが視界を遮ったかと思えば、そのまま口を塞がれ、貯蔵庫から引っ張り出された。

これはホンの一瞬の出来事である。声を漏らす暇さえなかった。当然、そのことに気付いた男達は抱えていた酒樽を降ろして辺りを警戒したが、その甲斐空しく赤いナニカに拘束されてしまったのだった。

さて、こんなもんかな。いや、流石に武具関連以外の投影は魔力を喰うね。こんなとこまで士郎の特徴を真似しなくてもいいのに。

「ケント君、これはなんなの？」

「これは『マグダラの聖骸布』というマジックアイテムです」

「マジックアイテム!？」

ソフィさんや僕とソフィさんの会話を聞いていた他の人達が驚いている。

まあ、普通は平民がマジックアイテムを持つての方がオカシイのだから仕方ないけど。

しかもこの世界には存在しない物だしね。

「これは“我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）”というキーワードで能力を発揮するマジックアイテムなんですけど、その効果は“男性に対する絶対的な拘束力”です。例えば相手がメイジだろうと完璧に拘束してくれる優れ物なんですよ」

多少解りやすくする為に自分なりに噛み砕いて説明してみたけど……、大丈夫かな？

まあ、画面の前の皆は元ネタ分かってるだろうけど、万が一ってことがあるから一応『マグダラの聖骸布』について僕の覚えてる範囲で説明するね？

『マグダラの聖骸布』は今僕が山賊達を拘束するのに使った赤い布のことだ。この布は相手を拘束する事に特化している魔術礼装で、『我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）』という言葉と共にその力を発揮するんだ。

直接人体を傷つける程の力はないけど、男性ではこれによる束縛から逃れる事は出来ない。サーヴァントであるランサーや子ギルでも簡単に抜け出すことは出来ないことからその拘束力は推して知るべし！

まさに男に対する究極ウエポンなのだ！

因みに、マグダラというのは『マグダラのマリア』に関連する単語で、イエス・キリストの妻とされる。『我に触れるな（ノリ・メ・タンゲレ）』という言葉は宗教画の題名に良く使われているらしい。詳しいことはWikiとかキリスト教の聖典なんかで調べると良いと思う。

というか今気づいたんだけど、これ使えば簡単にワールドとか倒せた

んじや……。いやいやいや！そんなことはないさ！うん！ワールドならきつとこんな布ごとき避けてくれるさ！
だから僕の今までの戦いは無駄じゃない筈だ！……………無駄じゃない、よ……………ね？信じて良いんだよね？……………うん、大丈夫だよ。うん……………

「さて、そろそろ行きましょうか。……………はあ」

「ど、どうしたの！？急に元気が無くなった様に見えるけど……………具合でも悪いの？」

「いえ……………。ただ、僕のできたことは無駄だったんだろうか？と疑問に感じただけですから……………」

「十代の子供が抱く疑問にしては重過ぎる！？」

「はあ……………。なんだかどうでもよくなってきたな……………生きる事が」

「し、死ぬなー！き、君はまだ若いんだ！何があつたのかは知らないが、生きていればきつと良いことあるさ！！」

「いつそのこと、此所の山賊達を山ごと消し飛ばしちゃうかな……………」

「そんな虚ろな表情で恐ろしいことを言わないでちょうだい。本当にやりそうで怖いから」

何かソフィさんと村の人達に止められた。
もういろいろと疲れちゃったから、魔法でもなんでも使ってストレス発散しようかと思ったのに……………。

え？魔法は使わないんじゃないのか、だって？

そりゃ僕だって使わなくて済むならそうするけど、何か面倒になっちゃったんだよね。しょうがないよ。僕は気紛れなことでも有名だから。

「まあ冗談はこれくらいにして……………」

「…………… 本当に冗談だったのかしら……………？」

ソフィさん、貴女は何時からツツコミ役になったんですか？

まあいいや。取りあえず、この調子で他の山賊達も無力化しよう。

こいつらただの雑魚だし、簡単に終わるだろう。

なんて思ってたら新たな生贄がやって来ましたヨ？

多分こいつらがなかなか戻って来ないから様子を見に来たんだろうなあ…………。

姿は見えない。恐らくはまだ距離が離れているということだろう。

ここは洞窟だ。タダでさえ、山賊達の話し声は大きいというのに、更に反響することによって、より遠くまで声が響くのだ。

声の感じからして人数は三人、音が反響するので足音から距離を判断するのは難しいが、魔術・魔法を使える僕には距離を確認することなど造作もない。

距離は約二十メートル。僕の強化された視力と暗視能力は薄暗い洞窟内では大活躍だ。

村人達には既に隠れる様に言っている。後は、僕が確実に奴等を捕縛すればいい。

距離十五……………、まだだ。まだ速い……………。後五メートルは進ませろ！残り……………十一メートル！後、もうちょっと！

…………… 今だ！！

三人の男が僕の間合いき入ると同時に、赤い布を投げる。

「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」

聖骸布は寸分の狂いなく、三人の男を口から塞ぎ、全身に巻き付いた。

それを確認した僕は最後の仕上げに入る。

「フハハハハハ！ フィーッシュ！！！」

思いっきり引つ張る。肉体を強化している僕にとって、三人の山賊の体重なんぞに手こずることはない。

三人の体が浮かび上がり、僕の足下に一直線。そのまま三人は床に転がったまま動かない。

どうやら気絶している様だ。この程度で気絶している様ではジェットコースターは勿論のこと、バンジージャンプだって碌に出来はないだろう。

……… この世界に絶叫マシンがあればの話だが。

まあ、崖と丈夫なロープさえあれば、バンジージャンプくらいなら再現可能なんだけどね。その代わり安全性は保障出来ないけど………

まあそんなことはどうでもいいや。この調子でどんどん釣り上げ……

……… じゃなくて捕縛していくか。

僕が捕縛したのは全部で七人……、山賊団の勢力は三十人。残りはイレギュラーさえなければ二十三人か……。

まあいざとなったら本気で殺ることにしよう。村の人達を危ない目には遭わせられないしね。

僕は村人達を守る為に戦う決意を新たにするのであった。

第二十三話

さつき捕まえた七人を引きづりながら歩いてたら、村人達に少しひかれてしまった……。ちよつと悲しい……。まあいいけどね。別に寂しくなんかないもん！

…………ごめんなさい。嘘つきました。寂しいです。もんとか付けてごめんなさい……。

さて、さつきまでのことは無かったことにして…………、今の僕達が何処に居るのかを説明しよう。

僕達は今、山賊達が飲み食いをしてる広場の入口で身を潜めている。山賊団の首領と思われる人物はかなりご立腹の様だ。

まあ酒を取りにきた奴等が何時まで経っても戻って来ないのだ。タダでさえ頭の悪い奴等の集まりがずっと我慢出来る筈がない。今にも僕が捕まえた奴等を捜しに飛び出しそうだ。

出来ることならこつちから攻め込んで一気に終わらせてやりたいが、それは出来ない。何故なら、奴等の人数が情報と違うからだ。

今、広場で飲み食いしている奴等は十三人。僕が捕まえている七人を合わせても二十人だ。

村人達の話では、山賊団は総勢三十人だった筈…………これでは数が合わない。

僕達はこの洞窟の奥からやって来たのだ。ならば、残りの十人はこの広場から洞窟の出入り口付近までの間の何処かに居ることになる。もしくはこの洞窟の外だ。

出来ればこの十人が何処に居るのか分かってから攻め込みたい。まあ、奴等がこつちに近付いて来たら応戦するが……。

そう考えた時だった。奴等が立ち上がったのは……。

まったく、忍耐力の無い奴等だ。馬鹿としか言い様がないね。さて、さっさと迎え撃つことにしよう。

「投影、開始」

マグダラの聖骸布が僕の手のひらの上に現われる。後ろの方で『何時見ても凄いわねえ』とか『何処から出してんだ?』とか疑問の聲が拳がつているが、イチイチ相手にするのも面倒なので無視する。そして奴等が入口付近に集まったところで……………

「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」

一気に捕縛する。

だが、流石に十三人もの大人数を同時に捕縛することは出来なかったみたいだ。

マグダラの聖骸布の魔の手から三人程抜け出している。

「デメエ！さつき捕まえたクソガキか！？ナメた真似しやがって……………ブッコロしてやる！！」

他の二人も似た様なことを叫びながら武器を持った。

しかし、進歩の無い奴等だな。キレた時の台詞がテンプレ過ぎる。もうちょっとオリジナリティーを加えてもいいだろうに……………。

しかも逃げる訳でもなく、こっちに向かって来るなんて……………好都合だ。あのまま脱兎の如く逃げ出されていたら、捕まえるのに時間がかかったかもしれないからね。

「死ねえ！！」

そう叫びながら僕目掛けて走り出す馬鹿三人組。残りの十人が何処に居るのか気になるが、少なくともこの近くには居ないみたいだし、まともに相手してやるか。

「投影、開始」

投影したのは真アサシンの所持した短剣ダーク。斬り結ぶのには向いていない武器だが、未だ数メートル離れた相手に攻撃するには都合が良い。

「汚い体で近付いて来ないでくれる？体臭がもの凄くクサイから」

僕は三人に向けてダークを投げる。数は全部で六つ。それぞれが三人の両足に突き刺さった。

「『ギヤアー!!?』」

三人は痛みの余り、絶叫しながら顔面から思い切り転んだ。まあダークが両足共地面に縫い付けてるから当たり前なんだけど。三人共痛そうに叫んでるから大丈夫だとは思うけど……、念には念をいれときますか！

「投影、開始」

新たにダークを六つ投影し、蹲っている三人の手に向けて投擲する。ダークは僕の狙い通りに飛んでいき、見事に三人の手を両足同様、地面に縫い付けた。

また三人が絶叫を挙げたので、ちよっとうんざりした。死ねばいいのに……。

さて、と。それじゃあ早速、こいつらからここに居ない十人が何処に居るのか聞き出すことにしよう。

マグダラの聖骸布で縛られている奴の中から一人、一番血の気の多い奴を選ぶ。

そいつは僕に引きずられるのがよっぽど悔しいのか、身動きが取れないにもかかわらず、必死に抵抗する。

コイツは活きの良い奴だ。なぶり甲斐………じゃなくて、拷問……

……でもなくて、え〜っと………そう！尋問のし甲斐の有る奴だ。

くつくつく……、精々足掻けよ？簡単に口を割られてしまったら、暇つぶしにもならんからなあ。フハハハハハ！！

「助かった……の……？」

呆然とした面持ちで、山賊達の相手をしていた村娘達の一人が呟いた。

それを皮きりに他の村娘達も“山賊団から解放された”という事実に気付き、涙を流す。しかし、一部の者はその事実を信じる事が出来ずに呆然としていた。

「皆、大丈夫か？」

山賊達が赤い布に拘束され、力づくで連れていかれた広場の出入口から、牢屋に囚われていた筈の村人達が現われた。

それを見て、本当に助かったのだと、ただ、自分が助けられた事実を信じられずに茫然としていた村娘達も泣き始めた。

「わたしたち……、助かったんだ。もう自由なんだ……」

「ああ、もう少しで俺達は自由だ！あの子のお陰だ……」

村人の言葉に、村娘達は山賊達を見事に手玉に取っていた少年の姿を思い出す。

そういえば、あの少年にお礼を言っていない。そんなことに今更思い至った。つい先ほどまで絶望の最中にいたのだ。そこまで気が回らなくて当然と言えるだろう。

「それで、さっきの子は何処に？」

「ああ、あの子なら……」

村人の一人が質問に答えようとした時だった。ギャー！……？という叫び声が響き渡ったのは……。

「……なに？あの声？」

「……哀れな獲物の断末魔さ……」

ケントが嬉々として山賊を引き摺っていった光景を見ていた村人が、全てを悟り切った様な表情でそう呟いたのだった。

「お母さん！」

「ソフィ！」

「アーシア！お父さん！」

親子の感動の再会、か……。羨ましいねえ。

山賊の拷も……。もとい尋問を終えた僕達は何事も無く村まで戻ってきた。今は捕まっていた人達を家族の元に帰しているところだ。ん？あの場にいなかった十人はどうなったか、だって？そんなの簡単さ。村に行く途中の森で僕が殺した十人がアイツらの仲間だったらしいんだ。

実に呆気ない幕引きだよ。因みに、『俺の仲間が戻ってきたらテメエなんてイチコロだ！』って勝ち誇っていた奴に『ソイツらなら村に向かう途中の森で襲ってきたから殺しといたよ？』って言うたら絶望感たつぷりの良い顔をしてくれたよ。

まあそんなことはどうでもいいや。今は、僕に寄って来る村人達の相手をしないとね。

「ありがとう！本当にありがとう……！！！」

「最高だよアンタっ！！うちの旦那に見習わせてやりたいくらいだよ……！！！」

「おねえちゃんをたすけてくれてありがとう！おにいちゃん！」

「いやゝ、凄いな坊や！どうだい？うちの娘を嫁に………」

と、こんな風に感謝されたり背中をばしばしと叩かれたり、舌足らずな声でお礼を言われて萌えたりで忙しいのだ。因みに最後のは聞かなかったことにさせてほしい。

「ケント君、あの時は殴って済まなかった!」

僕に群がる村人達の対応をしていると、そんな声が少し離れた所から聞こえてきた。

声が聞こえた方向に目を向けると、そこにはジャパニーズDO・GE・ZA を披露しているサウロさんの姿があった。

「仕方なかったとは言え、ケント君を騙したのは事実だ。この通り、許してくれ!」

気持ちの良い謝りっぷりのサウロさん。他の村人達もそれに倣う様に土下座する。

「いや、今回の件は村長である僕の責任じゃ。ケント殿、責めるのならどうか僕だけにして下さい」

で、今度は村長さんですか。まあ村の長が責任を取るのは当然のことだと僕も思っけどね。

「おじいちゃんが悪くないよ!……ケントさん、あたしがお母さんを助けたと言って言っただけだから皆嘘を吐いたんです。おじいちゃん達は悪くないんです。だから……」

「あー……、皆さん落ち着いて下さい」

もう、皆良い人過ぎるでしょ。お互いがお互いを庇いながら謝って

くるんだから。正直、こんなの見せられたら許すしかないと思う。逆に許さない、なんて鬼畜外道な選択をする人がいたら見てみたい気もするけど。

「今回の件については、別に怒ってないし、恨んでもいません。皆さんのとった行動は、大切な人の命がかかっていたからこそのもんです。大切な人の命を守りたいという想いは僕にも理解出来ますから」

そう。あの時、僕を庇って死んでしまった由衣も、きっとこの村の人達と似た様な想いを抱いていた筈だ。だからこそ、今の僕がある。大切な人を守りたいという想いが、僕を生かしているのだ。

「だから、僕は貴方達を許します」

「あ、ありがとう！ケントさん！」

「ありがとう。皆を許してくれて。貴方は本当に優しい子ね、ケント君」

いや、ただ許しただけなのになんでそこまで感謝してくるの？僕は常識的なことを言っただけなんだけど……。

まあいつか。皆が喜んでるなら、それで良い。

「お待ち下され」

この声は村長さんかな？

声のした方向には予想通り村長さんが。でも、どうしたんだろうか？何か他に問題でもあるのだろうか？

「ケント殿、貴方の慈悲深い心に感謝致します。ですが、それでは僕の気が済みませぬ。どうかお礼をさせて下され」

「はぁ……。そうなんですか」

慈悲深いて……。僕はそんな優しい人間じゃないんだけど。どちらかと言えば、敵には容赦しないタイプだし。

「ケント殿のお陰で山賊団に奪われていた村の財産は、全て取り返すことが出来ました。しかし、僕らにも余裕がある訳ではありませんぬ」

だろうね。今までギリギリの生活を送ってきたんだろうし、山賊達が来る前の生活にだって余裕なんてなかったハズだ。

「今の僕らにはケント殿にお渡し出来る様な上等な物は何一つ持ち合わせてはおりませぬが、せめて盛大なお持て成しをさせて下され」

それはつまり……。どういうことになるんだろう？

「皆の者！宴の準備だ！！」

「「「おうー！」「」」

なるほど。お金は無いけど、取り返した食料は大量にあったから礼代わりに振る舞おう、てことか。そして、今までお腹一杯食べられなかった人達の労いも兼ねてる訳だね。

でも、腹ペコの人がいきなりご飯を食べると胃がビックリするんじゃないかったっけ？……。まあいいか。僕には関係ないしね。

と、こんな感じで無理矢理自分を納得させた、僕なのであった。

第二十四話

結局、あの村ぐるみの宴会は夜通し行われた。皆久し振りにお腹一杯食べられるから嬉しそうに飲み食いしてた。

急いで食べたのが災いして気分が悪くなった人や、お酒を飲み過ぎて悪酔いした人も何人か居たが、皆楽しそうで良かった。

僕も色んな人に料理やお酒を勧められて大変だった。取りあえず料理は美味しかった。量は多かったけど、あのシエスタの作ってきた料理に比べれば大したことはなかった。でも、お酒は飲まなかった。

確かに、この世界じゃ僕くらいの歳の子がお酒を飲むのはおかしいことじゃない。むしろ飲まない方が珍しいだろう。だが、“飲まない”のではなく、“飲めない”としたらどうだろうか？

僕の家は代々お酒を飲めない体質の家系なのだ。父さんがお酒を飲むと、すぐに酔っ払って絡んでくるのだ。しかも泣き上戸なので応対にも一苦労。

逆に母さんの家は酒豪の家系で、お酒にはとても強い。母さんの話では、飲み会などが開かれた際、酔い潰れずに残っているのは自分だけで他の人は皆ダウンしているそうだ。因みに、お酒を飲んで意識を失ったことは一度もないとか。

でも母さん自身はそんなにお酒が好きな訳じゃないから、毎日飲まない。気が向いたら飲むという感じだ。

そして、極端な二人の間に産まれた僕は、チューハイ五本で酔っ払う性質の悪い酒乱だそうだ。

伝聞形なのは僕にその時の記憶がないから。高校の友人が家に泊まった時に、友人の一人がお酒を飲み始めたのだ。僕もその時は一本くらいなら大丈夫だろうと高を括っていたので飲んでしまったのだ。実際大丈夫だったからまた一本、また一本と飲み続けた。

僕も二本飲んだ時点では平気だったが、三本、四本と飲んでいくうちに、どんどん意識があやふやになっていき、五本目を飲み始めた時の記憶は僕にはなかった。

友人曰く、『五本目のチューハイを凄い勢いで飲み干した後のお前の暴れっぷりは、まるでロック・リーの様だった』とか。

それ以来、僕は酒を飲むこと禁じた。酒を飲んで醜態を晒すなんて絶対にしたくないからね。

まあそんな訳で、僕はお酒を飲んでない。だからこういう席では僕だけ素面なんだよね。皆は酔っ払って好き勝手してるのに……。酔っ払いの世話なんかやるもんじゃないよ。ストレスで胃に穴が空きそうになる。

……結局世話はしてるんだけどね。そこは気にしない方向で。

「相棒。本当に行くのかい？」

「そりゃ行くさ。あんまりのんびりしてられないだろ？」

「でもよお……。せめて誰かが起きるまで待つてた方がいいんじゃないかねえか？」

まあ、確かにその方がいいだろうね。起きた時に恩人が消えてたら、色々と戸惑うだろうし、この辺の地理とかも訊いとけばこの先楽になるし……。

「だが断る」

「……………それ、相棒が言いたかったただけだろ」

……………なんで分かったんだろう？そんなに判りやすい性格はしていないんだけど……。まあいいけど、別に。

「いいかいデルフ？こういう人助けをした後は事後処理がとても面倒なんだ」

怪我人の手当てとか、奪われた財産の振り分けとか、山賊達を衛兵に連行する必要もあるし……………、もしここに衛兵がやってきたら、僕も詳細を説明してほしいとか言われて足止めされる可能性もある。そんな面倒な事後処理にまで付き合ってあげる義理はない。僕に依頼したのはあくまで『山賊団の討伐』だ。いや、まあ依頼された時はオーク鬼の討伐だったけどね。

「そんな訳で、僕は先を急ごうと思うんだ。ここの人達も僕が居る限り気を遣うだろうし……………」

「そんなことありません！」

僕が早くここから出発したい理由をデルフに話していると、突然後ろからそんな叫び声が聞こえてきた。

あれ？誰か起きてたのか？

背後に振り返ると、そこには息が乱れ、頬が上気している村長の孫娘……………アーシアがいた。

「どうしたの？アーシアちゃん。そんなに息を切らせて……………」

「相棒、分かってて言うてるだろ」

まあ大体想像つくからね。

「あたしたちは、まだ、はあはあ……………、アナタに、はあはあはあ、ご恩を……………」

「あー…………、まずは息を整えてからにしようか。はい、水」

取りあえず、水でも飲ませて落ち着かせることにした。

「すみません。落ち着きました」

「そう。それは良かった」

そこら辺に放置されている椅子に座らせて水を二杯も飲ませた甲斐があったよ。うん。

「で、一応訊いとくけど、何か用かな？」

「そ、そうでした！…………あの、あたしたちはまだ、アナタにここに居てほしいんです！」

「ん…………。どうしてかな？」

「ご恩返しをしたいんです！昨晚はアナタの歓迎の宴をひらきまし

た。でも、それだけです。まだ、アナタへのお礼を渡してません！」

いやー、義理堅い子だねえ。今時こんな子滅多に居ないよ。でもねえ……。僕はあの宴会だけでも充分だし、そもそも、この村に僕への謝礼が出来る程の物があるとは思えないんだけどねえ……。

「た、確かに、この村には金銭的な余裕はないですけど……」

でしょうね。昨日村長もそんなこと言ってたし、これ以上何をするつもりなんだろうか？

僕がこの先の展開を予想していると、アーシアちゃんが顔を俯けてもじもじし始めた。どうしたんだろう？

「えと、その、あの……」

うーん？今度はどんどん顔が赤くなってきたぞ？彼女はいったい何を言うつもりなんだ？

僕が思案している間に、どうやら言う決心がついたようだ。

アーシアちゃんが意を決した様に顔を勢い良く上げ、とんでもない爆弾発言をしてくれた。

「だ、だから……、あたしがご奉仕します！」

……へ？

「えと、その、も、勿論、夜のお相手だってするし、あたしがイヤなら別の人にも声をかけます！」

……はっ！しまった！余りのことについて茫然としてしまった！しかも更にとんでもないこと言ってるよこの子！！？

「あ、もしかして大勢でやった方がいいですか？ケントさんだって男の子ですし英雄色を好むって言いますもんねでは早速皆を起こして……」

「ストップストップストー……ッブ！！落ち着こう！一旦落ち着こうかというか落ち着け！そして僕の話聞いて……！！！」

ヤバい。なにがヤバいって、僕もアーシアちゃんも早口で喋った所為で句読点をつける暇がないくらいにはヤバい。

あー、顔が熱い。今の僕の顔は絶対真っ赤になってるだろうね。うん。

「いいかよく聞け。僕はそんなお礼望んじゃないし、だいたいそういうのは将来好きな人が出来た時にやりなさい。一時の感情で好きでもない男にそんなこと言っちゃダメ！分かった！？」

「一時の感情なんかじゃありません！！」

「……………それはいったいどういう意味なんですかアーシアさん？」

アーシアちゃんの迫力に何故か敬語になる僕。というか何故にこの子は僕が逆らえないオーラを纏ってやがりますかこのヤロウ！

「あ、あたしも他の子たちも、皆アナタのタメならナンだってします！」

「それを……………」

「確かにあたしもこの村の子たちも最近ご飯食べられなくて痩せてるし、肌も荒れてるし、キレイでも可愛くもないかもしれません！でも……………」

一時の感情と言っんじゃないか。

そう言おうとしたら、アーシアちゃんの叫び声に遮られた。

「それでも！あたしたちのこの想いはゼツタイに一時の……………この場限りの感情なんかじゃないです！！あたしたちは真剣にアナタのことを想ってるんです！！！」

……………ナニコレ？もしかして僕に助けられたから恋に落ちたとかそういう話なワケ？

告白されるのは初めてじゃないけど、こういう告白のされ方は今まで一度も経験したことありませんよ？どう反応すればよかったですたい？

「おい、その娘っこ。相棒をあんまり困らせないでやってくれ」

おお！ちよつと空気になつてたけど、ちゃんと僕のピンチに気付いて助けてくれるんだね？なんて出来た武器なんだ！キミほど良い相棒は他には居ないよ！

「相棒には帰りを待つてる貴族の娘っこが……………」

「死ね！この駄剣があー！！」

「ヒデエよ。相棒……………」

前言撤回。この駄剣は後で僕の魔法の実験台になって貰おう。

「そうですか……。ケントさんには既にお相手が……………」

あれ？なんか勝手に納得してる？

「すみません。ケントさんのこと何にも考えずにあんなことを……………」

「え？いや、別に気にしてないけど……………」

「ですが、あたしたちの感謝の気持ちは受け取って下さい。おじいちゃんも今朝起きたら渡したい物があるって言ってたので」

「ああ、うん。分かった。村長さんが起きるまで待ってる」

「じゃあ、あたしは先におじいちゃんの家に行きます。少ししたらおじいちゃんも起きると思うので……………」

ではまた。

そういつてアーシアちゃんは僕の返事も待たずに行ってしまった。

……………あれ？僕ってもしかして、状況に流されてる？

「相棒はそういう運命なんだよ」

「うん。デルフ、後で覚悟しときなよ？」

取りあえず、ゆっくり歩いて村長さんの家に行くことにしよう。デルフに放つ魔法を何にするか考えながら……………。

出来るだけたつぷり時間をかけて村長さんの家に到着した。時間をかけたのは僕自身、少し落ち着いて考えたいことがあったから。今後の予定とか。

村長さんの家に入ると、既に起きていた人が椅子に腰かけていた。その中には村長さんとアーシアちゃんもいる。

さっきまでがやがやと何事かを話し合っていた人達も、僕に気付いた途端、口を噤んだ。

いったい何なんだろうね？この空気……。

若干びくびくしながら村長さんの下へ向かうと、村長さんは徐に高そうな箱を取り出した。

「あの……それは？」

「これはあの山賊達が、前に貴族の館に忍び込んだ時に盗み出したマジックアイテムだそうです。どうぞ、御納め下さい」

まさかあの山賊達、貴族の館に忍び込んでたなんて……。もしかしてこの村を隠れ蓑にしたのは貴族からの追手を逃れる為？でもなんで僕にそんな物を渡そうとするんだ？

「貴方様は洞窟内で山賊達をマジックアイテムを使って捕まえた村の者から聞きました。ですので貴方様に、これは必要なのではないかと思います、我が村を救っていただいた謝礼としてお渡ししよう……。」

ふむ……。なるほど。確かにマジックアイテムを手に入れられるのは良いかもしれない。今後も使っていくかどうかはその効果次第だけど、もし使えなかったとしても、売ればそこそこのお金にもなる。今回の依頼の報酬として受け取るなら充分過ぎる代物だ。

「では、確かに受け取りました」

僕の手にある、この箱の中にはいったい何が入っているんだろうか？ ちよつと楽しみ。

「それでは皆さん。僕はそろそろこの村を出ることにします」

「もう行くのですか？」

「ええ。急ぎの旅の途中なもので」

嘘は言っていない。一応急いではいる。

「では皆の者。我らの恩人のお帰りだ。急いで見送りの準備をするのだ！」

「「「応！！！」」」

……………意外と体育会系なんですな村長さん。

僕は、悟りを開いたブツダの様な心境で、団結している村長さん達を眺めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3045h/>

異世界で歩む第二の人生

2011年7月24日00時34分発行